

悠遊

第三十一号



企業OBペンクラブ



町おこし
シャッター街に
賑わいを

矢澤 正二

足裏を
くすぐり遊ぶ
元気な子

清水 勝



悠遊

第三十一号

企業OBペンクラブ

表紙の絵 「静物」(油絵)

塚田 實

会社を退職後「何をやろうかな」とぼやっとしていたら、妻から「絵でも習ったら」と言われた。昔から図画工作は苦手な自信はなかったが、とにかくやってみることにした。

まずはデッサンだと世田谷美術館の講座をとった。そこで世田谷美術館主催の美術大学を知り、入学し基礎から絵を習った。卒業後自宅近くの絵の教室に通い今では二紀会理事の先生に習っている。

適切な指導で絵を描くことが楽しくなった。美術大学の同期生と年1回世田谷美術館での展覧会に出展している。



目 次

▽巻頭言……………	吉田 真人 4
Ⅱ エッセイ Ⅱ	
▽仕事の流儀……………	新井 良侑 6
▽ロンドンにて……………	安藤 晃二 8
▽魔改造……………	池田 隆 10
▽吉野太夫……………	池松 孝子 12
▽八十路におもう……………	市川 忠夫 14
▽静止衛星事始め……………	稲宮 健一 16
▽常の心構え……………	上田 信隆 18
▽伊吹山と竹生島……………	宇敷 辰男 20
▽賢治の郷から遠野に向かったもの……………	内田 満夫 22
▽車を使わず住める街づくり……………	大越 浩平 24
▽父の思い出……………	大津 隆文 26
▽パーキンソン症候群―車いす生活に……………	大月 和彦 28
▽山縣有朋と伊藤博文……………	大平 忠 30
▽私の散歩コース……………	大森 海太 32
▽オランダに残された二通の手紙……………	川口ひろ子 34
▽二〇五〇年誕生日に見た夢……………	川村 邦生 36
▽人生は「であい橋」……………	木村 敏美 38
▽人生を心豊かにしてくれた長友さん……………	荒野 喆也 40
▽「世界の工場」からどこへ……………	児玉 寛嗣 42
▽童謡と唱歌……………	志村 良知 44
▽私の携帯電話遍歴……………	下山 健夫 46
▽ホームページ作ろうよ……………	杉浦 右藏 48
▽喜寿に思う……………	塚田 實 50
▽海外旅行……………	中村 晃也 52
▽多摩川を歩く……………	長尾進一郎 54
▽ぶらり熱海……………	新田由紀子 56
▽戦後日本経済における二大失策……………	野上 浩三 58
▽山に登る船……………	野瀬 隆平 60
▽「君といつまでも」……………	浜口須美子 62
▽タダ飯の紳士か、メシ屋の親父か……………	浜田 道雄 64
▽虱目魚始末記……………	一杉 秀樹 66
▽チェロの音色にはまる……………	藤原 道夫 68

▽心休まるラテラノ大聖堂……………	松浦 俊博	70
▽久しぶりの台湾旅行……………	松田 昌康	72
▽休肝日を楽しんで……………	松谷 隆	74
▽おさなともだち……………	三 春	76
▽好事魔多し……………	森田 晃司	78
▽鬼のワルツ……………	八木 信男	80
▽前立腺がん闘病記……………	矢澤 正二	82
▽地元消防団はハイパーレスキュー隊……………	山縣 正靖	84
▽Independent ―英国の語学学校……………	吉田 真人	86
▽ローマのアクア……………	松浦 純子	88
▽神奈川近代文学館で楽しむ……………	長谷川 修	90

II 創作短編 II

▽暗殺前夜……………	大塚 喜子	94
▽偽メール……………	清水 勝	99
▽アトムクラブ……………	内藤真理子	104
▽スマホは進化を続ける旅の友……………	福本多佳子	109

II 活動報告 II

▽何でも書こう会……………	116
▽掌編小説勉強会……………	117
▽サロン21……………	118
▽ペン俳句のこの一年 佳句鑑賞……………	119
▽ペン川柳……………	124
▽ペン・フォト句会……………	129
▽英語を読もう会……………	130
▽何でも読もう会……………	131
▽ホームページ関連……………	132
▽クラブ活動を振り返って……………	133
▽会員名簿……………	136
▽編集後記……………	138

表紙の絵	塚田 實
アート	安藤 晃二 木村 敏美 塚田 實
	長尾進一郎 福本多佳子
	八木 信男 山縣 正靖
	(五十音順)

巻頭言

〳書く、読む、詠む〳を楽しむ

会長 吉田 眞人

悠遊三十一号をお届けします。今年も会員諸氏による多くの作品を掲載する事が出来ました。エッセイ四十三編、創作短編四編と盛り沢山になっています。

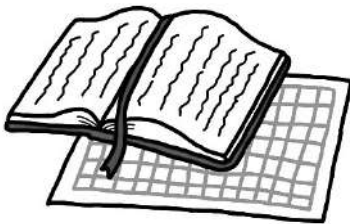
練達の文章家によると思えるものや、「その心余りて、言葉足らず」と思えたりするもの等、評価は様々に出るでしょうが、書き手の顔を思い浮かべながら読むのも、また、楽しいものです。

さらに、書き手にとっては、「心に移りゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるおしけれ」ということで、書く事の楽しさが味わえたものと推察いたします。さらに、書いたものがこうして活字になっているのを見るのも嬉しいものであります。

後半には各分科会の活動報告を載せています。様々な

方面で活発な会合が行われている事が、見て取れます。

この三十一号を手にとつて、少しでも興味を持った方がおられたらホームページ (URLは open.com) をクリックして気軽にお声をお掛けください。〳書く、読む、詠む〳をご一緒に楽しみましょう。各分科会の終了後には、反省会と称する打ち上げ会があり、ここでの談論風発のなかで一杯が、また大いに楽しいものである事を申し添えます。



エッセイ



ペン画 福本 多佳子

仕事の流儀

新井 良侑

野球の大谷翔平や将棋の藤井聡太に代表されるいわゆるZ時代の若者は、いろいろな競技での勝利を得た後の会見で、「みんなのお蔭です。練習は裏切らない。自分をさらに高め、新しい景色を見たい」と異口同音に語る。確かに彼らは明確な達成目標を持ち、しっかりと計画を立て、周りの人々の支援を受けながら、着々と計画通りに実行する。そして、練習で出来ないことは本番でも出来ないという確信を持っている。わたしたちの若い頃は、ほとんどの人が本番では練習のときよりうまくできると思っていた。だから、勝つ人は本番に強い人と言われていた。

これまでの自分の仕事の流儀を思い返してみると、まづ何人かの恩人が思い浮かぶ。最初の人は、学生時代のバレー部の二年先輩である。彼は山岳部にも所属し、一

年留年するほどの山男である。後輩のわたしに何かと目をかけてくれ、彼の下宿で多くの時間を過ごした。ある時、わたしが山登りは遭難があるから怖いというとき、「もちろん、山の自然は何が起こるか予測不能で、登山にはつねに危険が伴っている。しかし極めて安全だ」と言っただけで、なぜ遭難するかを説明してくれた。

登山計画を立て、計画通りに実行すれば遭難することは殆どない。ところが、山の上に来ると、計画してなかった魅力的な山が目と鼻の先にある。そこで、この天気なら一〜二時間で行って来れるとつい思って、安易に登りだしてしまう。しかし、山の天気は急変しやすく、晴天があつという間にガスリ、視界がきかなくなつて道に迷い、遭難する。主な遭難の原因は単なる思い付きの計画変更であり、計画通りに実行すれば、余程のことが起こらない限り遭難することはない。このような時は、誘惑に負けないで、一旦下山し、その山に登る計画を立てて、登ることだと教えてくれた。

わたしが仕事上で計画変更を嫌う原点がここにある。

自分のことはもちろん、部下の安易な計画変更は認めなかった。例えば、遠方に出張する部下はだいたい、「せっかくだから、訪問先の近くにある別の顧客のところに顔を出してきます」と軽い気持ちで言う。しかしわたしは、「時間が無駄になってもいいから、寄り道せず帰ってきなさい。どんな顧客も必要がある時にだけ、訪問すること」と指導してきた。

次の人は、今や伝説の人となった西堀栄三郎氏である。わたしが一九七三年に入社し、勤務した研究所が丁度開所十周年であった。記念事業に、西堀氏を招いて講演会が開催された。『学と業』という演題で、質疑を含めて二時間ほどの講演であった。初心の企業研究者のわたしにとって、極めて示唆に富んだ有益な内容であった。

氏は日本山岳会会長であったので、ヒマラヤ登山遠征のよもやま話も非常に面白かった。その中で、どの山に登るかを決める話が非常に印象に残った。「次はどの山に登ろうか考えていたら、登る山はひとつもない。地図を広げて、『いこ』と鉛筆を置いて決める。目標が決ま

れば、必ず登れます」と確信を持って語られた。この話はわたしが今も、目標を決める際に大いに役立っている。はからずもわたしは、「明確な目標を設定し、計画を立て、着実に実行する」という、わたし自身の仕事の流儀を二人の山男から学び、無意識に身につけた。

入社した当時の社長は、銀行出身の方で、全社員への期末報告会の度に必ず、「みなさん、顧客先がもうかるように考えて仕事をしてください」と言っておられた。次の社長は、「学知は仕事にあまり役に立たない。本当に役に立つ知識は、困ったときに出てくる知恵である」が持論であった。この知識を全社員で共有するための『困知会』を立ち上げた。また、「平凡を重ねて、非凡となす」が座右の銘であった。

「時代の感性は若者に学べ。人生の知恵は老人に学べ」という司馬遼太郎の言葉を実践してきたが、「時代の感性も、人生の知恵も若者に学べ」という新しい時代が到来している。

ロンドンにて

安藤 晃二

七十六年の頃、家族で英国に住んだ。海外生活の事を想うとき、仕事のこととはさて置き、子供達の想い出が現れる。妻と小一の長男、幼稚園児の娘を伴っての赴任、しかも、その三年前までは、五年余りの期間ニューヨーク、トロント駐在という慌ただしさがあった。この間、日本に帰国した時間があつたにせよ、コミュニケーション媒体である英語は、前歴故に、子供たちも少しは記憶しているかも知れない、という親の期待は完全に裏切られた。

しかし、まことに不思議なことに、一か月後の子供達は既に、かなり流暢な英語能力を獲得している。きっと何者かが「神の手」により、記憶を全速で蘇らせる仕事をしてくれたのかも知れない。

そんなある日、息子が学校から宿題を持って帰って来た。「日本もイギリスも同じ島国であるが、その類似点、違いは何か」と云う趣旨の質問で、日本人の生徒への特別な配慮に好感が持てた。はて何を訊かれているのだろうか。歴史や伝統からの影響、例えば徳川幕府による鎖国政策の功罪とか、あらぬ思いに襲われ、親はパニック状態。妻は赴任前に四十万円も掛けて購入した小学生用百科事典の「最初で最後」の利用となったのだが、居間に、所狭しとばかりに積み上げたが、役に立つ訳がない。

所詮、七歳の子供への質問である、「日本列島は殆どが山地であるのに比べ、イギリスは羊を飼うために、国中丸坊主にして牧場に変えてしまった」と云ったような結論とする。しかし事實は、スコットランドのハイランド地方の山岳、ウエールズの絶景の山々の風景がある。この宿題の真意は、正解で縛るものでは無いのでは、と云うことが後の展開から明かになる。学校側はこのような話題を以て、生徒と対話を行い、しかも校長直々に参加して、子供の能力、可能性を観察、評価する重要な機

会となるのだ。

その後、程なくして、学校より知らせがあり、校長と面談した。その人は五十がらみの夫人で、ベタランの教育者、落ち着き払ったその態度と云い、教養と人格が滲み出る素晴らしい人物であった。開口一番、子供達は兩人共、将来、intellectualな分野に適した人間の資質を備えていると、有難いご託宣、学校側のきめ細かい指導は印象的であった。

ここで気づいた事がある。英国という国では、適性によつて教育を積ませる、という原則に実に忠実な考え方をする国である、と云う事であった。ビジネスの世界で学卒者に会う機会は、驚く程少なかった。それは欧州のもう一つの大国ドイツにおいても然りであった。学術、教育界が要求する人材と、ビジネスのそれとは必ずしも一致しない、その在り方は、当たり前と言えば、その通りに違いない。突出して学術レベルの高いと云われているオックスフォード、ケンブリッジ卒の就職先は、七割以上が教職、研究分野に行くとは、当時の情報であった。

ロンドンのオフィスで唯一学卒のK嬢に、intellectualとintelligentの意味の違いについて訊いて見た。答えは「同じだけど、違う」。自分が遭遇した事態なり質問に対し、如何に速く反応できるかがintellectの高さを表す、という辞書にない答えが返つて来た。

こんな話に花を咲かせていたのもパブであった。このパブは、テムズ川沿いの金融のメッカ、シティの端にあり、本当に古そうだ。梁の黒色は、十七世紀の「ロンドンの大火」の際に焼け焦げた材料がそのまま使われているからだと云う。いずこも同じ、同僚同士がアフターファイブのビールのジョッキ片手に、楽しい大声の会話の時間が続く。グリーンンの皮張りのベンチに、ハンチングの老人が座り、喧騒に耳を傾け、独り微笑んでいた。

魔改造

池田 隆

テレビをつけると『魔改造の夜』をやっていた。ロボット・コンテストのように、製造業や大学の技術チームが難題珍題に挑戦し、競い合う番組である。

今回は、歩く子猫の玩具を改造し、一回のスイッチ操作で5mの助走後、6m落下させ、さらに目標地点まで20m走らせて、そのトータルタイムで勝負を決める。改造の期間は一ヶ月半、試技は二度行う。

未来自動車の開発を専門に手掛ける東京R&D、巨大重工業のIHI、名門電機ソニーの三チームが出場する。それぞれ百名ほどの若手主体の応募集団である。速く安定して走らせようと馬の脚にヒントを得た扇型足や目標地点へ向かわせる赤外線誘導など、様々な工夫を凝らしている。最大の難関はコンクリート床面へ6m落下させた時の衝撃吸収とその際の方向姿勢制御だった。

東京R&Dは弾力性のある多面体のプラスチック箱に

子猫を入れ、落下後に「起き上りこぼしの原理」で姿勢制御をおこなう斬新なアイデアだった。しかし二回の試技とも失敗。樽に入りナイアガラ滝を流れ落ちた冒険家のようだ。IHIはバラシユート方式を採用し、二度目の試技でどうにか完走する。

勝利したのはソニーだった。落下時は、上向きに開いた傘でうまく減速しながら、足の動きも停めて着地姿勢を確実に制御する。殆どの椿の花は仰向けに落ちていると綴った寺田寅彦のエッセイや、鉄棒競技などで着地姿勢が最大の評価点となることを連想する。

テレビを見終わり風呂に浸りながら考え始めた。蜘蛛の糸にならない、紐でぶら下げながら落下させてみたら。二本の平行な紐で姿勢を整える。諏訪御柱祭でも柱を綱で前から引っぱり、同時に後二本の綱で加速を抑え、向きを制御していた。予めプログラム制御された紐の巻取機（ウインチ）を出発点に置くアイデアだ。

テレビ番組でもこの案は見当たらなかった。三十年以上前にこのような番組企画があれば、きっと俺も東芝の技術者連中を束ねて応募していただろう。うーん残念

だ！ いや待てよ、もっとスケールの大きい、似たようなコンペがわが現役時代にもあったではないか。

当時、東芝は世界屈指の蒸気タービンメーカーであった。国内での競合相手は三菱重工と日立製作所、客先は電力会社。筆頭電力の東電は保守的で使用実績重視の姿勢をとる。一方、三番手の中部電力は進取的で種々の最先端課題を国内メーカーに示し互いに競わせていた。

その典型が青龍刀のような形をした長翼をステンレス鋼から軽くて強いチタン材に改造し、従来の最長33インチ翼に替わる新たな40インチ翼を開発する課題だった。長翼は長ければ長いほどタービン効率が増える。

ただチタン製のタービン長翼は世界的にも実用例がなく、材料特性や加工法に大きな課題を抱えていた。国内各社は必死にその解決に向け開発を競った。幸いにも東芝が最も高い評価を得て、それを適用した七十万kWの大容量火力発電用タービンの初号機を受注する。

その工場完成を一年後に控え、試作機による最後の実証工場試験も順調に進んでいた。後は部下達に任せて帰宅し食事中に、突然N君より電話が入る。試作機が爆発

し、工場が火事だという。彼の背後から消防車の唸り声も聞こえる。嗚呼、東洋一を謳うタービン工場を焼失させたか、気も虚ろに車で駆け付けた。すでに火は消し止められており、ボヤで済み一旦はほっとする。

しかしその後のわが開発設計陣の苦闘は熾烈を極めた。チタン製の長翼が回転円盤との嵌合部から飛散し、ロータの大振動で漏洩した軸受油が燃え上ったのだ。予定通りに安全な製品を出荷しなければ、客先の信頼を裏切り、自社の信用を大きく傷つける。社会的にもタービン技術の進展を頓挫させることだろう。

飛散の原因は嵌合接触部のチタン材特有の強度低下が、回転中の翼振動に重畳しての亀裂と判明する。

若手エースのM君を中心に従来翼よりも徹底的に翼振動を抑える工夫、「魔改造」に取り組み、再度の試技は目出度く成功し、無事に工場出荷を終えた。四十年近く経った今日も、チタン長翼を用いたこの初号機やその後継機は日本の電力供給に大きく役立っている。またこのブレイクスルー技術は世界的にも貢献したとのこと。

(因みにN君、M君は本クラブで活躍中の長尾、松浦の両氏である)

吉野太夫

池松 孝子

京に春を告げる風物詩「吉野太夫花供養」が毎年四月の第二日曜日に執り行われる。天下随一希代の太夫を偲ぶ常照寺の「吉野太夫花供養」である。

常照寺には二代目吉野太夫が法華経への篤い信仰の証として身請けされる前に寄進した朱門があり、吉野太夫自身の墓もある。彼女を偲んで毎年、花供養が行われ京の島原から太夫が参列する。太夫道中は山門から本堂まで続く。赤い着物に白化粧をした禿かぶに続いて歩く。その後を傘持ちの高く差し出した傘の内をゆったりと右、左と「内八文字」を描く足さばきは優雅で、花魁道中をも思い浮かべる。私は三人の太夫が通り過ぎるのを時間のたつのも忘れて見入った。太夫道中の後、吉野太夫墓参、吉野太夫供茶法要など一連の供養に続いて太夫奉納演奏があった。琴、舞、笙などの古代楽器の演奏だった。

「太夫」とは遊女、芸妓の位階で最高位をさす。もと

もとは中国の官位の総称であった。古代日本では五位の位に「太夫たいぶ」があり、律令制の長官の一つで芸能や儀式をつかさどることが多かった。遊女、芸妓における「太夫たゆう」の称号は江戸時代初期に誕生したという。当時は女歌舞伎が盛んでその役者を「太夫」と呼んだともいわれる。のちに遊郭が整えられ、その中で遊女の階級が出来上がったのだろう。美貌と知性を兼ね備えた最高の遊女にその称号が許され、それは世襲制であった。

京の島原、江戸の吉原、大阪の新町、長崎の丸山に太夫は配置された。「吉野太夫」は京都に代々伝わる名称で十代まで存在した。ここに取り上げる吉野太夫は太夫の中でも数々の逸話を残した特筆すべき「二代目吉野太夫」である。

彼女は、慶長十一年の生まれで寛永二十年、三十八歳で没した。島原に移る前の六条三筋町「七人衆」の筆頭だった。夕霧大夫、高尾太夫、と共に「寛永三名妓」と言われていた。

本名、松田徳子は幼少の頃、遊女の世話をする禿としてこの道に入り、和歌、連歌、俳諧にその才あり、琴、

琵琶、笙にも抜きんでたものを持っていたという。さらには茶道、華道、香道から貝合わせ、囲碁、双六など諸芸を極めた。当時、十八人の太夫の中でも突出した美しさと才能を持ち合わせていた。

命日、八月二十五日は「吉野忌」「吉野太夫忌」として季語にもなっている。

藤本箕山（寛永〜宝永年間）の著に江戸時代の遊里案内書『色道大』がある。それによると、二代目吉野太夫は太夫に昇進するやたちまち評判となり、艶やかな美貌、知性に加えて、宴席の取り持ちもうまく、蟲肩筋には名だたる大名公家が並んだとある。

井原西鶴の『好色一代男』では「これぞ女郎のあるべき姿」と褒めたたえ「亡き跡まで名を残せし太夫、前代未聞の遊女也。いづれをひとつ悪しきともうすところなし」とも残している。

馴染み客の一人、後陽成天皇の皇子で、近衛信伊の養子であった関白近衛信尋と、豪商でもあり当時の文化人として名の知れ渡った灰谷紹益とが身請けを争った。最後には本阿弥光悦の縁戚、灰谷紹益が競り勝った。



太夫の名が使われたものの一つに「吉野窓」がある。これは茶室、町屋に使われる窓で、外から見ると円形、中から見ると下が欠けたものをいう。仏教では円は完璧なものを表わす。これに対し、芸事に完成はないとして吉野太夫が好んだことからその名がついた。

また、裏千家十三代家元が考案した棚は吉野太夫の好みから「吉野棚」と名付けられている。

さらに今でも茶道で使われる袱紗や帯などの名物裂に「吉野間道」がある。これは吉野太夫に贈った名物裂からそう呼ばれるようになった。

現在でもゲームや漫画のキャラクターに「吉野太夫」の名が登場すると聞いた。こうして四百年たった今でも文化的にもその名が後世に残る太夫がいたとは。

八十路におもう

市川 忠夫

八十路を歩み始めて一年余りたった頃、近くの図書館へ行くと、館員の女性から「アンケートにご協力ください」と声をかけられました。席につきアンケート用紙を見ると回答者の年齢をきく設問があります。私自身の年齢をきかれたのは八十路を歩み始めて初めてのことです。

- (イ) 一九歳以下、(ロ) 二〇歳代、(ハ) 三〇歳代、
(ニ) 四〇歳代、(ホ) 五〇歳代、(ヘ) 六〇歳代、
(ト) 七〇歳以上。

何となくさびしさを感じながら(ト)に○をつけました。人生一〇〇年時代^レなどと最近よく言われます。それなのに、^レ八〇歳^レの文字がどこにも見当りません。

帰宅して、ふと思いついたのは、孔子様の言葉です。吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る。六十にして耳順ふ。

七十にして心の欲する所に従ひて矩を踰えず。

孔子様の言葉にも、^レ八〇歳^レはでてきません。

二五〇〇年前も今も^レ八〇歳^レを越えた人々に対する感覚は変わっていないのかとおもうと、ちょっと残念な気持ちになりました。しかしこの言葉は、七〇歳代で亡くなられた孔子様が、自らの人生を振り返って発せられたことです。^レ八〇歳^レに言及されていなくても、やむを得ないか、とおもい返しました。

「俺は八十路を歩き始めたのだ！ よし！ 何か新しい言葉を考えにゃ！」という気持ちになったのです。

周囲の人々の生き方も参考にしながら、自身の人生を振り返ってみました。これまで漠然とおもっていた^レ人生路^レとはかなり違ったものが浮かんできました。

これまででは、^レ人生山^レという一つの大きな山があり、それに挑戦するイメージだったのです。小人の頃は山に登り、大人になったら頂上で何かを楽しみ、老人になったら山から降りる。

しかし今は、人生には^レ三つの山^レがある、とおもえ

てなりません。三つの山はこんなイメージです。

わらべだけ 童岳 一九歳以下

おとなやま 大人山 二〇歳代〜七〇歳代

ひじりがおか 聖丘 八〇歳以上

岳と山と丘の違い、童や大人や聖の定義など、難しいことは分かっていますませんが、これらの「三つの山」は今のところ、私の心の中にしっくりおさまっています。

今の日本社会を見ますと、未成年山と成年山の二つがあると感じる人が多いような気がします。また最近では、老年山が見え隠れしているように感じますが、しつかり認識されているにはおもえませんが、

「三つの山」のような呼び方にしますと、これまで、赤ちゃん、幼児、児童、子供、未成年者などと呼ばれていた年齢層の人々は、皆「わらべ年齢」になります。

義務教育は一九歳まで、選挙権や飲酒は二〇歳から、とします。選挙権はつい先頃、一八歳以上になったばかりです。しかしまだ混沌としている情報時代にあつては、少し早すぎた制度変更だったとおもえてきます。

これまで、お年寄り、老人、高齢者などと呼ばれていた方々は、「おとな年齢」と「ひじり年齢」に分けられてしまっています。年齢が進むと個人差が大きくなると言われていますので、具体的な社会制度を作る時は難しくなります。しかし、「大人山」や「聖丘」をイメージすると、何か妙案が浮かびそうな気持ちになるでしょう。

「ひじり年齢」は、七五歳以上の後期高齢者を、八〇歳以上にしただけかとおもわれる方がいるでしょう。しかし、「丘」が「山や岳」とどう違うかを心に浮かべるだけで、本質的な違いが分かったような気持ちになります。

二〇世紀、人々は、資源は無限と誤解して、便利を追い求めました。「物質便利時代」を実現したので。

二一世紀、物質が有限であることを知り、同時に情報技術の開花を目のあたりにしています。多くの人々は、美しい情報の花が幸福に結実すること、「情報幸福時代」の実現を願っています。

聖丘の八十路の周りに美しく咲く花々を愛でながら、「ひじり」に恥じないような日々を送らなければなあ、などとおもいを巡らせています。

静止衛星事始め

稲宮 健一

眼前にどこまでも広がる青い海原と、地平線から上には何も無い空間。内之浦の小高い丘のレーダー・サイトから見えた絶景である。M社の伊丹の狭い設計室から解放され自分で設計した機器の動作確認のため、現地に入った。一九六五年の夏、これがプロの技術者の事始めだった。ここから打ち上げたロケットを電波で追尾し、飛翔軌跡を高精度に記録することが任務である。

内之浦の打ち上げ計画全体は東京大学宇宙航空研究所が総括的に設計し、それに必要な機器はメーカー（M社等）が製造を担当する。メーカーは機器の製造に関しては発注主と同等、さらに内部に関してはそれ以上の具体的な知識と実績を持っている。

既に日本にはロケット、人工衛星、レーダーなどの基本技術は存在するので、米国の最先端の頭脳を擁するI

RW社と提携して、国産ロケットを開発する企画があった。筆者はその部門に異動し米国人と一緒に仕事をした。しかし、この企画は実らなかった。理由は世界の潮流と大きく離れて追いつけないためだった。

世界のレベルに追いつくため、大幅な技術導入という結論に至った。そして発足した宇宙開発事業団がデルタ・ロケット（後のN1ロケット）を使用し、気象衛星、通信衛星、放送衛星を静止軌道に投入することにした。

M社の担当は通信衛星となり、他の二機に先んじて打ち上げる予定が組まれた。筆者はM社のこのプロジェクト・メンバに指名された。衛星の設計、製造は加州パロアルト市のフォード・エアロスペース（以下フォード）が担当し、プロジェクト・メンバは衛星の特性を理解し、衛星が日本側に引き渡された後、事業団の指揮のもと、衛星を実運用しなければならない。そのため、まず、衛星のあらゆる特性を理解するだけでなく、衛星の状態を制御させるため、適宜指令（コマンド）を送信して、正常に働くように維持管理するのが最低の要求条件である。

そして、予め衛星の特性に合わせて、あらゆる地上の電子機器、衛星の軌道を計算するソフトウェア等々の準備が為された。プロジェクト・チームが衛星のデータや、試験データをパロアルトで取得している間、国内ではすべての地上設備が整備された。

筆者は月面活動のアポロ計画放映時、ヒューストンの管制室で、月面飛行士と管制官が管制室を通じて一体となり、活動を推進している姿を覚えている。同じように筑波宇宙センターの管制室で静止衛星の軌道投入作業ができるのだろうかという疑問を持った。現状では個々の準備は良く整っているが、静止軌道に投入するには、厳しい時間制約のもと、各担当部門間で、連絡、判断し、チームが一团となって、あたかもオーケストラの演奏のように全員が時を一にして活動しなければならない。

この疑問を持って、フォードの首脳を訪ねた。最初、「彼等に軌道計算の精度向上の支援か」と思われたが、筆者は「軌道投入のチームに指揮者が不在なのだ。さら

に、もし今回のプロジェクトの失敗は次の受注に結び付く」と述べると、そこからフォードは大胆に動き出した。フォードの競争相手の会社から静止軌道投入を実行しているメンバをスカウトし、筑波宇宙センターに派遣してきた。こうして日米の混成チームが出来上がった。フォードはまず、文書体系、施設、設備、各担当部門の能力と敏捷さのチェックとアドバイスから始めた。

そして事業団の静止衛星打ち上げチームの二四時間三日間のリハーサルを実施した。初めは欠陥ばかり。指摘項目は素早く改善された。二階の計算結果が一階のチームに届くのが遅いと、天井に穴を明けてケーブルを通してモニターを入れるなど突貫工事が行われ、三回のリハーサルで実施可能との判断が下った。

ケネディ宇宙センターから打ち上げられた通信衛星は事業団とNASAの通信網を通じて、静止位置に適した姿勢に制御され、最後に固体燃料に点火され、七七年一月、静止位置に投入された。ミッション成功の祝賀会には総理大臣から美酒が届けられた。

常の心構え

上田 信隆

八十を過ぎるころから、自分の周りの事を考えるようになった。まずはこれまでの事の対応について反省しきりというところだが、ともかく時間の経つのはこんなに早いものだというのが実感である。「少年老い易く学成り難し」である。こんな自分のなさけなさに愕然とさせられる。

次に思うことは世の中はなかなか自分の思うようには動いてくれぬということである。特に時代の変化に追いついていけないことが年と共に顕著になってくる。自分ではかなり柔軟に変化に対応出来てきたと思うが、ここ数年の時代の変化には驚くことが多い。

卑近な例を申し上げればまず生成AIである。半導体の進化もさることながら、すべてのデータの処理能力の向上には目を見張るものがある。AIの倫理の問題点は

後から分かることが多い。

私は七十を過ぎてから、趣味として俳句を楽しむようになった。最近では囲碁の仲間も同時に増えている。ご存じのとおり、囲碁のAIソフトは大分前から、棋士をしのいでいる。最近では、ほとんどのタイトルが二十前後の棋士で占められ、三十を過ぎた棋士はベテランの領域になっている。

一方俳句の世界ではまだまだ老人が頑張っている。これは多分に俳句の平均年齢が七十五というところから来ているのかもしれない。私は昨年から生成AIで俳句を作ること 시작했다。最初の数か月はAIの俳句はおぼつかないものがほとんどであったが、数か月たつとみるみる上達している。ほとんどは俳句の体をなしている。評価は別として俳句を始めた人達の領域には十分耐えられるものになってきた感じがする。この数か月での進歩を見れば俳句の上達も夢ではないと思う。生成AIがそれだけ人間の脳細胞に近づいているのかもしれない。

ともかく新しい技術についてはトライすることが大事だと思う。人から聞いた話や新聞などの記事の反応より、

實際使った感触が大事だ。なんと言っても自分の納得が一番。こんなに生成AIはすごいのだと肌（脳）で感じる事が大切だ。

AIは戦争でも大活躍である。ウクライナ戦争でもガザの戦闘でも今や戦争にはAIは欠かせない。戦争の方法もひと昔前とは大幅に変わった。大国といえどもAIを駆使しなければ勝利もおぼつかない。

しかしAIが勝利をもたらすかは定かではない。AIは負けない選択をするものだと思う。所詮AIは道具だから、それを使いこなしたところでも必ず勝つとは言えない。失敗をしないことは確かなようであるが、必ず勝てるものではない。

結局は何事も失敗を重ねたほうが自滅する。自滅を待つのがAIの真骨頂というものだと思う。戦争はそれだけに長期化するものだ。

私たちは一人では生きていけない。好むと好まざると組織の中で生活をしいられる。最大多数の最大幸福が民主主義の法則ならある程度の我慢が私達には必要だと思

う。人それぞれに考えや生い立ちが違うわけだからある程度は人の意見に耳を傾け、尊重しなければならぬ。人を信用し、敬うことが出来ればこの世の中は結構楽しいものかもしれない。

「隗より始めよ」。まず自分の周りの人から気持ちよく話をするようにしたい。人の長所を理解できる素地を作らなければならぬ。

人を愛することは人を大切にすることだと思う。愛することが出来ればこの世の中は結構楽しくなるような気がしてならない。残り少ない時間を楽しく過ごすには、寛容と忍耐を身に着けるのがおすすめであろう。

朝起きてみると途端にこの世が明るく見えてきて楽しい生活がはじまれば嬉しくなる。何事も自分次第ということか。

それにもまして健康は第一と思う。

「健全な精神は健全なる身体に宿る」

宗教家でもない、脳学者でもない私が残り少ない時間を楽しく過ごすにはこの程度の心構えを最低でも持たなければならぬ。

伊吹山と竹生島

宇敷 辰男

琵琶湖周航の歌にも歌われた竹生島と、日本百名山にもなっている伊吹山（標高一三七七^{メートル}）が、前から気になっていた。

その昔、近江の海などと呼ばれていた湖が、竹生島に祀られた弁才天がもつ楽器の形に似ていたので、江戸時代から琵琶湖と言われようになった。

去年の夏、マイカーで湖東に向って名神高速を走り、初日に伊吹山を訪れた。関ヶ原ICで降り、伊吹山ドライブウェイを走ると、九合目まで車で上がれる。標高一二六〇^{メートル}の駐車場から、歩いて緩やかな一^{キロ}程のコースを登っていくと、約四〇分で山頂に着いた。

登山道沿いにはコオニユリや白いシシウド、イブキトラノオが咲いている。ただ最近では野生のニホンジカの相当地な被害を受けているそうだ。それでも柵で守られた斜

面には、ピンクのシモツケソウが一面に群れて咲き、湖から吹き上げる風に揺れながら琵琶湖を見下ろしていた。

わき立つ雲と広がる霞の下に、織田・徳川軍と浅井・朝倉軍が元亀元年（一五七〇年）対峙した姉川が流れている。集落の間を蛇行し田畑を潤し、長浜から広い湖へと流れ込んでいた。西日に照らされた湖面には、竹生島がポツカリ浮かび、水面が光り輝いていた。

天正元年（一五七三年）織田信長が、妹・お市の夫の浅井長政の居城、小谷城^{おたにしよ}を攻めた。このとき木下藤吉郎が活躍し、小谷城が落城する直前、お市と三人の娘を救い出した。浅井氏が滅亡した後の領地を与えられ大名に出世し、羽柴秀吉と名乗り、天正三年（一五七五年）長浜城を築城した。

天正十年（一五八二年）、本能寺の変の後、織田家は秀吉の勢力と、お市の方と結婚した柴田勝家の勢力に二分され、翌年、賤^{しず}ヶ岳^{がだけ}の戦いで柴田勝家は秀吉に敗北した。

翌朝、長浜の港からクルーズ船に乗って約三〇分、竹

生島を訪れた。

竹生島には、むかし伊吹山の神が、浅井岳（現在の金かな糞くそ岳、標高一三二七メートル）の神と高さを競い、負けた伊吹山の神が怒って浅井岳の神の首を切り落とし、その首が湖に落ちて竹生島が生れたという民話が残っていた。

朝の光に照らされた湖面には、縮ちぢ緬めんのように穏やかな細波が立ち、魎えりと呼ばれる定置漁の竹筒が立ち並んでいた。産卵のため魎えりに集まる鮎あゆや鮒ふなを網で獲るそうだ。

水鳥保護のラムサール条約湿地である琵琶湖の上を、カモやカモメ、サギ達が力強く飛んでいる。白い水鳥が舞う竹生島に近づくと、青い湖水の上に寺社の御堂が建ち並んでいた。

船着場から入山し一六五段の急勾配の石段を登ると、弁才天を祀る寺の本堂が建っていた。ここは、聖武天皇の夢枕に現れた天照大神の神託で、勅命を受けた行基が神亀元年（七二四年）弁才天降臨の小島に堂塔を建立した聖地である。

行基（六六八年～七四九年）は飛鳥時代に河内（現在

の堺市）に生まれ、生涯に四十九の寺院を建立したと言われている。それ以外にも奈良時代から続く京都の西芳寺や大阪の葛井寺など行基ゆかりの寺院は多い。庶民に仏教を広め民衆の信頼を集め、晩年は聖武天皇が推し進めた東大寺の大仏造営で全国を行脚し勸進役を担った。

湖岸に迫り出た社殿に立つと湖面を渡ってくる風が気持ち良い。松越しに長浜の町が広がり、うねる湖面の先に賤ヶ岳、その右手の奥にひとときわ高く伊吹山がうすく霞んでそびえていた。あの山の向こうは関ヶ原、手前の湖東には戦国の要衝の地が連なっている。

竹生島の寺には光明皇后が納めた写経も残されており、今から一三〇〇年前、日本書紀が完成した奈良時代から生き続ける一つの国の歴史に出会うことが出来た。

行基が造ったと伝わる竹生島の秘仏弁才天像は六十年に一度、次回は二〇三七年に開帳される。

賢治の郷から遠野に向かったものの

内田 満夫

神戸在住の私にとって、OBペンクラブの会合はめつたにない上京のチャンスだ。それを好機と、かねてよりマークしているスポットをいくつか巡って帰るというのが、いつしか楽しみとなっていった。

今回の目玉のひとつは、宮沢賢治のふるさとイーハトーブ（岩手県花巻）と、たびたび耳にして気になっていた遠野のほずだった。

合評会（昨年五月十八日、東京）のあと、北海道新幹線の海底トンネルを初体験し、半世紀ぶりの津軽海峡を連絡船で戻り、八甲田、十和田、奥入瀬ラインを経て、五月二十一日の夜遅く東北本線の花巻駅に降り立つ。

宮沢賢治についてはそれまで、「雨ニモマケズ……」の詩と、「イーハトーブ」や「銀河鉄道」の映画や舞台程度のかかわりしかなかった。それが数年前、宗教学者・

山折哲雄の講演を聴く機会があったことで、あらためて興味を掻き立てられていたのである。

病がちの氏は当時八十八歳。直前に死の床から生還して考えが変わり、知識の重しを外すべく蔵書の処分を決意し実行する。最後まで捨てられなかったのが、親鸞全集と宮沢賢治全集だったという。因みに氏の博士論文は親鸞の『教行信証』である。

氏によれば、二十世紀を代表する文学者・思想家は宮沢賢治を置いて他にないという。それが手放しの賛辞、ベタ褒めなのだ。親鸞研究第一人者の宗教学者に、そこまで言わしめる宮沢賢治とは何者なのか？ それほどに偉大な存在なのか？ 私のなかの賢治株は俄然、急騰したのだった。

地元花巻自慢の偉人だけあって、宮沢賢治記念館の豪華、充実の展示ぶりに圧倒される。ざっと観覧して流したのだが、そのなかで引っかけることがひとつあった。日蓮宗（法華経）に入信した賢治が、浄土真宗からの改宗を実家に強く迫ったというのである。

そんな話は自分の記憶にはなかったので驚いた。賢治

はそんな狭量な人物だったのか？ 急騰した賢治株が少々毀損する。ところが神戸に帰ってからすぐ、さらに賢治株の急落する体験が待っていた。

地元のミニシアターにちょうど、質屋を営んでいたという賢治の父親・政次郎（役所広司）が主役の、『銀河鉄道の父』が掛かっていた。そのなかで賢治が、実家の浄土真宗の法事催行の場に闖入し、日蓮宗の題目・法華経を大声で唱え歩く場面が出てくるのだ。

賢治の帰依がここまでとは思わなかったので、ショックを受けたのである。てっきりメルヘン童話作家だと思っただけで、宗教師としての一面があったとすると賢治に対する見方も変わってくる。

彼の著作のなかに、「個人、集団、社会、宇宙へと進化し、銀河を自らの中に意識して……」なる眩きがある。彼にとって銀河は単なるメルヘンの舞台ではなく、その先に信仰者の多くが求めてやまない宇宙の真理、自然の造物主の姿を見ていたのかもしれない。そうであれば賢治も少しは持ちなおす。

その日のもうひとつの目玉の遠野には結局、行きつくことができなかった。花巻を出るときから呑み始めた缶酒が効いて、うつらうつらしているうちに気づいたら、終点の釜石だったのだ。花巻から三陸海岸の釜石までは約百キロの道のり、そのちょうど半ばが遠野である。「まもなくとおのとのおの」。車内アナウンスを確かに耳にしてはいたのだが……。

遠野への立ち寄りにはあきらめた。のどかな山野の続く沿線だったが、釜石からの帰途の記憶もなぜか曖昧だ。道中から、遠野がするりと抜け落ちていく。山神、山人、山女が棲むという遠野は、辿り着こうとして辿りつけない妖地なのか？ スマホに一枚だけ残る、遠野のホームに立つ驛標は誰が撮ったのだろうか？

人生の残り時間が益々少なくなるというのに、訪ねたスポットは逆に増えるばかりだ。どんなところだろう？ 出かける前のワクワク感がたまらない。期待外れも多いが、とにかく行ってみれば気の済む私である。もちろん遠野には再挑戦するつもりだ。

車を使わず住める街づくり

大越 浩平

当会会員諸兄も、あと10年も経てば運転免許更新の出来ない年齢になる。途端に諸兄はマイカーが使えず、バスと徒歩が移動手段となる。通勤、通学、通院、買物が困難に陥る。全国の国民も同様だ。とすれば交通の便の良い地域に引越せざるを得ない。地方の状況は深刻で人口が流失し、人口減少によりバスの運行も減り益々住みにくくなる。地方経済は疲弊停滞し過疎地も増える。バス頼りの公共交通網は地方経済圏を破綻させる。交通渋滞は激しくなりバスの定刻運用もままならない。

マイカーなしで暮らせる街が求められる。先進地域がある。富山市だ。2006年J.Rの廃線に伴いその路線に新交通システム、L.R.Tを導入した。L.R.Tとは「ライト・レール・トランジットシステムを指す。沿線に都市機能を集約させた。その結果、開業1年で、60代以上の高齢者の利用が平日で3.5倍、休日で7.4倍に増え、

「コンパクトシティ」として評価され、脱マイカー依存社会の明かりが見えた。

宇都宮市は渋滞解消とマイカーなしで移動できる交通システム、新しい街作りを約30年前から検討し、L.R.Tの導入を決めた。建設は既設道路の活用を中心にするので地下鉄の建設より遥かに安く工期も短い。

国内で新たな路面電車の建設は75年ぶり。全路線のL.R.T新設は全国初だ。車に依存しない住みやすい街づくりの起点として注目したい。未だ街づくりの全貌は見えてはいないが、期待したい。街づくりには利害関係が伴うので、自治体は慎重に地域住民、交通関係者と意見を交わして大局観を持って立案する必要がある。

L.R.Tは、低床車両なので乗り降りが楽で、高齢者や歩行弱者に優しい。マイカーなしの移動を容易にするため、駅には、駐輪、駐車を整備し、電動アシスト自転車やキックボードサービスを誘致する。路線バス運行会社はL.R.Tの運航に伴い重複路線を廃止し、バス運賃を値上げした。その一方で路線駅からの遠地には新しいバス路線を設け、L.R.Tと共同で交通利便性を高める。

遠地でマイカーなしで生活できれば、過疎化の歯止めがかかり、都会からの移住民も期待できる。

夢は広がる。私見だが、鬼怒川に沿った氾濫危険の少ない場所に、農地付き分譲住宅群や、野球やサッカーのできる小学生・中学生向けの広場や、春の花木、秋の紅葉が楽しめ、関東平野を眺め四季を楽しむ自然公園を造成する。ベンチを多くし高齢者の散歩も容易にする。地域住民の広場が観光地に代わる可能性は大きい。

農地に作られた規格外の野菜や果実等を主体に、お裾分けの精神で供給する「もったいない市場」を創設する。それらの加工食品も良い。一方では千葉や福島から規格外の漁獲品を販売する。農産物も海産物も新鮮で安価が売りだ。住民が趣味で作った作品等の販売も面白い。

リモート勤務の環境が整備され、車の運転ができなくても、自然が豊かで住みやすい。街の評価が高まれば、家賃も安いので老夫婦や、のびのびした子育てを求める若い夫婦の移住も期待でき、地域は活性化する。

宇都宮のLRTに試乗した。宇都宮東口―芳賀・高根沢工業団地14・6キロだ。乗車にはバスモやスイカが使

われ、乗車用と降車用タッチパネルがありスムーズに乗り降りできる、カードを持たない人は停留場で整理券を受け取り、降車時に現金精算。低床車両なので楽に乗れる。揺れはほとんどなく快適だ。車両はワイファイも完備し、沿線の宇都宮大学生等に喜ばれている。乗車して面白かったのは止まれの信号だ。通常の丸い赤信号とは異なりバツ印の赤信号だ。新交通に市民への安全対策は必須だ。広島で40年超、路面電車の運行に携り「路面電車の神様」と呼ばれた交通マンを懇請し安全統括管理者として経営に参加して貰っている。

鬼怒川付近は自然が豊かで、県道にはチェーン店が勢ぞろいし、終点は工業団地だ。残念ながら終点到飲食店が見つからず帰路に就く。LRTに通勤を変えた工業団地の従業員は嬉しいだろう。なぜなら帰宅の途中同僚たちとの一杯懇親が楽しめる。

地方の活性化は、マイカーなしの住みやすい街づくりが肝だ。国や自治体は地方交通網を見直して、公共交通の充実化、地方のインフラ整備に重点投資することだ。

地方公共交通網の利便性を高めることが求められる。

父の思い出

大津 隆文

私は今年七回目の年男となり、感慨深いものがある。幼少期はひ弱と言われていた私がここまで来られたのは、お世話になった方々のお蔭である。その筆頭は両親である。母は百二歳まで長生きしたが、短命だった父には親孝行らしいことは何もできなかった。

父は明治四五年（1912年）愛知県瀬戸市の郊外で生を受け、昭和五五年（1980年）六七歳でこの世を去った。

生家は零細農家で学歴は高等小学校卒、経済的に中学校には進めなかったようだ。向学心は強く独学で代用教員の試験に何回か挑戦したと聞いた。他の科目は合格したが、音楽だけは紙に書いた鍵盤で練習に励んだが合格できなかったとのこと。結局名古屋で警察官になる道を選び、定年までその道歩んだ。警察では出世はせずいわゆる万年巡査、長くを駐在さんとして過ごした。

小さい頃自分の親が世の中のために働く警官であることは誇らしかった。当時の田舎では警官は一目置かれる存在で、小学校の入学式や卒業式に来賓として招かれたりしていた。その反面、警官の子、駐在の子として、世間が見ている、悪さはしていけない、というプレッシャーはいつも感じていた。私が冒険心に欠け自己抑制的なのはその影響かもしれない

人柄は地味だったが仕事には陰日向なく真面目に取り組んでいた。真夏の暑い盛りでも決まった時間になると町内巡回に出かけた。帰ってくると汗まみれの体を幼い弟や妹が手拭いで拭いてあげていた。凍てつくような冬の夜も同じだった。その後ろ姿から無数の「縁の下力持ち」が世の中を支えていることを教えられた。

小学校六年生の時、担任の先生が「私は君のお父さんを尊敬する」と言ってくれたことがあった。あれは父親を批判的に見始める歳頃になった私への戒めの言葉だったのだろうか。

父から叱られた覚えは余りないが、一度注意をされたことがある。それは私が欲しがっていた長靴を父が買った

てきてくれた時のことだ。私が喜びを素直に表わさなかつたのか、「嬉しいのか嬉しくないのか、ちゃんと態度で示すように」と言われた。以後人に何かして貰った時ははつきり「ありがとう」というように心掛けている。

警察は上下関係のはつきりした組織だ。父の漏らす言葉から組織の中の人間のあり方を色々学んだ。

上級職で入ったいわゆるキャリアが上司として赴任することがある。そうした人を部下は陰で「うちのボン」と呼んでいると聞いた。仕事をするのは肩書きではなく、実務を担っている人達だと心に銘じた。

警察を定年で退いた後、病院の守衛として勤めた。再就職して間もなくまだ職場に馴染めない頃、元の上司が様子を見に来てくれたと、ひどく喜んでいた。大切なのは人間関係、思いやりとこれも心に銘じた。

家庭では子供四人を夏の海水浴や順番に伊吹山登山に連れて行ってくれた。子煩悩な父であったが、私は長男のせいか弟や妹のように父に甘えたりなついたりはしなかった。悔やんでも詮ないが申し訳なかった気がする。

子供達が大きくなると、父は小鳥の飼育、山野草の栽

培、石の収集、山歩き等を一人で楽しんで来た。いずれもささやかなもので、石の収集も河原で珍しい石を拾ってくる類いだった。父の趣味には格別興味を持たなかつたが、後年俳句を始めてあの頃小鳥や草花の名を教わっておけばよかつたと後悔している。唯一父の趣味を引き継いでいるのは山歩き。一人山道を歩いているとやはり自分は父の血を引いているとの思いがわいてくる。

第二の職場で定年を迎えて間もなく、健康診断で異状が判明、家族は臍臓ガンで余命三ヶ月と告げられる。本人も家族もこれからゆつくり余暇を楽しめる、楽しんでもらえろと思っていただけに、本当にショック、気の毒だった。働き詰めで終つたような人生だった。

入院先は自分が勤めていた病院で、顔なじみのスタッフが親切にしてくれた。当時のこととて本人に告知はなかつたが、気付いていたのかいなかつたのか。最後まで余り苦しむことがなかつたのがせめてもの救いだった。

父より十七年近く長生きし、毎朝仏壇で拝む写真の父は今の私より随分若い。だがいつまで経っても父は父、親として私を見守ってくれている。

パーキンソン症候群―車いす生活に

大月 和彦

運動不足にならないように週二〜三回プールへ行き、水中の散歩で汗を流した。

歩き出しの一步が出ない、足が地面に張りつく感じの「すくみあし」の症状、歩くとき脚を引きずる、歩き出して数分で右の足裏が硬直するなど生活に支障をきたすようになる。

二〇一八年、T病院神経内科を受診する。手と足の動きを観察し、血液検査の結果、異常なし。

二〇二〇年一月、風邪でかかりつけの内科医を受診すると、歩き方と表情を見て驚く。パーキンソンではないかと疑い、「治療法がなく寝たきりになる厄介な病気だ」と、専門医の受診を勧めた。

同年三月、T病院神経内科へ。都心の大学から派遣された医師の診察が始る。

まず、CTスキャン検査、「脳の萎縮が見られるが年齢相応のもの」。次に心筋交感神経シンチ検査、「心臓に陰った部分があるがよくある例」。四月にダットスキャン検査、「ドーパミン量を調整する脳の部分の減少が見られる」。最後に脳血流SPECT検査、「前頭頭頂葉の

二〇二〇年十月、近くのT病院神経内科でパーキンソン症候群の一種「大脳皮質基底核変性症」と診断された。八十五歳だった。初めて耳にする病名。パーキンソン病と症状が似ているが、異なる病気の集合体。大脳のある部位の萎縮や血流の低下が見られるが、原因がわからない難病。日本では十万人に三・五人というめずらしい病気の発病から五〜十年で寝たきり状態になるといわれる。

二〇一五年ごろから膝が痛むようになる。階段を上がるとき、キュッキュツと音を出すなど膝と脚に異変が生じた。

膝関節変形症と診断され、ヒアルロン酸注射などの治療を受けていたが症状は変わらなかった。

以前から、細かい字が書けなくなり、声がかすれ始めたこととうすうす気づいていたが、年齢の所為にした。

右部が萎縮、血流の低下が見られる」。

同年十月、一連の画像による精密検査などから医師の診断は、パーキンソン病ではなく「大脳皮質基底核変性症」。「この病気は、治療法がなく、難病に指定されている病気です」と淡々と喋り込む。しばらくして「難病の認定申請をするときは証明書を書きます」。

ある程度のこととは予想していたものの米寿に近い老人が難病とは……。本人と家族にとっては大変なこと。これからの健康管理のことなど聞きたかったが、取りつくしがない。先端医療を研究している医師の役目は病名の確定まで、ということなのか。

二〇二二年夏、庭で身体バランスをくずして転び、左の肋骨四本を折るアクシデントに遭う。鎮痛剤だけでの自宅養生が終わり、秋から車いす生活に入る。

車いすで街に出ると目新しいことが見えてくる。いつも利用する私鉄の全駅にエレベーターが設けられている。改札口やホームから離れている例が多いが、助かる。公共的な施設や駅には多機能トイレが設置されていて、あ

りがない。

昨秋、信州へ行くため東京駅へ。新幹線ホームに駅員が二人、車いすに乗ったままで乗車するのを手伝ってくれ、降車駅にも連絡したという。

たまに電車に乗るとほとんどの場合座席を譲ってもらえる。

昨年の春、老妻の押す車いすに乗って信号機のある交差点にさしかかる。段差がある横断歩道を渡るとき、立ち上がりとして尻もちをついて転倒。もたもたしていると、道路工事の警備員や歩いてた人が来て助けてくれた。「ありがとうございます」を連発。逃げるように脇道に入る。

病名が判明してから三年。歩行と発語の障害のほか、嚥下能力の低下、痰つまり、便秘など筋肉の劣化による症状が進んでいる。加齢による衰えも加わった動き・症状だから自然体で対応するしかない。

今は、介護保険のリハビリ施設で同年配の仲間と体操や筋トレなどを楽しんでいる。

山縣有朋と伊藤博文

大平 忠

令和四年（二〇二二年）九月、安倍晋三元首相の国葬で菅義偉前首相が述べた弔辞に、伊藤博文の死を悼んだ山縣有朋の短歌が引用されていた。

語りあひて尽しし人は先立ちぬ

今より後の世をいかにせむ

明治維新は維新三傑の西郷隆盛、木戸孝允、大久保利通が牽引し、引き継いだのは伊藤と山縣であった。伊藤と山縣が初めて親しく話をしたのは、山縣が松下村塾に入門する直前の伊藤が十六才、山縣が十九才の時である。以来五十二年にわたり、二人がどのような「語りあひ」をしてきたのかを辿ってみたい。

山縣は伊藤より三才年上だったが、山縣が奇兵隊から軍人の道を進むのに対し、伊藤は早くから木戸孝允の下で働き、大久保利通にも認められて、順調に政治の世界で若くして頭角を現していった。

一方山縣は、軍人としては最高の陸軍卿まで上り詰めるが、その軍人生命を揺るがす危機が三度あった。一つは、奇兵隊出身の山城屋の官金借り入れ事件。これは、西郷に救われた。二つは、その西郷を意識して征韓論争時に逡巡した挙動をし、木戸に見放されそうになった。これを伊藤は、岩倉具視、大久保に働きかけて救った。三つは、近衛砲兵隊の反乱という竹橋騒動である。責任をとつての陸軍卿辞職に際し、伊藤は、参謀本部を新設し参謀本部長に据えることで救った。伊藤には維新の苦労を共にした同志としての友情があったからであろう。

明治十一年（一八七八年）から明治二十年（一八八七年）にかけては、伊藤は政界のトップであり、その間伊藤は山縣を信頼し山縣は伊藤を助けるという関係が続く。

しかし、国会開設を機に政党設立の運動が高まるや、山縣はこれを忌避し、伊藤は自然の流れと受け止めた。伊藤の世界の動き時代の変化に対する洞察は、山縣には理解できなかつた。これを起因として、その後の議会政治、政党政治、さらに中国、韓国についての二人の考えと行動の乖離は広がっていく。

明治二十三年（一八九〇年）、明治憲法制定の後、議
会政治の運営については、伊藤は健全な政党の育成と提
携を意図した。山縣は、政党を抑圧し藩閥官僚の結集を
図り、後に彼らを貴族院へ議員として送り込んだ。山縣
は伊藤への恩義はあったが、政党政治は国のためになら
ずと心底本気で考えていたのだった。二人の政治思想の
違いから確執と闘いは多くなっていた。

ただし、日清戦争、日露戦争の国難に際しては、心を
一つにして二人は対処した。戦後の大陸経営の方針につ
いては考えに隔たりがあったものの、山縣は外交案件で
は伊藤を立てていた。

伊藤は、日露戦争後、韓国を保護国とするが併合はせ
ず、韓国の近代化を促進させるという構想を持っていた。

しかし、明治三十九年（一九〇六年）、伊藤が韓国統
監となってもなく明治四十二年（一九〇九年）七月に、
桂内閣は日韓併合の方針を唱える。併合後も、伊藤は韓
国の近代化を進め、植民地議會を設立し韓国の自治を認
めようと考えていたと思われる。そしてまた、清国に自
ら出かけて「憲法政治」を説き、極東の安全と秩序を安

定させようという大構想もあった。そして、西欧にこの
構想を理解させる根回しも考えていたという。伊藤の思
いは、かつて勝海舟が唱えた、日・韓・清が手を結び西
欧列強に対抗するという構想と共通するものがある。山
縣には考えもつかぬ構想だった。

明治四十二年（一九〇九年）十月、伊藤博文はハルピ
ン駅で安重根に撃たれて亡くなった。六十八才だった。

山縣の短歌にある伊藤と「語りあひて」、考えは異な
るも国に「尽しし」五十二年間だったのである

伊藤亡き後の「今より後の世」は、どうなったか。伊
藤の死後、日韓併合の時期は早まり軍人と官僚による直
接統治となった。清国を加えた極東団結構想は消滅した。
国内では、軍部に対する文民チェックの機能が薄れてい
く。山縣がもし伊藤と「今の後の世」においても語りあ
っていれば、その後の日本が辿る姿は大きく異なってい
たであろう。

菅前首相の胸中にも、安倍亡き後の今後の日本が果た
して大丈夫かの不安が湧いていたのではないだろうか。

私の散歩コース

大森 海太

今から三年前、私は文京区小石川にある伝通院墓地裏の小さなマンションに越してきた。伝通院は徳川家ゆかりの寺で、薨には葵の御紋が金色に輝いており、家康の生母、於大の方や千姫など徳川一族の面々が祀られている。明治以降は一般にも開放されて、佐藤春夫や柴田錬三郎の墓も見ることが出来る。

このあたりは小石川台地の南端に位置し、江戸時代には東京湾の海辺が近くまで迫っていた一带で坂道が多く、日々の散歩には運動になるところである。近くの小日向の住宅街から坂を下ると、昔の神田上水跡に巻石通りが曲がりくねっており、さらに進むと東京ドームが見えてくる。

わが家から言問通りを東に、本郷通りを越えて左に下

ると、つつじ祭りでは有名な根津神社にたどりつく。子供のころは縁日が楽しみでよく遊びに行ったものだが、最近ではこんなところにも外国人の姿が目につく。あとは向ヶ丘の寺で都家かつ江の墓をちょっと拝んで帰る。

一番のお気に入りコースは根津よりさらに東、浅草に近い合羽橋の道具屋街だ。数百メートルの道の両側には厨房道具、食器などの店がぎっしりと並んでいて、器道楽の私は目移りがしてウロウロ、キョロキョロ、つい買わなくてもいいものを買って、あとからカミサンに白い目で睨まれる。

平日でも人通りが多く混みあっているが、最近では半数近くが西洋人の観光客であることに驚かされる。確かに世界中見回しても、あんな所はほかにないんじゃないかなろうか。ここからは上野公園を抜けて、自宅まで約一時間ウォーキングである。

北へのコースでは小石川の植物園から千石、とげぬき地蔵を経由して白山通りを横切り、染井霊園に至る。

ここには高村光雲など有名人の墓があるが、それよりも柴井ザクラをはじめ多くの木々が茂っており、こんなところに埋めてもらったらいいなあ、などと考えこんでしまう。帰りは西ヶ原に出て都電荒川線で大塚駅へ。ここからは都バスで伝通院まで。この間シルバーパスで運賃はタダである。

家から北西方向に一時間弱歩くと、池袋駅に到着する。池袋には西武、東武デパートや大きな本屋（ジュンク堂）があつていろいろ楽しめ、時間がつぶせる。

帰りに雑司ヶ谷の墓地を歩くと、ここもまた緑が生い茂る安らぎの地。さらに護国寺、音羽の講談社、大塚の筑波大付属高、お茶の水女子大の横を経て春日通りから伝通院へ。

南西の方で楽しいのは神楽坂界隈だ。JR飯田橋から一キロ弱の通りは若者たちで賑わっており、両側にはきれいな店やレストランが立ち並ぶ。なかで私のご最良は西端の「AKOMEYA」。小洒落た食品、雑貨などが

並べられているが、たまに小田原の木製食器「菌部」のワケアリ商品（皿、小鉢など）が安く売られていて、ついつい買ってしまうことがある。

神楽坂から市ヶ谷、牛込方面に歩くと、細工町、納戸町、二十騎町、山伏町、甲良町、薬王寺町など、ゆかしい町名が続いている。

以前の東京にはこのような町名がアチコチにあったのだが、昭和三〇年代に外神田や内神田のようなつまらない呼称に統合されてしまった。郵便配達には便利かもしれないが、「心なきワザにこそ」。

南へのコースでは、地下鉄後楽園駅から東京ドームの横を通り、JR水道橋駅から神保町の本屋街に至る。近くの学士会館では月二回、へぼ碁仲間の集まりがある。

などなど最近の散歩コースの一端をご紹介します。まあ、ほかに用事がない日は雨でも降らないかぎり、一時間前後のウォーキングを楽しんでいる。カネがかからないし、元気でいられるうちは出来るだけ続けていきたい。

オランダに残された二通の手紙

川口 ひろ子

禁教と鎖国の江戸時代、ヨーロッパ諸国の中で唯一日本との貿易を許されていた国はオランダであった。長崎出島に住むカピタン達は、徳川將軍家への献上品を携えて約三か月かけて江戸との間を往復した。一行を迎えた宿は日本橋長崎屋、家康公にお供して江戸入りした御用商人だ。当初は珍品を鑑賞するのみという受け身の形であったが、時代が下るにつれて背後にある豊かな海外文化を吸収し、医学、科学の知識を学び活用しようという姿勢に変化していった。外国文化を理解する為には語学が不可欠、結果蘭語の学習熱の最盛期を迎えることとなる。

各藩の蘭学者や蘭方医から成る日本勢と定期的に訪れるカピタン達との情報交換も活発に行われ、異人宿長崎屋の二階座敷は東西文化交流のサロンのような場所となっていた。日蘭の交流は江戸市内だけではなく、江戸と長崎出島の間で度々交わされた手紙等によって拡大す

る。カピタン達と長崎屋の家族の温かい心のふれあいを物語る手紙が現在オランダに残されている。以下は、オランダ・ハーグ市の中央図書館に所蔵されている長崎屋の二人の娘つる、みの、が送った礼状だ。二通ともカピタン・プロムホフに宛てたもので、彼が長崎屋滞在中に受けた親切のお礼として二人の娘に贈ったアクセサリーや指輪などについての感謝の言葉が述べられている。

オランダ語の手紙

いとも尊敬せる商館長プロムホフ様

私たちは、貴方様が贈って下さった二つの金の縁付きのコップ、十二個の小さなボタンと二個の指輪を確かに受け取りましたこと……(中略) 私たちは常に貴方様がもう一度江戸に来られます様期待して居ります(以下略)

江戸の長崎屋の娘 おつる おみの

仮名文字の手紙

御ふみ之事御礼申しあげ参らせ候……(中略) 先々したいに御あつさにむかひ候へともいよいよこ機嫌よくいらせられ候御事……(中略) 誠にまことに御礼申し上候しるしまて御座候 いつれ来はるは御めもしさまにて

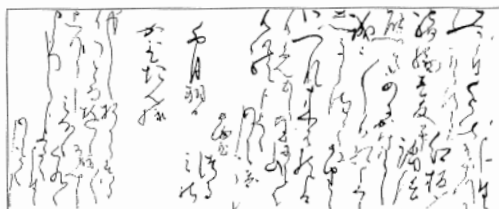
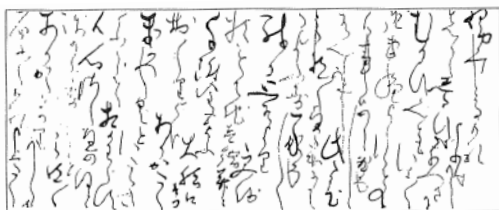
山々御礼申上り候　めて度かしこ

かひたん様

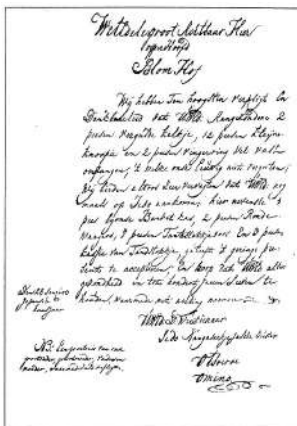
長崎屋　つる　みの

二通とも十歳代の娘達によつて書かれたものとは考えにくく、またこの見事な仮名文字をオランダ人が判読できたとは考えられない。いずれも日本人通訳の協力があつてのことと察せられる。彼らは幕府の公的翻訳や通訳に従事していた有能な人材で、カピタンを訪ねて度々長崎屋に足を運び、家族とも親しく和やかなお付き合いが続いていたという。そして、異国の人を迎えることを誇りとしていた宿の娘のひたむきな願いを叶えるべく、持てる力の全てをこの手紙に注ぎ込んだのではないかと想像できる。鎖国制度がほころび始めた江戸時代後半、この様な高度な文化を持つ異国への憧れ、進る向上心が積もり積もつて鎖国幕府の崩壊、明治維新につながつて行つたようにも思える。

直木賞作家葉室麟は、海を渡り異国に大切に保存された二通の手紙に心を動かされてか、ミステリー小説『オランダ宿の娘』を早川書房より出版しています。幕末、明治維新に興味をお持ちの方は是非お読みになつて下さい。



仮名文字の手紙
オランダ国立中央文書館蔵



オランダ語の手紙
オランダ国立中央文書館蔵

参考資料

- 『江戸のオランダ人』 片桐一男 中公新書
- 『長崎屋物語』 坂内誠一 流通経済大学出版会

二〇五〇年誕生日に見た夢

川村 邦生

二〇五〇年一〇五歳誕生日、三十年前からのゴルフ事情の思い出を夢に見た。

二〇二〇年初に始まった新型コロナという中国ウイルスで、数年間は世界中どこもかしこも大騒動に陥っていた。勿論好きなゴルフ場も同じだ。三密なる密着接触を避けるため苦勞していた。プレー後の懇談はアクリルパネル板を接触よけに置いたテーブルで、自販機ドリנקを飲みながら乾杯し、ゴルフ談議でなくコロナ談義をする状況であった。勿論お風呂なしの汗臭いシャツのままだ。この騒動も三年程続き二〇二三年ごろに平常に戻った。

一〇五歳になった私は今でもクラブ競技に参加している。競技に参加した時に生涯初めてのことを経験した。その思い出は決して忘れられず、数少なくなった同世代のゴルフ仲間への自慢となっている。

それは憧れのエージシュート、ゴルフで年齢と同数以下でプレーした事。

一〇五歳の私の場合一〇五打でプレー出来たので認定された。練習に熱を入れて一生懸命プレーしていた若い頃は難しくて為し得なかった。

エージシュートを経験したゴルファーは非常に少ない。その一人に加われた。

AIロボットのキャディーさんが運転する空飛ぶ車でのコース内移動は私のような超後期高齢者にとって福音となった。打った後、空を飛んでボールの位置近くまで行く。ミスした時は、きちんと正しいスイングをアドバイスしてくれる。歩かないプレーなので疲れない。併せて百歳以上のプレイヤー向け特別ルールが制定されていた。

①超反発クラブとよく飛ぶゴルフボールの使用が可能になった。

又このボールには発信装置がついており、受信装置を持つロボットキャディーさんはどこへいったボールでも

すぐに探し出せるようになっていた。お陰でとんでもないところに打ってしまったボールでも失くさず見つかり、ペナルティーを避けられることになった。

②高齢者用に特別の金色ティーグラウンド（第一打を打つ場所）を使用し距離が短縮された。

これらの特別ルールを有効活用出来たので念願のエージシュートを果たせた。

「おじいさん、いつまでも寝ていると永遠に眠ってしまふよ、起きなさい」

はっと目が覚めた。アー、一〇五歳で見たゴルフの夢で三十年前の思い出だった。

三十年前七五歳の時、まだ空飛ぶ車が無い頃だ。ゴルフ場へ行き来する交通手段は、一時間以上車を運転しゴルフ場に行く。四時間程度プレーした後、渋滞の中を二時間運転し帰宅、結果疲労困憊した。早朝家を出て夕刻帰宅するまで丸一日のお出掛けだ。スタミナは勿論、家族の理解がないとなかなか難しい事だった。

一〇五歳の現在、自分では運転せずリースした美形ロボットさんにまかせGPS搭載の空飛ぶ車でゴルフ場まで行く。受付ではロボットさんに迎えられる。コース内はロボットキャディーさん運転の空飛ぶ車に乗って動き、プレー終了後は食堂で美形ロボットさん相手に一杯飲んで癒しをもらい、居眠りしながらロボット運転の自動運転空飛ぶ車で帰宅する。これなら体が動く限りプレーできる。

空飛ぶ車はいつ頃から脚光を浴びたかを調べた。二五年前、二〇二五年の関西万博で空飛ぶ車は百年に一度の移動革命につながると言われ、次世代旅行運輸手段に位置づけられた。二〇五〇年の今、永年の科学の進歩が速く身近に体験できた。自動運転空飛ぶ車など平和な物だけなら大いに望みたい。



人生は「であい橋」

木村 敏美

福岡市の中心に流れている那珂川を挟んで、川の西側は武士の町「福岡」、東側は商人の町「博多」と呼ばれていた。二つの町が、であいで繋がっていく様にといい思いで橋が架けられ「福博であい橋」という美しい名前がつけられた。旧福岡県公会堂貴賓館の前から架けられている。橋半ばに中央広場が作られ腰掛ける様になっていて小さい花壇もあり、正に出会った人同士が談笑できるようにになっている。

川の両端は二つの街並みが一望でき、夜には川沿いに名物の屋台が並ぶ。遠くには博多港にある福岡ポートタワーが見え、近くに日本でも有数の水揚げ高を誇る魚市場や大相撲九州場所の建物がある。川下りをする屋形船やクルーズ船が行きかい風情を感じる。この一帯は夏になると中州ジャズが催される。あちこちに臨時の舞台が作られ、有名な歌手や演奏者を無料で観る事ができる。

世界的なトランペット奏者日野皓正や宇崎竜童等と共に、無名の人や若者達の歌や演奏も聴けて楽しかった。

この世に生を受けた時、親や国、時代は自分の意思では選べない。受け入れるしかないのだ。しかし出会った人の受け入れ方は、自分の選択で決まる。人生を振り返ると沢山の出会いがあった。助けられたり影響を受けたりしながら、計り知れない力を頂いてきた。後になる程その大きさが解る事もある。

それを実感した事が二つある。主人の海外転勤でマレーシアの最南端ジョホールバルに住んでいた時の事だ。シンガポールの学校に通っていた小学生の娘がクラブ活動で遅くなった時はスクールバスに乗れない。イミグレーションから公衆電話で自宅へ電話をかけ、私が車で迎えに行くようにしていた。ある日、娘はお金を落とし泣きながら歩いて帰っていると、バイクに乗って通りがかった青年が気づき、家迄送ってくれたらしい。外に出てみたが彼の姿はなかった。

もう一つは同じマレーシア時代、私はシンガポール迄自分で運転してインドネシアバティックを習いに行っていた。ある日市内で車が突然動かなくなった。車を端に寄せ遠方にくれ立っていると、通りがかった中国人男性が声をかけてくれた。傍の街路樹の枝をポキッと折ってトランクに挟み、この国では故障した時は小枝を挟むのだと教えてくれた。修理工場まで連れて行っていただき、修理もできた。その日に国境を越えマレーシアに帰れた事がどれ程有難かったか。携帯電話のない時代で後になればなる程有難さが身に沁みる。心苦しいのはお礼らしいお礼もせず別れてしまった事だ。

同じマレーシア時代、人生後半の私の趣味を作ってくれた人に出会った。私は熊本県、彼女は神奈川県出身だったが年齢も近く出会ってすぐ仲良くなった。彼女の誘いでテニスを習い始めた。他にもう一つシンガポール迄インドネシアバティックを習いに行くようになった。教師は現地に住む中国人女性。誘ってくれた友人が先に帰国した後も楽しくて習い続けた。帰国してからは、テニ

スは古希の頃まで続け生涯の仲間もできた。

バティックを描いている人や扱っている店も見つからず、持って帰った材料で自分流に何作か挑戦してみた。「コーヒー娘」他数作描いた絵を過去の絵と一緒にして、主人が私のエッセイの挿絵にして小さい冊子を作ってくれた。これが思いがけない出会いによって美術の世界へと導かれる事になった。

企業OBペンクラブの年刊誌『悠遊』の表紙絵になったマレーシア時代のバティックの絵とエッセイの中のバティックの絵を偶然見た人が太平洋美術会の方だった。しかもインドネシアバティックに精通しておられ、次年度の太平洋美術展の染織部に出展するように勧められた。出展すると思いがけない評価を頂き、再びインドネシアバティックを描き始める事になった。この人との出会いが無かったら私の絵は物置に眠っていただろう。

年齢を重ねていけばいく程出合いの大きさに気付かされる。願わくば「दैあい橋」の中央広場で、お礼を言えなかつた人達と再会し「ありがたい」と伝えたい。

人生を心豊かにしてくれた長友さん

荒野 詰也

筆者は、大學卒業後約六十五年になるが、その前半は大企業で家電製品の開発、電磁調理器I日クッキングヒータの製品化やセパレートエアコンの商品化に取り組み、開発屋としてそれなりの成果を得た。そして、後半は独立し、技術士や中小企業診断士等の資格を得て、それぞれの協会に登録して、主に日本の中小企業や海外中進国企業の支援活動をしてきた。この活動の中で日本技術士の長友正治大先輩を知ることになる。

長友さんは、一九二一年七月、満州遼寧省生まれ。各地を移動することが多かったが、小学校時代は大連市、旧制中学から大学は新京とのことである。旧制中学卒業後は、満州国立の新京工業大学の機械科に入学した。一九四二年大学卒業後に希望通り満州飛行機製造に入社したが戦時中でもあり軍入隊が先行し、朝鮮の部隊に入隊した。しかしここで入隊半年後の訓練中の事故で右目に

公傷を負い、軍隊から離れることになる。この事故が、危険な戦場に行くことなく命を長らえることになった第一回目の幸運であった。除隊後は、奉天市の満州飛行機製造に復職し、飛行機の開発に携わった。その後米軍B29の爆撃で工場が破壊されたため、満州北部のハルビン市に移り開発を続けた。その開発の完了直前に終戦になり、ソ連軍に占拠された。その後、開発要員はシベリアに連行されることになってしたが、ここで幸運にも、国境に着く前にハルピンに連れ戻され第二回目の幸運に恵まれて命を繋げた。

その後、新京で過ごした後、一九四六年に内地に引き上げ、そのまま故郷の宮崎に帰ることができた。一時的に叔父の醤油工場を手伝ってから、山口県の機構機会社で機械エンジニアとして本来の業務についた。その後、職場で「君、コンサルタントになり給え」と勧められ一九五八年初回の技術士本試験に合格した。そして、技術士事務所を開設し、本来のコンサルタント業務に励んだ。さらに、公益法人日本技術士会の活動にも精を出し、技術士会の運営にも携わり、理事、監事、常設委員会、実

行委員会、機械部会幹事等で、要職に携わり、日本技術士会の繁栄に貢献した。

筆者の方は、技術士資格取得は、企業在籍時の一九八三年だった。企業在籍時代は、日本技術士会にも登録していなかったが、企業から独立後の一九九三年頃から日本技術士会の活動に参加するようになった。

一九九二年の地球温暖化防止条約活動が国際的に活発になり始め、技術士会の中にも環境問題を検討する環境マネジメントセンターが設置され、長友さんとも密に活動するようになった。当時の長友さんの印象は、大陸的なスケールの大きい考え方の紳士であったが、最も印象に残っているのは、実績の大きさや、経験の豊富さを表に出さない人で、指導される後輩としては、まことについて行きやすかった。また、ある中堅の電機会社につき合わせてもらい、約二十年近く顧問として支援させていただいた。さらに、技術士会の中では、ご一緒していた環境マネジメントセンターや、技術士名誉会員懇談会(名譽会)のまとめ役にも推薦と応援をしていたいただき、重責を果たすことが出来た。技術士名誉会員とは、年齢が七

十七歳となり、重要な常設委員会の会長等の経験者のみが、技術士会の推薦により技術士名誉会員となり、会費免除等も含め色々な特典が得られる資格である。

一方、長友さんは、誕生年から今年七月で年齢百二歳となり、心身ともにすこぶる健康である。また、つい先年自宅で転倒し、数か月入院治療を終え、退院後も再び歩行できている。高齢で入院生活が長くなると、常人では、再び歩行することはできなくなるのが普通である。また、頭脳の働きも衰えていないのは人間業とは思えない。つい先日も筆者の出身校が日本で唯一の国際卓越研究大学に選ばれた件でも、わざわざお電話いただいたというような気配りも衰えていないのである。

かなり以前から小生ゆかりの静岡産の八十八夜の「大走り新茶」を毎春お贈りしてきたが、これが長友さんの長寿に、少しは貢献してきたのではないかと我ながら信じ始めている。更なる長寿を祈念するばかりである。



「世界の工場」からどいへ

児玉 寛嗣

イギリスが「世界の工場」と言われるようになったのは、十九世紀半ばのことであった。しかし、それからわずか半世紀後、十九世紀末にはその地位をアメリカやドイツに譲り渡した。

現代に舞台を移すと、同じように「世界の工場」と言われている中国がその地位をインドや東南アジア諸国に奪われようとしている。皮肉なことに、アヘン戦争などで大きな屈辱を与えたイギリスの二の舞になるのだろうか。この二国の辿った道を比較して見るのも歴史の面白い面である。

イギリスでは、ワットの蒸気機関など、産業の発展に欠かせない新技術が十八世紀に百花繚乱のごとく出現した。それらが、従来からあった機械時計製作技術など、職人の技によって実用化されて産業に活用された。工場を建設するための資本は植民地で収奪した財貨で賄われ

た。農業革命で生産性が上がり農村の人口は増加、余剰人員は働き口を求めて都会に出てきて工場労働者となった。主な産業は綿織物工業で、アメリカから運ばれた原料の綿花と自国の豊富な石炭が原動力だった。労働条件は劣悪なもので、女性、子供が安い賃金で長時間労働を強いられた。人権運動の高まりとともに、世紀半ばで労働条件が徐々に改善されるようになるが、他国との大きな技術格差と低賃金、グローバル化が「世界の工場」の地位を与えた。その風向きが変わり出したのは一八七〇年代のこと。工業生産で儲けた資本家たちは工業の新興国であるアメリカやドイツに投資して、最新鋭の技術を導入した工場が稼働を始めるようになると安価で品質の優れた工業製品が大量に生産されるようになった。先行していたイギリスの技術は既に陳腐化したものになっており、競争力を失い、徐々に経済停滞に陥った。しかし、イギリス通貨であるポンドのブランド力は大きく、アメリカに座を譲るまで、「世界の銀行」としての地位を保った。また、造船業など当時の先端産業では技術の蓄積もあり、しばらくは王座を占めていた。

一方、中国であるが、毛沢東が死去するまではおよそ工業国とはいえない「貧しい共産主義の超大国」であった。経済発展に大きく舵を切ったのは、一九七八年に実権を握った鄧小平であった。彼は「改革開放」政策を訴えて、経済特区の設置、人民公社の解体、西側資本の積極的な導入などを柱とした経済改革を断行した。一九九〇年のことである。資本とともに西側の技術も取り入れた。イギリスと違って他国の技術をちゃっかりと利用したのだった。生産を急速に増大させ、工業製品の輸出が急増したことから、「世界の工場」と呼ばれるようになった。内陸の農村から大挙して押しかけた若者たちが海岸沿いの都市で低賃金労働者となりそれを支えた。

豊かになった労働者たちの賃金は徐々に上がり低賃金のうまみはなくなつた。中国に投資していた西側諸国の資本家も賃金の安い東南アジア諸国に工場を移すようになった。ただし、付加価値の高い技術力を要する電気自動車や半導体は自国で生産するという政策は保持するよ
うだ。

さらに、コロナ禍で露呈したサプライチェーンの脆弱性も中国離れを加速している。

イギリスの場合は植民地から篡奪した富、「世界の工場」として蓄積した財貨を元手に、当分の間、「世界の銀行」として君臨し、金融資本で稼いだ。果たして中国はどう対応しようとしているのか。グローバル・サウスと言われている発展途上国に「一带一路」の仕組みを使って資金を貸し付けてインフラ投資を行ってきたが、必ずしもうまくは行っていない。その仕組みで港湾設備などを借金のかたに取られるのではという警戒感も広がっている。人民元がドルと肩を並べて世界の基軸通貨となる可能性は低いだろう。ロボット・宇宙・AI・再生可能エネルギーなどの最先端技術の開発に力を入れているようだが、アメリカとの軋轢のなかでどう発展できるか見えない。世界に開かれた国でないと「技術立国」という立ち位置は難しい。恐れているのは「軍事大国」として西側諸国と対決姿勢をとってくることだ。世界の平和のためにもそれだけは避けてもらいたい。

童謡と唱歌

志村 良知

かなり前のことであるが、OBペンクラブの集まりで童謡と唱歌の違いの話が出たことがある。その場では、ともに子供向けの歌であるが、両者は出自が違い、唱歌は官製、童謡は大正期に生まれた民生の歌、という事に落ち着いた。しかし、では音楽として歌曲としてどう違うのか、というところまでは結論が出ずじまいだった。

一般に、唱歌は教育の目的があり、道徳、愛国の精神を涵養するもの、童謡は子供の心に沿った詩情豊かでより芸術的なものとされている。いま流行りのA Iに聞いてみてもだいたいそのストーリーで答が返ってくる。

唱歌は明治十四年に始まった尋常小学校での音楽教育の官製教材として作られた。初めは外国曲に日本語の詩(訳詞)ではなくオリジナルの詩を付けた曲が多かったが、日本人による作詞作曲が主流になっていき、昭和二十二

年まで、幼稚園、中学、女学校も含めて膨大な数の唱歌が教育現場に供給された。

大正七年六月、鈴木三重吉によって雑誌「赤い鳥」が刊行された。子供向け総合雑誌として当代一流の執筆者の作品を「童謡」と名付け掲載した。文部省唱歌については次のような欠点を指摘した。

- 一、歌詞が漢語・文語調でおとなにも分からない。
- 二、道徳的教育的で、子供が歌い踊るものではない。
- 三、詩の音律と曲のリズムが一致していない。
- 四、詩や言葉が不自然なところで切れる。
- 五、イントネーション、アクセントが不自然である。

三重吉は、これらを正し、子供が自然に歌い出せて、かつ芸術性豊かな歌を「童謡」と名付け、人気詩人と一流作曲家のコンビをプロデュースし、詩の公募も行った。大正八年五月号に「赤い鳥」曲譜集その一として『かなりや』が譜面付きで発表され、大正九年四月号のその十一で雑誌のシンボルとなる歌、『赤い鳥』が発表された。

童謡曲譜集は昭和八年四月号のその一四八まで刊行され、運動の同調者により、類似の童謡雑誌も刊行された。

こうしてみると、巷間でいわれているように、童謡運動で生まれた歌の方が子供たちに浸透していったように思える。しかし、今日、当時の子供向けの歌の中で耳にするのは童謡運動で作られた歌曲より唱歌の方が多いし、小学校、中学校の音楽教育現場に残っている教材でも唱歌の方が多い。運動の本来である「赤い鳥」掲載の歌曲で現在教材として残っているのは、最も採用が多いという教科書では『この道』一曲である。

童謡運動で、唱歌の欠点として挙げていた詩の音律とリズムの不一致、会話のイントネーションとの不一致は、子供向けというフレーズの長さや音階の制限から、第一節で解決しても第二節以降では無理が残る。さらに、日本全国にはさまざまなイントネーション、アクセントがあり、東京で解決してもほかの地方では不自然なまま。童謡運動の詩人や作曲家の才能にも限界があった。

これに対し、滝廉太郎作品に代表される中学生や女学

生向けの歌曲はドイツリートを意識した長いフレーズや西洋音階の活用でこの問題のある程度解決し、時代をまたいで大人が歌うに堪える芸術性を持っていた。

孫、曾孫までの世代共通の歌が無くなると嘆く声がある。たしかに、初期にあった外国曲や讚美歌に日本語の創作詩を付けた歌、スコットランド民謡などヨーロッパの民謡、さらにフォスターの歌曲はほぼ全滅している。しかし数十年間に亘って教材として教えられ続けている歌は、わらべ歌や各地の民謡を含め七十曲あまりある。英語教育の一環で、名作ミュージカル歌曲やビートルズ、P.M.などもいくつか原語で加わっている、これらは六十年代に青春を過ごした人なら馴染みがあるであろう。

物は試し、孫、曾孫に昔習って今も覚えている歌を聞かせてみましょう。意外に乗ってきて一緒に歌い出すかもしれませんよ。

私の携帯電話遍歴

下山 健夫

昨年末、新しいスマホに変えた。二台前の機器が壊れた為に保険で提供された機器だが中途半端だった。今回の機種は当方の使用状況にはオーバースペックであり、二ヵ月たった今も十分なセットアップが出来ていない。

私が携帯電話を持つとうと思ったのは、今から二十九年前の阪神大震災を出張中の神戸ポートアイランドのホテルで経験した際に、携帯で状況をすぐに連絡できて助かった事が理由だ。当時はまだ赤公衆電話が色々のところがあり家族への第一報はTV報道より前にできた。当時の携帯電話は国産はまだ少なく、安いものを探し米国製を購入した。その後誰でも携帯を持つようになったが、3・11の時には状況が一変した。携帯回線は一杯で、大震災当時のことを思い出して公衆電話を探した。災害時の公衆電話優先は当時も行われていた。その後仕事で海外出張も多くなり、国内携帯で海外から日本へかけると

高額電話料金だったので所謂ガラケーの二台持ちをし、一台はSIMフリーに闇改造し、二台目は出張国での短期SIMを購入して対応していた。今でも、早く決断しなければならぬ時は、メールより電話で話す方が良く思っている。当時はメールをいつでも見ることが出来るので、時差がある場合の連絡にはPCで送ることが前提だった。この状況のなか米人達はNokiaがSymbian OSのQWERTYタイプ(タイプ配列のキーボード)付きの今のスマートフォン原型のものを使い始め、連絡には便利だと思った。この様な機種は日本ではキャリアが扱ってなく、私の語学力では的確な短い英文で伝えることが出来無い。しばらくすると日本でもタイプ型キーボードの付いたものも出てきてハッキングにも強いとの触れ込みなので使ってみたが画面が小さくやはり想定どおり、自分には今ひとつ使い勝手がよくなかった。

しばらくたち、幼馴染みで昔から優等生のT工大の教授をしているF君にN君と一緒に会う機会があった。昼休みに彼がテニスをした後、彼が手掛けた図書室を見た後、部屋へ連れて行ってもらった。彼の部屋は我々がイ

メージする教授室とは違い、本は一冊も置かれていない。周囲のガラス戸の中にはきれいにファイルのみが整理されており、その時研究していた音声認識の説明を受けた。

当時はまだ完全ではないとのことであったが、現状でも良いので使わせて欲しいとの要請を受け企業へ提供したとのことであった。実際に iPhone での使用方法を教えてもらい（現在 Siri の原型）、iPhone に替えた。当時はソフトバンクが独占的に扱っていた時で、日本でシェアが高い iPhone には日本語アプリの種類が多く、Apple 側でセキュリティ対策が高く、かつ Mac の OS は使用方法を知らない人を前提でつくられていた。F 君はこの後、この音声認識があらゆる言語で可能になる鍵を見つけたとのことも含め、コンピュータ分野では初めて文化功労者に推挙された。彼は米国の大学院大学の学長、日本の AI 研究の総括責任者にもなったが、惜しくも数年前に亡くなってしまった。学友は出来の良い人から亡くなってしまいうようにガツカリしている。

iPhone を含め、スマートフォンを比較的早くから使っていたので、ガラケーの「あかさたな等」のキーボー

ドを使ったフリックタイプ文字入力が出来ず、タイプ配列の QWERTY 式のローマ字入力しか出来ない。

その後 iPhone を二台程使ったが、メモリーを大きく出来なかった。安くなった SD メモリーも追加出来、ほとんど無料で Sony 製に替えられるということもあり、音楽用にほぼウォークマン並みの機能付きだったので替えることにした。奥秩父の山行で足が悪く下山が遅れた時に山小屋の方にドコモでないと繋がらないと言われたことも一つの要因だった。今回も型落ちの新しい機種に替えたが、音楽 CD は FLAC 形式は三百枚ほど、色々な音楽の動画等百本程度、本も E Book 形式で二百冊ほど、今まで蔵書を PDF にしたもの百二十冊程入る。ほぼ中級程度のコンパクトカメラが付いており写真も数百枚入っている。今後は銀行、カード等に必要なアプリのアクティベーションをしないかねばならないが、完全形にするにはまだまだ時間がかかる。今はスマホを壊したり、紛失すると大変なことになってしまった。私は妻から本は増やさないでほしいと言われており、Kindle で購入した新刊本を読む電車の中は貴重な読書時間になっている。

ホームページ作ろうよ

杉浦 右藏

企業OBベンクラブ入会

入会は一九八八年。紹介者は三井物産系ベトナム友好商社の親和物産社長・野村嘉彦さん。当時の入会には厳格で幹事二名の面接を受けた。幸い合格、月例会には度々出席した。丸の内は三菱地所の再開発前で、三菱ビルB1室で会合は開催されていた。このころはパソコンなど存在せず、ワープロ全盛、コピー機もゼロックス出現、便利な世の中になったと感心した時代である。

パソコン windows 95 の出現

windows 95がこの世に出たのは文字の通り一九九五
年である。それまでは良いパソコンが無かった。国産では NEC 8800 シリーズ一九八〇年代ものが活躍していた。私も JICA 専門家で赴任する携行機材として渡された IBM パソコンは使い方が複雑で使い物にならなかった。

ところが、マニラに赴任中の一九九五年マイクロソフトから発表発売された windows 95 は素晴らしい性能だった。残念なことは、パソコンとソフトウェアは別扱いの販売セットで売られ高価であった。類似品やコピー品も出回ったがウイルスが怖かった。

インターネットに加入するとメモリが買えた

インターネット加入者獲得競争の一環として富士通、日本電気、NTT、三社が10MBまで無料で添付サービスを競った。容量を越すと加算金で拡大できた。それに相乗りで加入者ホームページ作boomが起きた。私も九八年帰国後、NTTに加入した。IBMホームビルダーを購入して個人会員ホームページを作った。このサービスは五年位続いたがネット技術の進歩で専業者が多数現れ、転写無料サービスで発展してきた。

ホームページ作ろうよ

企業OBベンクラブ会員も何人かが作っていた。横河電機出身の多田修さんと話したら、イイねと言う話がま

とまり、IBMホームビルダーで雛型を作り何回か二人で検討して、事務局と相談した。内容的には本会創設の頃から事務局、月例会、サロン21、俳句、川柳、フォト等の区分はあまり変わっていない。一番難しいのは表紙の構成だ。メモリが小さいので写真を小容量にすることだった。ヤフーなどに習い画素を17KB位に制限することだった。

多田さんと何回か擦り合わせをして事務局の許可を貰ってアップロードすることにした。ここからが問題だ。多田さんも杉浦もホームページを持っていたのでどちらかを会に提供するしかない。議論することもなく多田さんがもう一つ加入して提供します、で決着した。杉浦は此処で降りることにした。このホームページは改良しながら数年使ったはずである。パソコン、インターネットの急速な進歩もあり、会として、外注でホームページを持つことが決まり、今日に至った。その初期経緯を綴った。

——つばやき——

①企業OBペンクラブ会員は、百人を越したことがな

い。九九人の時が瞬間的にあり、話題になった。少ない時も五十名を割らない。私も歩行が悪化して会合の場所まで行けず皆さんとの御会いも出来なくなった。

②今年、日本技術士会で、中川毅先生の「年縞」の御話及び著書を読み人類の歴史観を変えなくてはと悟った。人類（動植物の全て）は強いものが強い。闘争の生物だと。福井県・水月湖45mボーリング解析から、約一五万年分の気象の歴史が分かって来た。作業は地道で大変だが、近々の五万年の歴史が年単位で詳しく分かって来た。人類は五万年くらい前から人口が増え始め、近年爆発的に増加、文明が引き起こす公害などが増加し、地球が急変している。特に西暦一九七〇年頃から変化が急で異常状態に陥っている。

③電信電話の発明から僅か二〇〇年である。情報通信技術は異常な速度で進化している。政府は日本電信電話公社法を廃止するとか変更するとか言い出した。ドウナルのでしょうか。

喜寿に思う

塚田 實

二〇二四年の新年を迎え、喜寿になった。まだ小さかった頃七十七歳のお爺さんはよぼよぼの老人のような印象があった。しかし今や自分がその歳に到達したが、まだまだ元気なつもりでいる。

七十七という数字には思い出がある。大学受験の時、願書は高校の友人の母親が大学に届けるというのでお願いした。友人の受験番号は七十六番、私の番号は七十七番だった。「おおー、ラッキー」と思ったものだ。合格者発表を見に大学に行くと、七十七番はあったものの、七十六番はなかった。喜びと同時に「悪かったな」という思いが心の端によぎり、忘れられない出来事となった。

人生の大きな出来事はいろいろある。先ず思い浮かぶのは、やはり就職だ。大阪で五人兄弟の長男だった私は、親から将来は地元で家を支えてくれるだろうと期待され

ていた。しかし関西地区での就職活動にことごとく失敗、やむなく東京に本社がある会社に入った。親は長男が地元を離れることを知り、大いに嘆いた。

会社では海外関係の仕事につき、懸命に働いたものの、上下関係の荒波にもまれ、不運をかこつたことが何度もあった。そんな時私を温かく見守り指導していただいた何人かの上司に恵まれ、四十四年の会社生活を無事終えることができた。上司には心から感謝している。

次の一大事はやはり結婚だろう。二十七歳の時に結婚したので、今年には金婚式になる。結婚前はやや神経質だった私に対して、妻は常にどっしりと明るく構える性格だった。会社を辞めたいと思ったことは何度もあるが、その度に妻の励ましで復帰した。いつの間にか私を助けてくれる仲間や部下に囲まれるようになり、充実した会社生活を送ることができた。

子供も二人でき、今では孫にも恵まれて、穏やかな家族関係に包まれている。孫の成長も楽しみだ。

父は戦争を乗り越え、母と共に五人の子を育て、会社では偉くはならなかったけれど、定年まで働いた。退職後はぶらぶら過ごしていたものの、七十二歳で亡くなった。私が七十二歳になったとき、親を越えたと深い感慨を覚えたものだ。東日本大震災の一週間後に亡くなった母は九十一歳だったので、次の目標は傘寿、米寿か母の歳を超えることかと思う。それまでは呆けもしないで、健康年齢でありたいと願う。

忘れられない大きな出来事は、がんになったことであろう。男の厄年満六十歳の二〇〇七年、ステージⅣの大腸がんが発見された。既に肝臓に転移しており、術前に五年後生存率は十五パーセントと宣告を受けた。十時間の手術を終え、翌年に肝臓に転移し手術、更に二年後には肺に転移し手術した。最後の手術後五年間転移がなかったのが、「解放です。定期検査は終わりにしましょう」と言われたが、「十年診てください」と無理やりお願いした。二〇一九年、がんは大丈夫だったものの、「左の肺が半分潰れています」と検査で言われ、直ちに以前がん

センターにいた肺の専門医がいる済生会中央病院への入院を指示された。気胸と診断され、手術をして命拾いした。

二〇一八年知人の紹介で大徳寺塔頭芳春院住職秋吉則州師の知己を得た。芳春院は加賀藩前田利家の妻まつ（法号芳春院）が建立した寺である。十月早朝、師を訪れ歓談させていただき、著書『日日は掃除』に「坐亦禪行亦禪」と揮毫していただいた。翌年再訪すると「生死事大」と色紙を頂いた。禅語で「人間にとつて、生と死は一大事であり、今生きていることがもつとも大事である」との意味だそう。その後コロナ禍で訪問が途絶えたが、昨年三月再び訪問することが出来た。このときも色紙を頂き「柳緑花紅」とあった。やはり禅語で「すべてのものを客観的に捉え、ありのまま受け入れる」との解説があった。いつも優しく抹茶を点ていただきながらの談笑では心洗われ、師の説明で禅語もストンと腹に落ち、今後の生きる指針になっている。

これからどんな事が起こり、どんな人に巡り会えるだろうか。わくわくしながら未来を楽しみにしている。

海外旅行

中村 晃也

今、これまで一九六八年から二〇一四年まで使用した九冊のパスポートを机の上に広げている。

最初の海外旅行は三十二歳の時、一九六八年に羽田発の約一ヶ月の行程での米、英、仏などの化学会社の研究所のコンピュータ化の調査だった。空港で百ドルの外貨持ち出しの許可を得て勇躍米国に着いたが、当時ホテル代は平均十五ドルだったので、交通費などを使うと三十ドルの日当ではとても足らず、昼食、夜食は訪問先の接待をあてにしなくてはならなかった。

七四年 当時景気の良かった会社のリフレッシュ休暇を利用して、家内とヨーロッパに参加した。

七六年 仕事の合間を見て韓国に行ったが、当時の韓国は景気が悪く、麦飯の寿司を食べることになった。

翌年七七年から海外旅行は成田発着となる。同年、本社研究部の新規事業開発担当になり、当社で開発した新

型の除草剤の導入が目当ての、内外の農薬会社との接触頻度が著しくなった。

八〇年 販売ルート探索を兼ねて約一ヵ月かけて中南米諸国の農薬市場の調査。スペイン語の重要性を痛感。

八三年 七月に東南アジア諸国の調査。同年十一月に英国の農薬セミナー（ブライトン会議）に出席した。

以後八年間、同時期開催の会議に出席し、往復路にヨーロッパ各社を訪問することになる。

八五年 フランスの会社との合弁会社設立の交渉が始まり、翌年にかけて一年に六回も先方の本社リヨンに向くことになった。同年同時期にタイのチェンマイでの除草剤の世界会議で当社の研究所員が新剤の発表をすることにになり、ロンドンからバンコクに飛びチェンマイに移動し、発表に立ち会うことが出来た。

八六年 プライベートで妻とスペイン一周旅行。

八八年 出張先のニューヨークで留学中の長男と再会、数日間行動を共にした。

八九年 妻と次男を連れて香港の友人を訪ねた。

九一年 新剤の販売権交渉で韓国出張。

同年妻と香港グルメ食べ歩きツアーに参加。

九二年 空港ストでドイツの会社との打ち合わせがキャンセルになり、空き時間を利用してロンドンからスペインのセビリヤに飛び、当地の万博を見学。

九三年 台湾出張の際、次男を同行した。

九四年 取引先社長の台湾工業会の会長就任式に妻と一緒に招待された。同年、老人仲間の五組の夫婦を連れて台湾一周旅行をした。また、甥のルーマニア女性との結婚式があり、息子二名を連れてブカレストに行き、乗り継ぎのモスクワで市内見物をした。

九五年 五回出国。国内の顧客を案内し、フランス本社訪問。帰途ノルウエーのフィヨルドを観光した。

九六年 九回出国。シンガポール。インドネシアなど。妻と香港。正月休みは息子達と中国（西安）で。

九七年 タイ。ベトナム。台湾。妻とハワイ旅行。

九八年 香港。タイ。インド（タージマハル）。

九九年 妻と香港。次男と中国（上海、杭州）。

二〇〇〇年 退職したので以後観光旅行に終始。台湾。カンボジア（アンコールワット）。友人とアメリカ中西

部の国立公園巡りツアー。

二〇〇一年 カンボジア。タイ（プーケット）。

二年 中国（桂林）。高校の五十年ぶりのクラス会でシアトルとカナディアンロッキー。

三年 中国（北京、大連）。四年 ルーマニア。

五年 中国（九寨溝）。台湾。

六年 中国（天津）。ニュージーランド一周観光。

七年 エジプト。妻と台湾。八年 シンガポール。

九年 カナダ。十二年 中国（西湖）。長男と台湾。

一三年 中国（寧波）。長男とトルコ一周観光旅行。

一四年 ロシア（エルミタージュ）。長男とインド。

一六年 シンガポール。

一九年 親子四名でシンガポール旅行（動物園など）。

晩年は脳梗塞で倒れた長男のリハビリのための旅行が多かった。以後コロナの影響もあり、旅行の機会がなかった。フランスの親会社および、アジアゾーンで毎年合同会議があり、海外旅行の機会が多く、往復路いろいろな国を訪問できたのは幸せだった。諸国での漫遊記は掌編小説に纏めてあるので一読願いたい。

多摩川を歩く

長尾 進一郎

大田区内の自宅近くを多摩川が流れており、川を目にしない日はないくらいだ。この川の全体像を知りたくなくなり、数回に分けて河口から上流へ徒歩で遡ることにした。

下流域

河口は羽田空港の南側で、その手前の川幅は六百メートル程もあつて海のように見える。大田区と川崎市の境を成している。高度経済成長期にひどく汚された水質は、今はかなり改善されて悪臭は感じられず、川面に多くの水鳥が泳ぐ。船溜りに釣船や屋形船が係留されている。

上流へ向かうと、首都高速をくぐるあたりから徐々に川幅が減少し、周りに緑の河川敷が広がって自然の川らしくなる。両岸の堤防も、河口付近のコンクリート壁から、高さ数メートルの台形断面の緑の土手に変わった。堤防上に遊歩道とサイクリングロードを兼ねた道が通り、河

口からの距離が表示されている。

広々とした河川敷や川面を眺め、風を受けながら歩くのは心地良い。空気が澄んでいると西方に丹沢と富士、北西に南アルプスなどが望める。河川敷は野球場やサッカー場、公園などに利用され、子供達の声で賑わう。

東海道線をくぐるあたりで、川は大きく右・左に蛇行する。国道一号の多摩川大橋近くの神社に「矢口の渡し跡」の碑が立ち、橋のなかった時代を伝える。川歩きの嬉しいところは、開けた景色と解放的な明るさ、地形に応じ変化する川の表情、そして山と違って高低差が少ないので散歩感覚で歩けることだろう。

狛江市まで来ると、小田急線の鉄橋下流に宿河原堰堤が現れる。川幅一杯に水が堰を越えて流下する様は壮観だ。魚を狙う鳥が待っている。ここは昭和四十九年に大型台風の影響で堤防が決壊し、十九棟の家が流された所だ。その後、堰を可動式に改良して現在に至っている。

中流域

左岸が調布市に入る。河川敷の幅は依然として三百メ

1メートル程あるが、水の流れる部分は下流より狭くなってきた。京王多摩川には、幼い頃近くの祖母の家から遊びに来て、浅瀬でメダカを掬った楽しい思い出があるが、今は川岸も整備されて昔の面影はない。

南武線の鉄橋が川を横切る。左岸は府中市となり、緑濃い「郷土の森」の中を歩く道となった。木立に囲まれた堤防上の涼しいベンチで休憩する。

京王線、中央線、八高線と鉄橋が続く。八高線の鉄橋では昭和二十年の終戦直後に、二つの列車が鉄橋上で正面衝突し、百五人が亡くなる惨事が起きた。歩道脇に説明板と事故車の車輪が展示されている。

五日市線をくぐると間もなく羽村堰に出る。広い川面から堰を越える水が、飛沫を上げていく。ここで取水した水は玉川上水となり、水路を勢い良く東京方向に流れて行く。現在も多摩川は東京都の水道水の約二割を供給しているという。

羽村堰から程なくして、遊歩道のあった堤防が途切れた。平地を流れるのと違い、山地に近づいて川が谷底を流れるようになると、谷が自然の堤防の役割をする。

上流域

青梅まで来ると標高は百五十メートルを超え、奥多摩の山々が間近に迫ってくる。青梅街道を西へ辿ると、多摩川は街道の南側に沿って、道路よりかなり下の谷底を流れており、山ひだに合わせて屈曲が多くなる。

沢井の手前で、川沿いの遊歩道があったので降りてみる。狭い歩道が左岸に続いている。ここを歩いたのは秋の午後で、溪谷をバックに西日に輝く紅葉が印象的だった。上流域では、部分的に広い河原が見られる所もあるが、多くは谷の兩岸や巨岩に挟まれた流れとなる。谷に架かる橋も、川面からの高さが一段と増した。

川沿いを歩くと、太古の昔からこの川が膨大な時間をかけて谷を開き、やがて人々が住み着いて、作物を育て生活を営んで今に至るまで、一日も休むことなく川の恩恵をもたらして来たことを想わずにられない。

こうしてついに奥多摩駅までやってきた。「多摩川」としての始点、奥多摩湖まではあとわずかだが、できればさらに源流までをこの目で見てみたいものだ。

ぶらり熱海

新田 由紀子

今にも降りだしそうなどんよりした空だ。

小田原を過ぎると、車窓にはすつと雨が走り始めた。

根府川からは海が間近に見える。旅のプロローグ。

真鶴・湯河原・熱海と、車窓は一気に旅気分になる。

熱海駅に降りると、雨はそれほどでもない。まずお昼。

目当ての老舗中華店に行くと、閉まっている。なんと、

別の店もお休み。夕食は海鮮にしたいので、昼はどうし

ても中華だ。駅ビルに戻り、全国版の餃子屋に入る。窓

からは急斜面にへばりつくような街並みが見えた。

ゆっくりランチをとって、午後は熱海の名別荘建築

「起雲閣」へ。バスは海に向かってくねくねと下る。懐

かしい温泉街。お正月や海水浴に連れてきてもらった口

ーマ風呂の大野屋も近い。材木商の父が一度は泊まりた

いと言っていたのが起雲閣だ。大正・昭和期の別荘が旅

館に転じて、文豪たちの逗留先として知られた。現在は

熱海の今昔を語る文化遺産となっている。和洋中折衷の大正ロマン溢れる邸内を隅々まで見て回った。

小雨の中、グーグルマップを頼りに宿まで歩く。昭和

レトロな温泉銀座街には洋品店や小間物屋、和菓子屋、

レストラン、キャバレーに喫茶店。客が入っていないそうも

ない風情。坂を上がりつめて振り返ると、鈍く光る海と

山の緑にせり上がっていく町のパノラマが見えた。

駅前素泊まり宿「瑞宝荘」の玄関で、名物女将のマシ

ンガントークの砲火を浴びる。おとなしく聞き流してや

つと部屋へ解放された。一休みして再び駅前へ。雨はど

うやらあがつている。夕食処は女将推薦の小食堂、湯処

は駅前ビル裏口の温泉銭湯。地元客の日常感に恐れ入り

ながら、入れてもらった。

二日目。おしゃべりで意気投合した女将とお土産の交

換をして再会を期す。今日は山側に広大な敷地を占める

MOA美術館へ。エントランスから本館まで天へ上るか

のようなエスカレータが続く。この日は明治から昭和に

活躍した画家吉田博の風景版画を展示していた。百年も

前のノスタルジックな色合いに、うつとりと見惚れた。

駅前に戻って、昨日閉まっていた中華「燕京」に入る。店の奥が騒がしい。和服の姐さんが、お銚子とグラスを空にしてくだを巻いている。熱海芸者さんかな。

この日の宿は熱海銀座商店街のゲストハウス「マルヤ」。雑然とした館内はいまいちだが、カプセルの寝床はスーペリアを奮発。温泉割引券と夕食処の情報をもらって海岸散歩に出る。夕暮れのベンチは満席で、まさに恋人の聖地。海浜ホテルの露天風呂で夜景を満喫し、露地裏の小割烹で鰻三味定食に旬の橙サワー。生きの良すぎる鰻に、お皿の上でピクピクされたのには閉口した。

最終日は海岸バス停から十国峠を目指す。文字通りシールレベルからの獲得標高に、ふふっ。山に向かうにつれて、ひとけのない別荘やホテルの廃墟が目立つ。「東洋のナポリ」も寂れぎみか。40分で標高は六百^{メートル}。さらにケーブルカーで3分、十国峠展望台に立つ。が、立ってられない強風だ。ぐるりと房総半島、三浦半島、相模湾、大島、伊豆の山々、沼津、駿河湾、富士山、箱根を指呼して早々に撤退。折り返しのバスでトンボ帰り。

熱海駅前でも乗り換えて頼朝・政子の逢引の地、伊豆山

神社へ。ご両人の腰掛岩は背もたれ付きで、いかにも胡散臭い。海は沖合いに初島を浮かべ、白波を立てていた。昔の人が眺めたままの海。境内の郷土資料館で古い文物を見ながら、この土地が醸す歴史に思いをはせた。

ここでは、前回にやれなかったことがある。浜辺まで続く837段の階段を下り、洞窟の史跡「走り湯源泉」を見ること。もう一つは、神社裏の山道を奥宮まで登ること。今回も見送りだ。膝を悪くして、靴とストックの装備をしてこなかったから。

あたりの地形が面白そうなので、歩いて戻ることにした。海に落ち込む斜面に谷が切り込んでいる。しばらく行くと、道が途切れて通行止めのトラロープが張ってある。一昨年の土石流の現場だ。エイッと強硬突破して難所越え。膝が痛み出す頃、駅前のビルが見えてきた。

やり残しのないように、土産物街で揚げカマボコを食べ歩き。駅前温泉をリピート。早めの夕食に、熱海の定番食堂「だるま」のピカピカ海鮮丼に湯上りビールも。

次は必ずや膝を治して、また来よう。始発の上野東京ラインの発車サイン音が響く。旅のエピローグ。

戦後日本経済における一大失策

野上 浩三

プラザ合意への安易な対応

一九八五年九月、五ヶ国蔵相会議で円高・ドル安路線が決議された。これは、アメリカによる自国経済の不振を解決するための方策であった。

このプラザ合意は「過度の円高」を生み、日本経済を超長期の壊滅的な経済不況に追い込んだ。

忘れてならないのは、わが国の対応が極めて悪かった事実である。中曽根首相の円切り上げの受け入れ方が積極的過ぎ、補佐すべき人々もそれを阻止しなかった。その結果、円高信仰が根付いてしまった。

円ドル・レートは、プラザ合意直前の一ドル＝二百五十円から翌年の八月には一ドル＝一五二円となり、その後も二六年間過度の円高が続いた。二〇一一年には一ドル＝七五円という未曾有の円高となった。その後も円高が続き、ゼロ金利政策が実施されたが、円高信仰には勝てず過度

の円高が続き、日本経済は低迷を余儀なくされた。漸く、二〇二二年に一ドル＝一五〇円前後の水準になった。これこそ日本の総合的な実力が正当に反映されたレートである。

変動相場制下の為替レートは、素人ゴルフに於けるハンディキャプと同じ役割を果たす。強い円は、輸入に関しては有利に働くが、輸出に関しては不利な結果をもたらす。資源に乏しく輸出で生きる日本には「適度な円安」が必要である。

新潟県燕市の洋食器製造業者の事例に、円高の怖さが示されている。

プラザ合意直前の一ドル＝二百五十円の下では、製造コスト四〇〇円のフォークを一本二ドルで輸出すれば五〇〇円の手取りとなり、一〇〇円の利益が得られた。

しかし、一ドル＝一二五円になった段階で手取りが二五〇円にしかならず、一五〇円の赤字になった。五〇〇円の手取り額を確保するには、輸出価格を二倍の四ドルにするしかない。ノーベル賞授賞式後の晩餐会で使われたナイフやフォークは地上から姿を消した。

大規模の輸出企業も、存亡を賭けた厳しい合理化努力を強いられた。生産拠点を労働賃金の安い発展途上国へ移転することを余儀なくされた。その結果、製造技術や経営ノウハウなどが韓国や中国へ輸出され、二国の経済先進国入りを早めた。国内では、雇用機会が減少し、失業者や自殺者の急増などの重大な社会問題を生んだ。

企業は利益の内部留保を優先し、賃上げや増配をせず、設備投資や研究開発にも消極的になっていった。しかし、円高が修正された結果、状況は一変、改善し始めた。

虚偽の時価発行増資の導入

一九六八年に、資本市場における覇権を望む証券業界の要望で、時価発行増資が導入された。その際、時価発行増資はアメリカのエクイティ・ファイナンスの日本版であるという説明が為された。しかし、これは恐るべき欺瞞であった。エクイティ・ファイナンスは増資ではない。借り入れや社債と同類の長期資金の調達手段である。資金調達の目的が達成されると株式市場で「自社株買い」により資金は返還される。

一九八〇年代後半の、円高で不況に陥っている筈の時期にバブルが発生した。原因は、時価発行増資が誤った形で大規模で実施されたことにあった。

①証券会社が企業に「調達された資金は自由に使い、コストが安く、返済不要である」と提案し、企業の財務部が、資金需要が無いのに提案を受け入れた。

②新株は、工作して実力より大幅に引き上げられた時価で発行された。発行後の一定期間は合法的な株価安定操作によって時価が新株の発行価格を割らないようにされた。新株は必ず儲かるようになった。一九八六〜九〇年に六九兆円の資本が調達された。

③財務部の手元に大量の資金が滞留し、その相当部分が株式や不動産への投機に使われ、バブル発生の原因となった。バブルが崩壊し、一般の投資家は致命的な損失を被り、株式市場から離散した。こうして、経済の心臓である株式市場は死の状態に陥った。

興味のある方は、電子書籍の拙著『日本経済の再生のために 打破すべき三つの壁』（22世紀アート社）をご覧ください。

山に登る船

野瀬 隆平

船のレストランで昼食をとっていると、窓の外が急に暗くなり始めた。見ると船がロックに入ったのである。アムステルダムから始まった河船の旅は、ライン川からマイン川へ、そしていくつかの運河を経由してドナウ川へと入っていく。

マイン川とドナウ川は本来、繋がっていないが、1992年に二つの川を繋ぐ全長171kmの運河が完成したので、船を乗り換えることなくアムステルダムからウィーン、そして黒海まで行くことが可能となったのである。北海に下るマイン川と黒海に流れ込むドナウ川の間にある分水嶺を、船は運河を通って越えるのだ。その途中には、ニュルンベルクやレーゲンスブルクなどの街がある。

マイン川（レグニッツ川）と運河の高低差は175m、運河とドナウ川の高低差は68mである。バンベルクから

ケルハイムまでが運河であるが、より正確にはドナウ川に近い一部の区間はすでにあつた自然の川を運河の一部として利用した。

一番高いところにある運河は海拔400メートルで、まさに山を越えて船が移動するのである。水位の高低差を調節するのがロック（閘門）である。乗船したアムステルダムから目的地であるウィーンまで、なんと67ものロックを通過する。水位差が大きなロックは25メートルにも達する。その中に入ると両舷ともはるか上までコンクリートの壁がせまってくる。

食事中に船の中が暗くなったのはこのためである。ちなみに、ほとんどのロックの幅は12mであるので、船の幅は11・5mに制限される。

ロックでの水位の調節方法であるが、通常は水位の高いほうから低い方に水を流し込めばよいので、エネルギーは要らない。しかし、マイン川とドナウ川を繋ぐ運河のように両端が水位の低い川に繋がっているところでは、高い方からいつも下に水を流していたのでは、一番高い

ところの水がなくなってしまう。

従つて、水位を上げるときにポンプで水を汲み上げる必要がある。ただし、高いところから低いほうに船を移動させるとき、すべての水を下まで流してしまふと、今度、ロックに水を汲み上げて水位を上げるときに莫大なエネルギーを必要とする。そこで考えられたのが、「Jiffy Lock」という儉約型のロックである。船を下に下ろすとき、一番下まで水を流さず、中間の高さに設けられた水槽に水を貯める事によつて、エネルギーのロスを少なくしようというものである。

ところで、この水路は観光目的だけのために造られたものではない。乗船中に見た印象では、航行する船のおよそ25%が客船で、残りの75%が貨物船のようだ。運んでいる荷物は土砂などのバルキーなもの、コンテナ、自動車そして石油製品を運ぶタンカーなどである。

特徴的なのは、これらの船の船尾には立派な居住区があり、人がそこに住んで移動しながら生活しているらしいということだ。デッキには乗用車が積んであり町に着いたらその車を使って生活するのではないかと想像され

る。アムステルダムなどにある水上生活者の家の移動可能版といえるかも知れない。

山に登る船で思い出したのが、かつて度々訪れたことのあるトルコのイスタンブールを舞台とする「オスマン艦隊山越え」の話だ。

ビザンツ帝国が、ここをコンスタンティノープルとして長年のあいだ栄えていたが、オスマン帝国によつて滅ぼされる時が来た。固い守りで攻めあぐねていたスルタン、メフメット二世は、ある奇策をとつた。ボスポラス海峡側から山を越えて金角湾に艦隊を移動させたのだ。木に油を塗りその上に船を乗せて、滑らせて山を越えたのである。さすがに防御の固いコンスタンティノープルも、陸と海の両方向からの攻撃に耐えきれず征服されてしまった。1453年のことである。

これが歴史に名高い艦隊の山越えで、このスルタンは、後に「征服者」と呼ばれることとなった。

「君といつまでも」

浜口 須美子

「幸せやなあ おれはおまえとおるときが いっちゃん
ん幸せやねん おれは死ぬまでおまえをはなさへんで
ええやろ」

「幸せやわあ うちはあるたとおるときが いっちゃん
ん幸せやねん うち死ぬまであなたにくつついていく
で ええやんなあ」

国民的歌手の加山雄三さんの「君といつまでも」の歌の台詞を大阪弁の男女版にしてみました。まあ、なんと雰囲気が変わること。加山雄三さんはやはり、「いいだろ」と言つてこそ、二人のいる場所が想像できます。海や船が見えたり、風を感じたり、明るい太陽さえ見えるような気がします。「ええやろ」では、次の歌詞に進めません。大阪弁での恋愛物語は立ち往生です。

息子は就職で九州に赴任し、博多の女性と結婚し、年

に数回は家族で大阪に帰省してきます。小学3年生の孫と一緒に風呂に入った時に、「わたしはママから生まれたんよ」というので、「私はあなたのパパを産んでん」つて言いました。

「ウンデン？」

「そう、産んでんやん」

「ウンデンヤン??」

あらあら、二人の会話は迷路に迷い込んでしまいました。

地方によって方言の違いがあるのはもちろんですが、会話に取り組む姿勢が関西人は独特なものがあると思います。大阪弁にも色々ありますが、私の連発する大阪弁は、「ほんでどないやねん？」と自分で突っ込みを入れなくなるほど、曖昧で本意が伝わりにくい言い回しであると自分でも思います。何か頼まれた時には、「せやな、どんなもんやろ、そういわれても、どないもこないもまあ、ええようにしといてえな」本人は断っているつもりです。本筋の周りを行ったり来たりしながら、こちらの気持ちを汲み取ってほしいと、判断は相手に委ねてい

るのが真意です。

子供達が学生の頃、私が話をしていると「母さん、その話、オチあるん？」と聞かれ、今思えば、「真面目に聞きなさい」と叱るタイミングだったのでしようが、取りあえずオチがある話は落ち着くと信じて、会話をしてきたような気がします。なにしろ会話は「なんでやねん」で終わりたいという、関西人独特の病気のようなものです。

おやじギャグも立派なお笑いの種ですが、関西人はあまり好みません。なぜなら、ギャグを言った人だけで笑いが成立するので、巻き込み型の関西人にとっては笑いを作る参加のチャンスがないので邪道扱いです。

ですが、夫は関西人でありながら大の駄洒落好きです。子供たちは「ハイハイ」と聞き流していますが、夫の母は大笑いしながら「面白いね。ギャグがじょうずやね」と褒めまくりです。私は、会話は台本のない漫才のようなものという意識が働いていますので、聞き流すとか、笑ってごまかすとかは戦線離脱、登録抹消気分になります。笑いを取って、会話成立と思っているので時には力

が入りすぎる場合があります。

ある時、夫と私の会話を聞いていた人が私に、「あんたは、ああいえばこういう、なかなか負けてへんなあ」と言われて、頑張りすぎを反省しました。そういえば、相手の会話を被せて、言い負かすような場面になってしまふことがあるのです。そんな時は、相手に拍手喝采、大笑いしながら、「面白いね」と褒める義母を見習わなければと思いました。

夫は今日も「今年、古希やねん。コキコキ」と言つて肩を上げたり下げたり、絶好調。

「ねえ、あんたが一番幸せを感じる時はどんな時なん？ 駄洒落を言つて相手が笑ってくれた時？」つて聞いてみました。そしたら、

「おれはおまえとおるときが いったん幸せやねん……これで、どう？」まるで、正解を言い当てた小学生のような得意気な顔です。どこかで聞いた台詞。

恋愛物語は立ち往生だった大阪弁ですが、中高年の戯れ言にはよく似合うようです。知らんけど。

タダ飯の紳士か、メシ屋の親父か

浜田 道雄

十八世紀のイギリスの小説家ヘンリー・フィールディングの『トム・ジョウンズ』は次のような書き出しではじまっているという。

「作家はおのれを客を招いてタダでメシを食わせる紳士と考えてはならぬ。金さえ出さずなら誰でも歓迎するメシ屋の親父であるべきだ。

タダ飯を食う客はどんなまづいメシでも招待する主人に苦情をいわない。苦し紛れでもそのメシを褒めるのが礼儀だと思う。だが、メシ屋はどんなに小うるさく文句をいう客であっても、彼らが金を払う以上その客の味覚を満足させるメシを出さねばならない。

読者が金を払って作品を読んでもくれる以上、作家は彼らを満足させるものを書かねばならないのだ」

子供のころから「もの書き」は好きだった。綴り方は

仲のよい担任の先生が指導してくれたこともあって、楽しみながらよく書いた。そんなこともあってだろう、コングラチュレーションなどで入賞したこともある。

だが、学校を出てからの「仕事としてのもの書き」は楽しくなかった。最初の配属は統計調査部で、統計の分析結果を毎月新聞に発表する原稿を書くことだった。

新聞発表はいわば政府の経済状況に対する公式見解だから、読んだ人たちはこの発表に様々な反応をする。期待しない反応、間違った反応をされるのは困るから、どこからも突っ込まれないようあちこちを気にしながら書くことになる。こんな制約のなかでは、しよせんお役所文書の枠からはみだしたい文章など書けない。

また、仕事に関係ある業界紙などから「エッセイ」と頼まれることも多かった。自分の名前を書くのだから少しは自由に書いてもいいはずだが、これもなかなかさうはいかなかった。

読者は、私その時のポストや仕事内容を知った上で読むのであって、「作品」としてのよさを楽しんでくれるわけではない。「エッセイ」から私の仕事に関わる考

えなどを探ろうとするだけだろう。

そんな風に邪推してしまうと、もう「もの書き」する手は動かなくなる。当たり障りのない話を当たり障りなく書くことで誤魔化さざるをえなくなり、書き手としてはまことに苦痛で、面白くない。

だから、「企業OBペンクラブ」で「もの書き」をはじめたときは掛け値なしにうれしかった。読者がどう思うかなど気にすることもなく、思うことを思うままに書ける。いい文章を書きさえすればいいのだ。子供のころの「もの書き」の楽しさが再び戻ってきたように思えた。

さて、冒頭のフィールディングの言葉だが、ペンクラブで「もの書き」の楽しさを取り戻した私は、彼の言葉をどう受け取るべきだろうか。

彼のこの言葉は「売文作家」への戒めだ。「売文作家」は食うために書いたものを売らねばならぬ。だから、作家は独りよがりになることなく、「メシ屋の親父」のように「もみ手」しながらでも、読者に迎合した「もの書き」でなければならぬ、と主張しているのである。

だが、私は「売文作家」ではない。書いたものが売れなくても、読む人がいなくても一向にかまわない。出来上がった作品が自分で満足できればそれでいいのだ。

だから「メシ屋の親父」になる必要もないし、「タダ飯を食わせる紳士」になることもない。もっとも、ペン仲間にはタダ飯を食わせるほどの金などもってはいないが。

ただ、ここで避けなければならぬのは「独りよがり」になってしまうことだ。推敲を重ねて自分でも「これでもいい」と思い、そこで満足してしまっただけではない。それでは紙くずを作っただけかもしれないから。やはり書き上げた作品には「人に読んでもらえるだけの価値」がなければならぬ。その意味では、私もまた「メシ屋の親父」として、「わが内なる仮想の読者」を想定し、彼らに十分読ませるだけのものを書かなければ、いい作品とはいえないのではないかと。

とはいえ、この『悠遊』への原稿を書きながらも、「やっぱり読んでくれる人なんかいない方が、ズッと気楽に書けるんだがな」と思っているのであるが。

虱目魚始末記

一杉 秀樹

台湾に虱目魚という魚がある。サバヒーと読む。英語ではミルクフィッシュである。この魚を入れた粥が大変に美味い、と台湾の物書きが書き、それを読んだ僕は矢も楯もたまらず台湾へと飛ぶハメになった。

物書きの名は桐焦^{シヤウチョウ}。詩人、文学者、編集者。本のタイトルは「味の台湾」(みずず書房刊)。

この本では台湾の庶民の味というべき様々な食べ物が六十種も取り上げられており、読むうちにどうしても食べなければ、という気にさせる。その筆頭が虱目魚粥である。

これまで台湾の料理を美味いと思ったことは正直なかったが、物書きは人をその気にさせるのが上手い。僕は旅の目的を、台湾における庶民食文化の神髄を極める、という崇高なものに格上げし、高揚感と共に発した。

目当ての粥の本場は台南・高雄あたりだという。日本から台北に飛び、その日のうちに台南に入り、翌早朝六時からの老舗の開店に備えた。毎朝行列をなすということであったが開店早々の店の客はまばらである。早すぎたのか、台湾人の朝食嗜好が変わってきているのか。早くも若干の不安がよぎる。

粥とともに内臓を茹でたものも注文した。これも物書きのお勧めである。うーん、魚は新鮮で、柔らかい半身がでーんと乗っかっているが味は淡泊で感激はこみ上げない。内臓も柔らかくて噛み応えがなく物足りない。

虱目魚という妙な名であるが台湾では国民的大衆魚であり、完全養殖がおこなわれていて、どこの市場でも見ることができるといえる。コノシロを大きくしたような、ニシンのような姿をしているが、ネズミギス目サバヒー科に属し、これら二種とはまったく別種である。但し小骨が多いところは似ており、市場の魚屋では開いてから毛抜きで骨取りをして売っていた。

かの本によれば台南にはほかにも美味しいものが沢山あ

る。曰く、鱧魚麵(田うなぎを揚げて麵の上に乗せたもの)、土魷魚羹(サワラのフライをのせた餡かけ麵)、牛肉湯(薄切り牛肉のスープ)などなど。しかしながら、どれももう一度食べたいほどのものではなかった。だんだん気分は下り坂になる。僕の舌が美味しいものを理解できなくなってきたのか、との不安も頭をもたげる。

台南に二泊の後、気分を新たにして中南部の嘉義という町に向かった。余り観光客が訪れない、まさに台湾における庶民の食生活を知るのにぴったりの町である。

ここに三泊し、周辺のさらに小さな町を含めて歩き回った。どこでも市場には人が溢れ、食材も多様であった。市場を眺める限り美食の地はまちがいなしである。ちなみに嘉義の名物は火雞肉飯。火雞とは鶏ではなく七面鳥のことである。僕なら日本の牛丼に軍配を上げる。

うかつにも思い至らなかったが、現地に行つて初めて気が付いた。街角の食文化には酒が無い。ビールさえも置いてない。食事だけしてさっさと帰る。スマホでいろいろ検索したが、結局この町で食べて飲む場所は日本式

居酒屋を除き見つからなかった。台湾で日本酒と焼き鳥の組み合わせはなからう。毎晩、コンビニで購入した台湾ビールをホテルの部屋で飲んで過ごした。

旅の最後の台北では致し方なく、庶民的不是ない、ガイドブックに載っている台湾料理の有名店に出掛けた。ビールも紹興酒もあった。客は殆ど日本人であった。

帰国後調べて台湾の飲酒率は十一%と世界でもかなり低い位置にあると知った。日本は四十%である。

帰国の日、朝早く南機場夜市に出掛けた。夜市であるが虱目魚粥の店は早朝から営業している。かの物書きは一時期毎朝ここで虱目魚の粥を食べていたそうである。気力を振り絞ってタクシーに乗る。粥の替わりに虱目魚湯(スープ)とおこわ飯、これが台湾最後の食事となった。

結局八日間で虱目魚の粥を二杯、湯(スープ)を一杯、開きを焼いたものを一枚食べて虱目魚との出会いは終わりをつけた。

チェロの音色にはまる

藤原 道夫

チェロの音色は音楽を聴き始めた高校生の頃から好きだった。ただししばらくはラジオに頼っていて、生演奏を聴く機会は滅多になかった。それから七十年経った今、まさにとりこになっている。これは偏に優れたチェリストの生演奏が聴けるようになったことによる。

五十歳台になりロストロポフ・ヴィツチ、ヨーヨー・マ、マイルスキーなど世界的なチェリストの演奏を聴く機会に恵まれ、彼らの生み出す音色に魅せられてきた。

コンサートはコロナ禍が拡がり始めた二〇二〇年春からほとんど開かれなくなり、二〇二一年も後半になり日本人演奏家を中心に徐々に再開されるようになった。

この間に生演奏の音に対する渴望が強まり、感性も鋭くなっていったように思う。

一昨年六月、久しぶりにチェロの実演を聴いた。弾き

手は前年にジュネーブ国際音楽コンクール・チェロ部門で優勝した上野通明。チェロの響きを全身に受け、陶醉したような感覚に浸った。その後彼の演奏を追いかけて三回聴き、その度に生み出される音色に魅せられていった。またブルネロ、ケラス、ソツリマ、宮田大、佐藤晴真（2019ミュンヘン国際音楽コンクール・チェロ部門優勝）といった世界で活躍するチェリストや日本で大御所、堤剛の演奏を聴く機会があり、ますますチェロの音色にはまっている。中でも上野が東京交響楽団とエルガーの「チェロ協奏曲」を演奏した後に、アンコールで弾いたバッハの「無伴奏チェロ組曲」からの一曲に心が揺さぶられた。ロビーで売っていた彼が最近出した（2022録音）「無伴奏チェロ組曲」のCDを躊躇することなく求めた。同じ曲はすでにカザルス、ヨーヨー・マそれにマイルスキーの盤を持っているにもかかわらず。

話は変わってオーディオのこと。

昨年夏、以前から使っているオーディオで音楽を聴き始めた時、左スピーカーから音が出ていないのに気付き

た。どこに問題があるのか調べる手立てがないものの、四十年ほど使っているパワー・アンプ（アキユフェーズ）だと直感した。この際手ごろなプリメイン・アンプに替えようとオーディオを扱っている店に出かけた。あれこれ物色していた時、オーディオ・アドバイザーという名札を付けた係員が寄ってきたのでしばらくオーディオの不具合について話し、問われるままに現在使っているオーディオ・セットについて説明した。彼は言う「お客さん、この際いいものを買ったほうが結局お得ですよ、一時しのぎで満足いかないものを求めても買い直す人が多いのです」と。あれこれ思いめぐらした末、すすめられたプリメイン・アンプ（マランツ、使っているプレアンプと同じメーカー）を求めた。考えていた予算の三倍程かかったが、それ相当のことはあった。

新しいアンプがセットされていよいよ試聴、上野による最新のCDをかけたところ、驚くばかりに素晴らしい音が出てきた。まるで本人が目の前で演奏しているかのよう。また、ケラスとメルニコフによるベートヴェンの「チェロソナタ第三番」（2014録音）を聴くと、チェ

ロの音が生き生きとし、ピアノの音は芯がしっかりと明るく響くではないか。CDもアンプも製作技術が進歩したのだ。それに新しいアンプと今まで使ってきたスピーカー（トーレンス）との相性がよいようだ。

CDをいろいろ聴いていくうちに、一九九〇年以前に録音された盤の多くは独特のくせ（音の芯がしっかりとおらず、サ行の音が耳障り）これはよく言われていたの強いことがはつきり分かった。以後に制作されたCDではそのようなくせが薄れ、二〇一〇年以降に録音された盤はおおむねよい音が出る。手元にあつて時々聴く古いCDを新しい録音盤に買い直す気にはなかなかないのだが、よいのがあれば求めて楽しんでみたい。

CDで音楽を楽しむのは手っ取り早いですが、本物の音・音楽は生演奏を聴くに勝ることはない。オーケストラの演奏でもチェロの音は聴けるが、できれば優れたチェリストのリサイタルに出かけてみたい。ここ二年間は恵まれていたが、そのような機会は多くない。チャンスを待ちながら、音質のよいCDを聴いて感性を磨いておこう。

心休まるラテラノ大聖堂

松浦 俊博

ローマの街を歩いていたら突然の雷雨。傘をさしていても全然役に立たない。どこか建物の中に避難しなければ。その時、目の前に見えたのが大きな聖堂。無事にフアサードに入ったが服も靴もびしょ濡れ。ここはどこだろう。中でガイドブックを開いたらラテラノ大聖堂とある。ありがたい。昔の旅人も雨宿りに聖堂を利用したのだろう。この最初の出会いは記憶に鮮明に残っている。

実はラテラノ大聖堂はローマの四大聖堂の一つである。他の三つの大聖堂と違い、十四世紀まで教皇居住の宮殿で、五回も公会議が開かれ、さらに二十世紀にはヴァチカン市国の独立を決めた条約も結ばれている。二十年近く前の雨宿り以来、ローマを訪ねる度にまずこの大聖堂に向かうようになった。

タキトゥスの『年代記』によると、ラテラヌス家がネ

ロ帝に対して陰謀を企てたが失敗し、財産を没収されたとある。時代が経って皇帝の妃の住居となったが、キリスト教公認後、その場所をキリスト教徒たちに寄進したので、ここにある教会や宮殿にはラテラノという名称がついたようだ。また、聖ピエトロ大聖堂はペテロの墓の上に、聖パウロ大聖堂はパウロの墓の上に建てられたが、ラテラノ大聖堂は前述のように聖地に建てられたわけではない。さらに、教皇専用の祭壇の上に聖ペテロと聖パウロの頭蓋骨の一部が納められた箱が祀ってあるという珍しい作りになっている。

ここに行くには、近くのサンタ・クローチェ・イン・ジェルサレンメ聖堂からカルロ・フェリーチェ通り公園を歩くのが心地よい。大聖堂近くの広場に差し掛かると、アッシジのフランチェスコと教人の聖職者の像が見えてくる。彼は両手をあげ天を仰いでいる。教皇のインノケンティウス三世にフランチェスコ会を認可してもらうために仲間と共にローマにやって来て、ラテラノで仮認可をもらい、次の教皇から同地で正式に認可をもらったと

いうことだ。十三世紀初めの出来事なので、その時期には教皇がこの地に住んでいたのだ。

さて、ラテラノは公会議の開かれた回数が五回と最多の場所である。十一世紀半ばに正教会と相互破門したため、カトリックの公会議はコンスタンティノープルでは開かれなくなった。代わりの場所となったのが、教皇の居住地のラテラノ宮殿である。

初めて開かれたのが一一二三年で、叙任権闘争を終結させた前年のヴォルムス協約を承認した公会議である。次が一一三九年で、対立教皇が引き起こしたカトリックの分裂を収拾した。三回目が一七九年で、コンクラーベでの教皇の選出方法を決めた。四回目が教皇権全盛期のインノケンティウス三世が招集して一二一五年に開かれ、彼は「教皇は太陽、皇帝は月」という有名な言葉を残した。最後が一五二二年で、教会改革を目指したが果たせず、五年後にルターの宗教改革を招いてしまった。

一回目から四回目までは立て続けに公会議が開かれたが、五回目開催までには三百年間のブランクがある。こ

の間に何があったのかといえは、「教皇のバビロン捕囚」で教皇庁がフランスに移り、さらに二度も火事にみまわれた。となれば建物は荒廃し、もはや教皇の住居ではなくなる。教皇はヴァチカンに居を移したのだ。十七世紀からラテラノ聖堂の修築が始まり今日の姿になった。

一八七〇年にイタリア王国軍はフランス兵が守っていたローマを占領した。以後、教皇庁は王国に併合され、両者の対立が続いた。一九二九年に国王の代理のムツリーニと、教皇ピウス十一世の代理のガスパツリ枢機卿がラテラノ宮殿で条約を締結し、ヴァチカン市国の独立を認めた。第二次世界大戦後に王国が消滅して共和国になると、一九八四年にまたここで条約改定が行われ、国内でのカトリックの特別な地位は削除された。現在、イタリア国民の八〇%がカトリックを信仰し、他にプロテスタント、イスラーム教徒、ユダヤ教徒もいる。

数々の歴史の荒波を乗り越えてきたラテラノ大聖堂にはヴァチカンにはない魅力もあり、いつ訪れても心が休まるところだ。

久しぶりの台湾旅行

松田 昌康

昨年末、コロナウイルスのパンデミックが下火になったのを機に、五泊六日で台湾に行った。台湾新幹線建設プロジェクトに携わっていた時以来である。

この旅行で印象に残ったことの一つ目は、営業運転の新幹線に乗ってみて、振動も少なく快適な乗り心地だったこと。仕事では左営の車両基地に止まっている車両に乗っただけだった。二つ目は、デジタルノマドという新しい働き方をする人に会ったこと。三つ目、これが一番インパクトがあったが、台湾では公的な場所はどこでも（市営バス内でも）WiFiが使えたこと。ITインフラは台湾の方がかなり進んでいるように感じた。

桃園の空港から台北のホテルまでは、出張ではタクシーだったが、今はMRT (Mass Rapid Transit) で台湾国鉄の台北駅まで行ける。MRTの台北駅から国鉄の台北駅まで地下街で繋がっている。着いた日の夕食に

は、有名な鼎泰豊で修業した人が開いた店で飲茶を食べた。鼎泰豊に劣らず美味しかった。この店は、初めて台湾に出張した時、会社の駐在者が連れて行ってくれた店だ。ホテルは台北駅の真ん前で、とても便利な場所。

翌日、二日前に台湾入りした義妹が宿泊しているゲストハウス（ラウンジやトイレ等の共有スペースがある簡易宿泊所）を見学してから、高山烏龍茶を買いに行った。夕食は、義妹の若い女友達Aさんとお父上及び仕事上の関係者二人を含む七人で、雲南料理レストランで食事をした。この店は、以前にも二回程行ったことがあり、美味しかったので覚えている。相変わらず美味しかった。

ちなみにAさんは、いわゆるデジタルノマド（ノマドは仏語で遊牧民）で、場所に縛られず国内や海外を旅しながら、IT技術を活用して自分のペースで働く人だそう。日本のピースボートの世話役になって世界一周もしたとか。海外の人ともパソコンで繋がって仕事をしている。夜中になることもしばしば。夕食後、新幹線（台湾では高鐵）のパウチャーターをチケットに替えに台北駅の窓口に行った。夜九時を回っているのに、若い女性（色

白の美人)が丁寧に対応してくれた。

三日目から二泊三日で高雄へ。新幹線で台北から左営(南の終点)まで約八十分。席と席の間が日本より広めでゆったりしている。左営からMRTでホテルに向かい、荷物を置いて街角の食堂で昼食を摂ってから、愛河の橋の手前の勞工博物館に入ってみた。戦前の労働争議の様子などが展示されていた。日系の会社に勤めていたという男性(何とか日本語ができる)が説明してくれたが、対応が丁寧過ぎて、トイレの場所を聞いたら、入口で待っているのには閉口した。愛河の橋を渡り、歴史博物館に行った。元の高雄市役所で立派な建物だった。戦前に進出していた日本企業のロゴなどの展示があった。一階のカフェでAさんと待ち合わせ。夕方になり、歩いて湾岸のアート地区に行った。倉庫群の壁に描いた絵、コンテナを積み上げた作品、港の水路を跨ぐタワーのような大港橋など、大勢の家族連れや若者達が来ていた。夜景も素晴らしかった。アクセスにはLRT (Light Rail Transit: 低床式路面電車)があり便利。そこから高雄図書館に行った。八階建ての立派なビルで、日本作家の平

積みコーナーがあり、人気があるようだ。帰りに六合夜市に行き、三百五十メートル程の両側の夜店を物色しながら食べた海鮮粥は、魚貝の具が多く美味しかった。

翌日も昨日のアート地区を観て、対岸の旗津地区(高雄港の防波堤のような半島)の先端までバスで行き、海鮮料理を食べた。四人で大きな蝦蛄二匹、他に蛤と青菜の炒め物等。Aさんの強い推奨で蛙のブツ切り炒めを食べたが、また食べたいとは思わない。半島の外海側に砂浜が広がっていて、家族連れなどが散策を楽しんでいた。帰りはフェリーで約十五分、港の対岸に着いた。

三日目は、衛武宮国家芸術文化センターに行った。四つのホールが一つの屋根で繋がったユニークな建物でガジュマルのイメージとか。そこで奇しくも福井商業高校の生徒五人に出会った。近くの大学での発表会でSDGsとジェンダーについて発表した由。今の高校生は大したものと感じた。夕方の新幹線で台北に帰り、翌日帰国の途に就いたが、出発は二時間遅れ、家に着いたのは午前二時半。その時は最悪と思ったが、年明けの大地震、旅客機事故に比べればそれ程ではないと、今は思える。

休肝日を楽しんで

松谷 隆

最近、顔見知りにおうと、「ダイエットですか」とよく言われる。これに対し、余計なことは言わずに、ただ「休肝中です」と応えている。

というのは、一昨年七月の圧迫骨折以降、それまでのウォーキングや太極拳も半年前までできなかつたからである。

食事も二十年五月の胃ガン手術の際、胃の四分の一が切除されたため、以前の食事量の三割減となっている。

このような状況でも改めて「ダイエットですか」と問われるのは、半年で体重が五^キも減つたからだ。発端は、一昨年十一月の胃ガン後の定期検診で、主治医より「内視鏡で見たら、食道あたりに白いものが散見された。今はアルコールを控えるように」と言われた。その忠告に従い、アルコール量を半分までに抑えてきた。

半年後の昨年五月十一日の検診で、「『アルコールを控える』の意味は？」との愚問に、主治医は頭に来た様子で「アルコールは一滴でも飲めばアウトだ。腫瘍がガン化する」と大声で断言。耳が遠いのに、前回一人で面談したことによる聞き間違いだった（体重六十四・四^キ）。

それ以降、彼の言を破つて、食道ガンになるのは恥の上塗りと思ひ、二日だけの違反で、十一月十五日の定期検診日を迎えた。内視鏡検査では、三年前と同様未消化残があり、胃の一部の観察と病理検査サンプルの摘出で終わつた（体重五十九・五^キ）。

月末の面談で、彼は「検査結果は良好」、さらに十五日に撮影できた過去二回の手術痕や胃壁を示しながら「どこも非常にきれい。禁酒の効果だ」と満悦だった。

だが、次の内視鏡検査は今年の十一月、それまでは月一、二回脱線しても、腫瘍と禁酒令が消え去ることを期待して、とにかくアルコールを控えよう。

「休肝日」については、過去三回『何でも書こう会』で発表した。最初は二〇〇八年十月で、メタボ予備軍の

判定で、従来の運動に加え、週2日の休肝日を試行の結果、血液検査結果はすべて大きく改善しているとの内容。二回目は一年後で、休肝日週2日を最後の六週間だけしかできず、予備軍脱出はできなかった。しかし、YーG T Pが初めて基準値以下になり、改めて休肝日週2日を決意した。最後は二年後の七月、タイトルも誇らしげな『相乗効果』でメタボ脱出編である。

例会で「去年は週2日休肝できましたが、メタボ予備軍の判定でした。今年から週3日になっています」と読んだとき、大声で「うそだ!」とのクレイムが飛んできた。見ると、論客のOさんだ。

普段の付き合いで小生の正体はばれているので、このクレイムが出るに違いないと予想し、用意していた五年來付けている食事日記の直近の一月分のコピーをOさんに「クレイムはこれに目を通されてからにしてください」と言つて渡し、「検査後の体重は六十七キログラム^キで推移。昨日までの休肝日は八十一日で予定どおり、^キ継続は力なりを改めて実施した次第である」と結んだ。

コピーを一読のOさんより「びっくりした。お見事」と言われたと覚えている。

この食事日記は女優の沢村貞子の『わたしの献立日記』を参考に作ったもので、三食献立、身長、体重、アルコールの有無、現在では、体脂肪、内臓脂肪、BMI、筋肉量、代謝量、体温、血液酸素濃度、脈拍、外出先、移動手段まで記入している。

ただ、時々、献立も記入漏れがあり、その都度妻に聞いている。彼女も思い出しながら、正解を返してくれる。お互いの呆け防止に役立てばよいが。

十数年前に週1日の休肝日を始めたときは、ノンアルコール飲料はビールしかなく、度々暴走した。だが、最近はやインやハイボール、ジントニックなどカクテル類も増えてきたので、日替わりで休肝日を楽しんでいる。またの新品に期待を込めて、いかがですか。

なお名詞の「Diet」には「食事」「国会」の意味もありますよね。∴蛇足。

おさなともだち

三 春

京浜急行の平和島駅は明治の開業時には沢田駅と名付けられたそうだが、後に改称されて昭和三十六年までは

「学校裏」という名だった。なんとまあ気の利かない名前かと驚くが、その「学校」とは大森第二小学校（旧・寄木尋常小学校、現・開桜小学校）、私の母校でもある。

平和島そのものは終戦直後には東条英機の一時収容所として知られたらしいが、昭和三十年代の大森っ子にとっては身近な海水浴場だった。埋め立てが進んだ今は温泉や映画館、競艇場などが集中する娯楽スポットだ。

昨年九月末の夕暮れ、外出から戻ると郵便受けにクル宅急便の不在票が入っていた。配達日時が当日の十八〜二十時と指定されていて、送り主は阿部啓一とある。エッ、音信不通だったあの啓ちゃん？ その名を見た途端に子供の頃の思い出と情景が一気に蘇った。

啓ちゃんは八歳の時に父親を事故で亡くした。気丈で陽気な母親に守られて三人の遺児は快活で賢くて誰からも好かれていた。一家は我家のすぐ隣に住んでいたので、私の部屋の窓からは彼らの日常生活の様子がよく見えた。夏の午後にはホースで水を撒く裸足の啓ちゃんとキラキラ光る飛沫を今も鮮やかに思い出すことができる。

高校を卒業した彼は家計を助けるために大学進学を諦め、競艇選手養成所の訓練を受けてスター選手に躍り出た。競艇の世界では情報流出を防ぐためにレース期間中の外出はもちろんのこと外部との面会も電話も禁じられている。そこで、久しぶりの「六年四組」のクラス会は平和島競艇でのレースの翌日と決められた。貧しい時代を共有した子供たちの絆は強い。彼は自ら調整したエンジンで大事そうに抱えて現れ、皆の歓声を浴びた。

さて、話は現在に戻ってその不在票。荷の中を見れば謎が解けるかもしれない。慌てて業者に連絡し、指定時間内にそのクル宅急便を受け取ることができた。だが、小鯛や鮒やグジの昆布締めなど若狭の海の幸がギッシリ

入っているだけで何の添書きもなく、舞鶴の住所と電話番号が記された伝票があるのみ。こんなときの想像は悪いほうに傾きがちだ。お札の電話をかけて悲しい出来事を知らされたりしたらどうしよう！ 不治の病の床で旧友たちに饑別を送ろうとしたのだろうか、それとも彼は既に逝ってしまって家族が遺言に従って発送したのだろうか、他にもこれを受け取った旧友がいるかもしれない、片っ端から電話してみようか。迷いに迷った末、大切に取っておいた一番美しい絵ハガキに感謝と懐旧の思いを詰め込んで、とぼとぼと深夜のポストに向かった。

その二日後の夜、珍しく固定電話が鳴った。近ごろは勧誘やセールスが多いので無愛想かつ不機嫌な声で応えることにしている。電話の相手も怪しげなしわがれ声だ。

— どなた？ 不動産の営業ならお断りよ！

— あ、あのお、私、阿部といいますか……

— エッ！ あらヤダ！ 啓ちゃんのお（口調急変！）

こうして、七〇歳をとうに過ぎたジジババは半世紀分

の思い出話と身の上話に花を咲かせ、しんしんと夜は更けていった。引退後は舞鶴で居酒屋を始めたそうで、関西弁がすっかり板についている。

私からも東京の銘品をと思案しつつも毎日ぐうたらしているうちに三か月が過ぎ、師走を迎えた。

大変だ！ 十二月二十八日、また何の前触れもなく鯖のへしことウニと特大の水蛸が届いた。申し訳ないという心の声とは裏腹に、突然華やいだ正月料理に頬が緩む。

— もしもしい、ねえ、いろいろ送ってくれてとても嬉しいけど、啓ちゃんのお店って繁盛してるの？

— ヒマやでえ、けど儲からんでもエエンや、もう銭も要らん、長生きしてもせいぜいあと十年やろ、喜んでもろて昔話して楽しく過ごす、それが一番やがな

— でもお、何かお返ししたいなあと思つて

— 気にせんといて、これが趣味みたいなもんや、この次は白イカのええのん見つけたらまた送るでえ

互いに「会おう」とは決して言わない。あの頃をあの頃のまま記憶の底にとどめておくために。

好事魔多し

森田 晃司

令和五年は、小生にとって久しぶりの当たり年でした。近年、熱は下がったとはいえ、かつて知る人ぞ知る熱狂的な虎キチだった小生にとって、岡田彰布監督の名指揮のもとに阪神タイガースが日本一を奪還したのは、積年の夢の実現でした。

また、近年、格別の関心を持って見つけている国際情勢では、ナショナリズムの復活が目覚ましく、はっきりとグローバリズムを凌駕する年となりました。

寡占化が著しい国際金融資本を後ろ盾としたグローバリズムは、この百年ほど欧米の政治経済を支配し、世界中に欧米の価値観を押し付け、各国を翻弄してきました。

しかし、グローバリズムの先頭を走っている筈の欧米各国は、大量の移民の流入に悩まされ、様々な社会問題が発生、民族間の争いも激化し、国家のアイデンティティ

ィーを見失う危機に瀕しています。

こうした混乱の中、欧米の民衆も、BRICSやグロ―バルサウスの民衆も目覚めました。受け継いできた地域や民族の文化、伝統、慣習などが何よりも大切に維持して行くべきものと認識を改めたようです。

天の配剤か、この情勢の中、ロシアにウラジーミル・プーチンという稀代の政治家が現れました。ソ連崩壊後、国際金融資本にもてあそばされ、GDPは半減し、数百万の餓死者が出たと言われるロシアの経済危機を立て直し、ロシアの自主独立のために二十年間、金融資本と孤独な戦いを続けてきました。

従って、ロシア国内で圧倒的な支持を受けているプーチン大統領ですが、二〇二二年の二月にウクライナに向け「特別軍事作戦」を開始してからも、作戦の意義について説明し、

- ①世界を支配する金融勢力と戦う。ロシアは屈しない。
- ②ロシアの言語、文化、伝統は守り抜く。(今の欧米は自ら破壊している)

- ③欧米の政権は金融勢力に乗っ取られた悪魔の政権で

ある。ロシアは断固戦う。

といった趣旨を繰り返して述べています。世界の指導者の中で、金融勢力を名指しで非難し、戦うと公言しているのはプーチン大統領だけです。従って、金融資本の手先である大手マスコミから酷く貶められています。

一方、米国に於いて、エスタブリッシュメント（ウォール街中心）の手から、米国民の手に米国の政治を取り戻すというドナルド・トランプが二〇二四年の大統領選挙で再選されれば、米露という世界の二大核大国はグロームバリズムに抵抗する指導者が率いることとなります。国際情勢の潮目は根本から変わることとなりそうです。

現実には、グローバリズムの先兵たる米国のネオコンが仕掛けたともいわれるウクライナ戦争では、案に相違してロシアの強硬な抵抗に合い、ロシアを駆逐するどころか、戦闘が長引けば欧米が一層苦しむ展開となつていきます。

中東に飛び火をしてハマスを利用して、パレスチナの

弱体化を図る試みも思惑通りには進んでいません。

こうして令和五年は万々歳のうちに閉じると思われたのですが、〃好事魔多し〃ですね。十二月六日早朝、風邪気味ではありましたが、毎朝のルーティンで散歩兼ランニングに出かけ、急坂を駆け上ったところで、フラフラとして転倒、起きては転び、起きては転びして、計三回全身を打ち付け、歩行者に助けられ救急車で運ばれ、そのまま入院する羽目となりました。

肺炎の治療と骨折していた顎の縫合手術などの治療を受け、二週間余りで退院しましたが、顎の手術の影響で当分は流動食のみ、また、退院後もあちこちに不具合が露見し、しばらくは病院通いが続く見通しです。旨いものを食べ、運動していれば、健康は維持できるとばかり、医者嫌い、病院嫌いを通してきましたが、まさに〃生兵法は怪我のもと〃と思ひ知らされました。

家族からはこの程度で済んで幸運だったと慰められています。心からそう思えるように、残りの人生を大切に生きようと思つています。

鬼のワルツ

八木 信男

この一年、高校時代の同級生とフォークソングのバンドを再開しました。このバンドはオリジナルの歌を歌うことを信条としているので四〇年ぶりに作詞をしました。曲はまだありません。

鬼のワルツ

プロローグ

みなさん私を覚えてますか生まれは岡山県鬼ヶ島

そう桃太郎さんと戦ったあの鬼です

鬼として生きてきて今年で八十八万歳

人と言うなら米寿です

じじいになった鬼の話聞いてください

以下 歌の部分

一番

いろんな童話やお話で

悪役一筋生きてきた

そんな私も老いぼれて

ひっそり介護を受けてます

二番

昔の記憶は鮮明で

昨日のことは忘れます

お世話になつてるヘルパーの

名前がなかなか出てこない

※（くりかえし部分）

虎のパンツはもうはけない

黄色いオムツをはいています

お世話になつてるヘルパーの

会社の名前は桃太郎

三番

赤青黄色に緑色
鬼の仲間が集まって
明日は楽しい同窓会
もちろん酒は鬼ころし

四番

若いころの武勇伝
村の娘を奪い去り
嫁にしたのはいいけれど
やっぱり鬼嫁になりました
※くりかえし

五番

そんな鬼嫁先立って
いまは天国いや地獄
毎日写真に手を合わせ
般若心経唱えます

六番

ヘルパーさんのお名前を
やっと思いだしました
雉子牟田、猿田に犬井さん
たまにしくじりキレられる
※くりかえし

七番

いまの私のささやかな
夢を聞いてくれますか
今度生まれてくるときも
あの鬼嫁と出会いたい

八番

毎日みんなの世話になり
子供や孫に励まされ
いつかある日のそのときは
やっぱり笑顔で別れたい
※くりかえし

前立腺がん闘病記

矢澤 正二

令和四年十二月二十三日

そもそも私は頻尿であった。特に夜間頻尿が酷く漢方薬を飲んではいしたが一向に効かず、健康診断で相談したところ泌尿器科のクリニックにいくよう勧められたのが始まりだ。

クリニックで血液検査の結果、PSA値（前立腺特異抗原）が高く、医師からは「はっきりさせましょう」と近くの病院で検査を受けることになった。

十二月二十六日

指定された病院でMRI検査を受け、不安のまま年を越した。

令和五年一月六日

クリニックで検査の結果を聞く。「がんの疑いあり」ということで、私が以前脳卒中で通院していた大学病院がいいでしょうという事になった。

一月十九日

紹介状を持って大学病院に行く。やはり「がんの疑いあり」ということで検査入院することになった。

二月九日～十日

一泊二日の検査入院（生検）

二月二十日

その結果、数か所のがんが発見された。うち「顔つきの悪い」ものが二、三個あると告げられ「がん宣告」を受ける。ステージⅢ。そこで「治療を行いますか」と問われた。年齢（八十才）、費用、体力などその価値（覚悟）がありますか、ということらしい。

痛みがなく通院だけで治療できるならと軽い気持ちで治療することにした。

ホルモン療法と放射線治療の併用を提案され、まず一回目のホルモン注射をする。

三月二十七日

放射線治療のための超音波、心電図、MRI検査、歯科その他の検査をした。大学病院は広くかつ複雑で高齢者には大変であった。この時PSA値は標準値まで下が

つてはいたが、がんは消えたわけではない。

八月二十九日〜八月三十一日

放射線治療のため体内に金属マーカを留置する手術を行った。私は放射治療とは、放射線を照射するだけで手術が必要だとは思ってもいなかった。

九月十九日〜十月二十七日

放射線治療がスタート。やつと治療である。この日からサラリーマン時代のように毎日の通院生活が二十八日間始まった。治療はそれ自体辛いものではなかったが、放射線の照射に必要な畜尿が頻尿の私にはそれは大変であった。畜尿は照射前に三百mlの飲水が必要であるが、しばしば膀胱が爆発しそうになり苦しんだ。

決まった時間にバスを三路線乗り継いで、なおかつ畜尿を考えての通院は本当に大変であった。

私が通院中でもとてもシヨックだったのは、白髪のご婦人にバスで席を譲られたことだった。私よりはるかに年配と思われるご婦人に真剣な眼差しで席を譲られたのだ。それも一度ならず二度もあった。よほどやつれた姿に映

つたに違いない。

二十八日間の治療最終日、看護師から「よく頑張りましたね」と言われた時には本当に嬉しかった。

十月二十七日

泌尿器科の医師から放射線治療は終わりました。もう二度と行くことはありません。ただし、ホルモン治療は今後二年間続けますと言われた。

治療前PSA値が三二・八二あったのが〇・〇〇二まで下がった。がんに完治、根治という概念はなく抑え込むということのようだ。

前立腺がんは、ステージⅢで平均余命率九五%、あまり家族にも緊迫感はない。

家人曰くおできが出来たようなのだと言われた。しかし、がんには変わりない、されどがんである。

以前私は、脳卒中を患い今回はがんに見舞われた。頻尿はまだ続いている。そして多少の後遺症はあるが、与えられた命は最後まで全うしようと思った。

地元消防団はハイパーレスキュー隊

山縣 正靖

左の挿絵は、八王子と秋川を結ぶ秋川街道に残る火の見櫓です。これは地元消防団が建てた火の見櫓で、都内では数少ない立派な建築です。まさに地元の誇り。傍には地区の寄り合い所とお地藏様が祀られ、地元の文化センターです。消防資材倉庫には誇らしげに

metropolitan volunteer
fire corp と書いてあります。

皆さん 日本の消防は地元消防団と国立の消防署の二本立てだということをご存じですか？ 前者は江戸火消しの伝統を継ぐもの、後者は関東大震災や空襲大火災に対処するために急遽増設された国立の消防署です。

ここまで書いてきたところに、能登半島大震災の第一報がはいってきました。

日頃はおとなしい女性アナウンサーが、金切り声で、「上に逃げてください。避難して下さい」と絶叫したのです。

夜が明けるとつれ、警告通り津波が押し寄せ、道路は寸断され、液状化現象も併せて多数の建物が崩壊したことが明らかになってきました。

この間、消防団や消防署はどういう行動をとったか、いざれ明らかになるでしょうが、両者とも必死の救助活動を行ったことは想像にかたくありません。特に消防署の大型消防車は動きが取れない。この間、地元消防団はリーダーシップを発揮して地元の人々を巻き込み、崩壊した建物から被害者の救出に奔走したものと思われまます。地元消防団は地元のハイパーレスキュー隊なのです。

この間、多くのことが起きました。海保の飛行機が救援物資を早く届けようとして事故をおこした、一方日航機ではCAの沈着な絶叫に従って三百余人の乗客が無事脱出できた。

日本人は危機に対処して協力して安全を守る 素晴らしい民族なのです。

今回の経験を分析して災害対策が改善、強化されん事を祈ります。



Independent — 英国の語学学校

吉田 眞人

三十代後半の時英国に赴任し、二週間語学学校に行った。学校はロンドンから北百五十キロほどのイースト・アングリア地方の中心都市ノリッジにあり、ロンドン市内のリバプール・ストリート駅から電車で行く。

ホストファミリーの家はイースト・アングリア大学（カズオ・イシグロの母校）に近く、主人はアイルランド出身、夫人はアルメニア出身であった。夫人によると「母国では、自分に釣り合うクラスの相手を見つけることが難しいので、英国に出てきた」との由。自作の大きな油絵が居間に飾ってあるなど、なかなかの才人と見受けられた。主人は石油採掘の技師で、折から最盛期を迎えた北海油田生産現場に従事、最近引退したという。

丁度クリスマスであったが、ご馳走が供された記憶が無い。アルメニア正教徒の夫人にとってクリスマスは一

月六日なので、十二月にはご馳走は出なかった、という事だったらしい。

娘三人のうち、長女は独立してパートナーと住んでおり、ここへも一度訪問した。少し離れた田園地帯で、立派な暖炉があり、まさにカントリーライフといった感じ。さらに大変な美人で英国に美人なしというのは間違いだと判る。尤も本人は人種としてのイギリス人ではないが。

授業が始まった。クラス分けが行われ、同レベルからの三十人ほどが同級生となった。

最初に入ってきた先生は三十歳前後の女性。入室後、いきなりビートルズのカセットテープをかけた。成人に達したばかりの女性が、早起きし、家のドアをそっと開けて出て行く。家出をする情景を歌ったもので、英国で非常に重要な Independent という価値観を表わしたものだという。（歌の題名：She's leaving home）英国に來たからには是非この Independent という概念を記憶しておいて欲しい、と力説した。極めて印象的な授業（演説？）であった。

クラスは様々な出身国の生徒で成り立っていた。

その中に、いつも四、五人のグループで行動していたクウェート勢がいた。不遜な、ぶっきらぼうな態度で、かつ巻き舌の発音で極めて聞き取りにくい。聴いてみると、クウェート石油公社（KPC）から派遣されてきたとの由。丁度一ヶ月ほど前に、上司のお供でKPCを訪問し、幹部のSU氏を表敬訪問していたので、そのことを伝えると、あら不思議、極めて丁寧な物腰となった。

「次は何時SUと会うのか、その時には自分達は語学学校で極めて真面目に熱心に勉強に励んでいたとは是非伝えて欲しい」と懇願される始末であった。

イタリヤから来た若き紳士は、聞く力も話す力も卒業レベルと見受けられた。ただ本人は「自分はグラマーが不十分なので、ここで学んでおく必要がある」という。私を含めた大方の日本人と正反対である。

アフリカのブルンジから来た青年とは政治論議になった。彼の国では政党は一つしか無いというので、こちらが驚くと「自国のような発展段階の国で、どうして複数の政党が必要なのか」と強調する。反論は難しい。

各種の課外プログラムも充実していて、積極的に参加した。

乗馬教室。いきなり各自馬に乘せられた。鐙を外して馬の腹を蹴ると歩き始める。手綱を右に引くと、馬は右に行く。体のバランスを崩し、左右の手綱を少しでも引くと、馬はそちらに行く。何回か路を外れそうになると、すっかり馬に信用されなくなる。歳をとった大人しい馬に代えて貰って、何とかゴールにたどり着いた。

市民ホールでやっていた子供向けの劇に招待された。会場の真ん中に通され、劇の始まる前に起立させられ「語学学校の生徒さん達です」と紹介されると、大きな拍手で迎えられた。自国の言語を習いに来た外国人を素直に歓迎している。子供向けの劇なのに、或いは子供向けだから、ヒアリングが極めて難しい。幽霊が出てくる場面で、子供達が一斉に「ゴー」と叫ぶ。「ゴースト」のストは全く聞き取れない。英語は難しい。

短い期間であったが、貴重な国際体験を楽しめた二週間であった。

ローマのアクア

松浦 純子

昨年の夏はとにかく暑かった。猛暑日も過去最多。国連の事務総長も「地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰化の時代が到来した」と述べるくらいの暑さだった。南ヨーロッパ、東アジア、北アメリカは特に気温の上昇が激しかったが、熱波だけではなく、大洪水や山火事まで起こり、人間の力では対応できないくらいの災害に見舞われた。今年は、そうならないことを願っている。

さて、南ヨーロッパのギリシアやイタリアには毎年多くの観光客が訪れる。ギリシアでは暑さのため、パルテノン神殿があるアクロポリスの入口が一時閉鎖されたり、ロードス島やコルフ島では山火事が起こり、住民や観光客が島の外へ避難するという騒ぎにまでなった。

イタリアではシチリア島やサルデーニヤ島で四五度を超える暑さにみまわれた。見どころいっぱいなのはイタリアは建物の中を見るだけでなく、街並みや建物を外から見

る事も楽しい。従って必然と外を歩くことになり、熱波の影響をまともに受けてしまう。しかし、幸いイタリアには今でも噴水や泉がたくさんある。ザーという水の音が聞こえてくると噴水が近くにあると分かり、疲れた体も「あともう少しだ」と頑張れる。テレビでは、暑さのあまりバルカッチャの噴水の水を頭から浴びたり、ペトボトルに水を入れて飲んだりしている人が映っていた。バルカッチャの噴水とはスペイン広場にあるベルニーニが作った小舟の噴水のことである。ふつう噴水と言えば水を勢いよく吹き上げている姿を想像するが、これは舟から水を排出しているという感じである。

ローマ市には噴水や泉が二千、誰でも使える水飲み場が五千あると言われている。もちろんこれらは、四六時中ザーと音を出して水を噴き出したり、管から水を出し続けたりしている。水飲み場にはコンクリか石でできた排水溝があるが、ローマでは掃除をする人がいないのか、よくゴミや落ち葉で詰まっている。それでも平気で水を飲む人がいるが、私にはちよつとまねできない。

古代ローマはアッピア街道をはじめ多くの街道を建設したことが有名だが、水道も建設している。南フランスのポン・デュ・ガール、スペインのセゴビアの水道橋、そしてローマ市のクラウディア水道橋などは今でもその遺構を見ることが出来る。遠く離れたところから水を引いてきてわずかな傾斜をつけて水を流す。街道を作るより大変な工事だったと思う。首都ローマに水を供給した水道は三世紀の初めまでに十一本作られたが、総距離の八〇％は地下を通っているので外からはあまり見えない。だから、郊外の緑地を横切って二千年近く立ち続けて、私たちにその雄姿を見せてくれるクラウディア水道橋を見ると、「お疲れ様」と声をかけたくなる。

古代に作られたローマ市の水道は六世紀前半に全て閉じられてしまった。東ローマ帝国のユスティニアヌス帝の將軍だったベリサリウスが「ローマに蛮族侵入！」の情報を得て、地下を流れる水が市内に入るところで全ての坑道を塞いでしまったからである。坑道にはメンテナンス用に人が入れる穴がところどころ空いているので、

そこから蛮族が侵入することを警戒したのである。

では、なぜ今でも噴水や水が出ているのかと言えば、ルネサンス期以降に水道を復興させたからである。教皇ニコラウス五世が十五世紀中ごろに復興させたヴェルジネ水道はトレヴィの泉やバルカッチャの噴水など市内のほぼ全ての噴水や泉に水を供給している。ジャニコロの丘にあるパオラの泉は十七世紀初めの教皇パウルス五世がトライアーナ水道を復興させた記念に作ったものである。もちろんローマ市の庶民に送る水道も復興された。イギリスでさえ、産業革命後に水道網が拡大していったことを考えると、古代に水道網を作ったローマ人のインフラに対する意気込みが分かる。

私がローマで好きな場所の一つにマッジョーレ門がある。市内を走る六路線のトラムのうち四路線がその門を通る。この門はクラウディアウス帝が作り、古代に作られた十一本の水道のうち五本が門の上の導水管の中を流れていた。トラムを降りてこの門の回りを歩くと、水道や門を作った人々の自慢話が聞こえてきそうである。

神奈川県近代文学館で楽しむ

長谷川 修

神奈川県近代文学館は、横浜の「港の見える丘公園」南東隅の高台にあって、緑が多く静謐な所にある。文学館には県内ゆかりの文学者を中心に収蔵品が多く常設展も良いが、特別展はもっと楽しい。

特別展では、普通、作家が生まれるまでの幼少期の作文、家族や友人との手紙、作家の生原稿等からなるが、神奈川県文学館の特別展にはこれに加えていくつかの特色がある。一つ目は特別展ごとに外部に編集委員を委嘱し、その作家に相応しいテーマを定め、展示は主題に集中する。二つ目は当館スタッフの調査や準備が行き届いており、各地の文学館や日本近代文学館、国会図書館、国立博物館等から貴重な資料を借り出してくる。三つ目は見学者数が適度で、作家の肉筆の原稿や手紙をゆっくり読むことができる。このようなことから、特別展では珍しい物や作家の意外な面に出会えて楽しい。

我が家の書棚には、特別展の中でも特に感銘を受け、記念にと買った三冊の図録がある。

『遠藤周作展——二世紀の生命のために——』では、カトリック作家としての遠藤に焦点をあてる。プロローグでは作者初の書下ろし長編『沈黙』を取り上げ、ポルトガル宣教師の棄教に至るまでの苦悩を描き、神は「母なるイエス」「救すキリスト」として現れる。遠藤が長崎で閲覧し本作を書くきっかけになったとされる汗まみれのへこんだ踏絵が展示されていて、心打たれた。エピソードは、最後の長編『深い河』^{ディープ・リバー}の世界である。ガンジス河のほとりを舞台に、キリスト教、ヒンドゥー教、仏教の障壁を越えた宗教多元主義、究極的には同一の神的存在が扱われる。

特別展見学までは、遠藤狐狸庵先生を『わたしが・棄てた・女』等のエンタメ小説を量産し、素人劇団「樹座」^{ツグ}を主宰する軽い人間かと思っていた。そうした活動のかたわら、本質は一二歳での受洗からリヨン・カトリック大学留学を経て七三歳での昇天まで、真摯に神と向

き合う敬虔なクリスチャンの一生だった。

『井上ひさし展―二一世紀の君たちに―』では井上の小説、戯曲、エッセイ、評論等の大量の作品群から、長編小説『吉里吉里人』他のユートピア小説を取り上げる。『吉里吉里人』は東北地方の理想郷―食料自給率一〇〇%、エネルギーは太陽光と地熱、先端医学立国であり少子化解消のための好色立国―が、日本国から分離独立を図る話である。夢は一日半で潰えるが、原稿用紙で二五〇〇枚の長編、執筆期間は連載中断を挟んで一七年、参考にした資料は膨大で何冊かの専門書を含む。興味深かったのは井上が作成した、「吉里吉里国地図」と「吉里吉里人」プロットである。どちらも小説を書き進めるための設計図となるが、大きい紙に細かい字で追加修正を施しながら作られており、創作の秘密が窺えた。

また編集委員松山巖によると、井上は自らを過去から未来への「中継走者」と自覚しており、物語を通して二一世紀に生きる若者たちに希望を託する。

『須賀敦子の世界展』の須賀は右二者とは異なり、残された作品はわずかである。六一歳の時、エッセイ集『ミラノ 霧の風景』で衝撃的レビューを果たし、六九歳で亡くなるまでの出版点数は五冊、没後に四冊ですべてだ。厳しい推敲を経て人物や風景をくつきりと描く須賀の文章は、味読するのに相応しく今もファンは多い。

特別展では、読書好きの少女が、「書く人になりたい」との夢が叶うまでを主題とする。須賀の人生は、パリとローマへの留学、イタリアでの結婚生活、夫の早い死、日伊文学の相互翻訳、と波乱に富む。帰国後二〇数年の熟成期間を経て自分の文体を確立し、六一歳で作家として自立する。

展示品では、須賀の足跡を辿った手作りのイタリア地図が面白かった。私も先日イタリアに行った折、ヴェネツィア、フレンチェ、アッシジ等須賀のエッセイにたびたび出てくる場所を訪ね、感興をもようした。

三冊の図録は、今も時々書架から取り出し、作家や作品の秘密を楽しんでいる。

昨年のクラブ活動より(1)

OB ペン会員はアウトドア好き



「俳句会」吟行
10月箱根にて



「何でも読もう会」下町散歩
4月墨田公園にて



勉強も好き



1月フォト句会



OB ペン会員はコンサート好き

4月 Jamming Hot Seven による Jazz 演奏会



9月ソワサンデイス演奏会



創作短編



写真 長尾 進一郎

暗殺前夜

大塚 喜子

「戸締りを頼みますよ」女中たちに言いおいて、満壽子は書斎に続く廊下の壁に手をつきながら歩いた。出仕には護衛を、屋敷にも守衛をおくように勧められるが夫は意に介さない。二日前も太政官へ向かう馬車をつけ狙う不審者が目撃されたと聞いた。

御者の中村太郎が勝手口に通じる廊下で

「岩倉様の使いの者が持つてきました」といつて差し出した書状を、満壽子は黙って受け取って懐に収めた。

「あおう」

「まだ何か」

「今晚も、厩舎の戸口にこのようなものが……」朱で内務卿大久保利通は千載の民害を致している、と殴り書きされた一尺ほどの麻の布を差し出した。

「気にせんでよろしゅう」不安げな家僕を宥め、麻布を袂にいれた。

廊下の燭台から明かりを取って、書斎に入ると、机上に広げられたままの唐紙に未だ墨の香が漂っている。

『為政清明』

天保十五年に元服して以降、利通が口にする心情である。満壽子は紙の端に手を添えて、暫く書に見入った。

明日、福島県権令として赴任する山吉盛典から揮毫を乞われていた。世間の見方がどうであれ、利通が公務に携わる姿勢はこの心情を裏切っていない。

「岩倉様から届きました」読み物をしている利通に、書状を渡して、隣室に下がった。帯をといて戻ると、利通は未だ手紙を読んでいた。

「お急ぎのご用でございますか」

「明朝七時にお尋ねしたいと伺った事への返事だ」

「じゃあ、明日はお早うございますか？」

「岩倉様はご都合が悪いそうだ。いつものように八時に内務省に行く」

「せいなら、お出かけ前に、ゆっくり幸子をあやせてたもんせ」利通は頷くと目を細め、書状を円卓に置いた。幸子とは三歳の娘で、亡き母上に目元が似ているとい

つて、殊の外可愛がつている。

寝台上がろうとした満壽子は「アッ」と小声をはつして、腹に手を添えた。

「どげいしたか」利通が咳込みながら言った。

「赤ちゃんが蹴りもうした」

「おお！ もうそげになつたか」言いながら満壽子の背中に顔を埋めた。襦袢を荒つぽく捲つた指先が腹に巻かれた晒しに跳ねた。

「ないよ、こや？」

「無事なお産を願う帯ですよ。ご存じなかつたですか。七人も身ごもりましたのに、安産の帯をご存じないとは」満壽子は続けた「高輪におわす、おようさんの二人の子をいれば、お前さまの子は九人になられるのに」わざと拗ねた言い方してみたが、利通は意にかえさない。満壽子の首筋に唇を押し当て、晒を撫で

「お！ 蹴つたか、蹴つたると……」子供のような歓声をあげたが、俄かにしみじみとした口調になつて

「彦熊は今年二十歳か……」彦熊とは嫡男利和の幼名である。

「立派になつて、お前さまの念じたるようになりまし
たなあ」

「？」

「我が子には外国人の師匠相頼みて、和漢洋の学問を学ばせたし……と仰いました」

「ああ、新しき政府が出来る前であつたな。あの頃は
落ち着かんかつた」

「お産の時に家にいらしたのは、彦熊の時だけでした。
お前さまは子らが生まれると、その都度に、文字に書き留めた長い巻物をくださりましたな。今でも大事にもつとりますよ」

「伸熊が生まれた文久元年は薩摩におつたはずじゃ
が？ 誕生に立ち合つたはずじゃが？」

「あん時は、伊集院の社殿造りで、お忙しくて、お産
には立ち合つてはおられません。慶応元年に生まれた三熊の時は、薩摩と京を行つたり来たりで、やはり、家にはおられませんでした。幸子が生まれた時は、秋月や萩で士族の動きがございました……なおのこと、落ち着けませんでした……」満壽子は今まで耐えていたものを一

気に吐き出すと、枕に口を当て、肩を震わせた。

思えば、昨年は竹馬の友の西郷（隆盛）様が征韓論で破れて下野したまま、郷里で自害された。互いの融和を見ないままの別れだった。もうお一人、共に幕末を駆け抜けた木戸（孝允）様が京都で病没された。三人は不仲になったままの別れになった。

利通だけが残り、勲一等に叙せられ、旭日大勲章を賜った。敷地四〇〇〇坪の洋風のこの家といい、勲章といい、政府に不満を抱く者にとつて、利通を敵視する材料は揃っているのだろう。

利通は満壽子が袂から出した麻布を一瞥すると、腹帯を撫でていた手で乳房を乱暴につかみ

「すまない。あと十年。待つとつてくれ、十年……」
と咳き込みながら喉をならした。利通の呼吸が乱れ、嗚咽が、満壽子の胸元を濡らし、咳の振動が赤子を刺激する。乱れる利通に戸惑って、満壽子は腹に手を添え、両膝を固く合わせ、必死に敷布を握り締めた。赤子が下りてくるにはまだひと月早いのだ。

何時ものように四時に起床した。熟睡している利通に安堵して、隣室の化粧部屋に入った。鎧版をはめ込んだ観音扉を開けると、色濃い緑の大気が温かみを含んで心地よい。

鬚のゆがみを整え、右肩をつきだすと、薄暗い中でもはつきりと梅の実ほどの痣が二つも見てとれる。白粉をはたいてみたが、痣はかえって浮き出てしまった。ならばと、木綿の着物に袖を通し、襟を抜かずに、胸高に帯を締めて食堂へ降り、日めくりを破った。

利通は六時の来客に備えて、既に朝の風呂を終え、身支度を整え、食卓についていた。

「今日は着物が違ごちよらせんけ？ それは木綿か？」
「この柄を覚えておられますか。嫁いできたころ着ていました」
「まだ、持っちょとか」

「貧しい藩士であられたおまえ様が、あつという間に偉くなられて、私も絹ものを着るようになりましたが、寂しい時には木綿のこの着物を着ていました」

「あと暫くすれば、十年もすれば、そんな頃には外国に

留学した多くの者が育つておる。津田（梅子）や山川

（捨松）も亜米利加から帰ってくる。考えてみい。彦熊も三十歳になる」言いながら利通は西洋皿にのせた固焼きパンとチーズを食べ、薩摩黒子の湯呑みで牛乳を飲み終えると、女中が山吉成典の来訪を告げた。

満壽子は腹に微かな痛みを感じて、来客に茶菓を出すのを女中に任せ、居間のソファーに座った。

「世界の大国と伍していくには、地方官を淘汰しなければならぬ。小県を廃止して、大きな県に合体させる！老朽や不能はいらぬのだ」利通の声がこれほど聞こえるのはめずらしい。それにしても今朝は何故に、これほどまでに熱弁をふるうのだろうか。又恨まれる材料が増えてしまう。利通は客を見送ると書齋に入り手紙を書いて、家僕を呼んだ

「これを直ぐ伊藤君の所へ届けよ。大隈に参内を約束させたから、伊藤君にも直ちにと伝えよ……。自分もこれから参内する」気迫のこもった息遣いである。満壽子は女中に産婆を呼ぶように言い、ゆっくり、腰を落とし

て利通の靴を揃えた。

「満壽子、書齋へ」

「お出かけの時間では……」

「構わぬ」有無を言わせぬ口調だ。

書齋で向き合うなり、利通は右手で満壽子の襟元をあけた。息をのむ満壽子。

「知っておいででしたか」

「もしか、と思つてよ。祝言あげて間もない頃は、襟元をつめて着ていたな……」言うなり、満壽子の首に唇を押し当てた。二人は声を殺して見つめ合った。

裏の厨から車輪が廻る渴いた低い音が響いて、馬車が玄関アーチに横付けされた。何時もは玄関の外までは見送りに出ないが、今日は自然と足が向いた。利通は二頭馬車に乗り込むと

「幸子んためにや、今度も女子がよかねえ！」

「あなた様のお子ですもの。私はどちらでも」と言つたが、その声は馬のいななきにかき消された。御者の中村太郎が手綱を引くと、馬車は土煙をのこして邸内をく

だり、紀尾井町清水水谷方面へと普段のごとく消え去った。
今朝も護衛はつけていない。

明治十一年五月十四日、初代の内務卿・大久保利通は、
清水谷にて石川県士族長田一郎ら六名に暗殺された。

同日に満壽子が出産した女兒は、月満たず、産声を上
げる事はなかった。

了



偽メール

清水 勝

何時ものように朝刊を読み終え、九時過ぎにパソコンのメールを開けた。最初のメールは友人の代田から今朝の日経朝刊『私の履歴書』についての感想だった。そうか、そんなことが書いてあったのか。改めて読んで自分の感想を返信しよう。

次のメールはアマゾンから「ご注文の確認」というメールだった。アマゾン？ エエ以前に中古本を買った記憶はあるが、最近は注文した覚えはない。宛名は大木敏夫ではなく、私のアドレスに様を付けているだけだ。アマゾンとしては失礼な宛名表示だと思った。

内容を読んでみる。

「誰かがあなたのAmazonのアカウントを使用して別のモバイルからこの注文を購入しようとしてました。Amazonのセキュリティポリシーに従い、Amazonのアカウントを凍結しました」

何のことか今一つ理解できなかったが、自分のアカウントが使われたのが気になった。続いて注意喚起のためか赤字体でこう書かれていた。

「◆アカウントが盗まれる危険性があります。この注文を一度も購入することがない場合は、二十四時間以内に以下のリンクをクリックして、この注文をキャンセルし、Amazonアカウントを復元してください」とある。誰かが私に成り代わって注文をしたようだ。そして太字で記されたお届け先には「山野俊子 横浜市青葉区美しが丘6-45-7」とあり、「注文金額37,000円」と記載され、支払い方法 クレジットカードとある。次のリンクには『注文をキャンセルする』という欄が設けられている。

さらにAmazonはお客様に沿ったサービスをしている等のが細かく書かれている。

何を購入したのか注文の品が書かれていないのが不自然だ。まずはアマゾンに確認してみる必要がある。パソコン検索により、アマゾンのカスタマーセンターを調べた。電話を掛けると、機械音の声で用件の種類の番号を

押すように指示され、次いで電話番号を求められた。折り返しアマゾンカスタマーセンターから連絡するという。用心深いのだなと思いつつ電話番号を入力した。二分後に電話があり、照会内容を話した。

「注文をしていないのに貴社からのメールでご注文の確認メールが来た。これはどういうことなの？」

「ご迷惑をお掛けしております。そのメールはアマゾン名乗った偽装メールで、詐欺目的のものです。一切リンク等には反応せず、無視し、メールそのものを削除してください」

「解りました。しかし、ロゴもアマゾンのもので、慌てて『注文をキャンセルする』と入力しようとした。気を付けねば…」

「そうなんです。でもお客様はすぐに照会頂き良かったです」

「もしアクセスするどんなことになるのですか？」

「恐らく、名前、住所、ログインIDやパスワード、クレジットカード番号などを書かせるようです」

「なるほど個人情報を手に入れ、悪事を働くわけですね」

「偽メールの情報を頂きありがとうございました」

もっと聞きたいことがあったが、業務多忙とみえ、電話は終わった。

偽メールと判ってひと安心だが、大木は毎日が退屈な定年退職者だ。この偽メールに興味を湧いた。暇にまかせて、パソコンで「アマゾン偽メール」を検索してみた。あるある、まずはアマゾンの公式ページ。開いてみると「Amazonではフィッシング、なりすまし行為に対して真剣に取り組んでいます。Amazonからではないと思われるメールを受信した場合は、速やかに、報告してください」とあった。

その他いろいろな内容のものがあり、特に大木が気に入ったのは「【Amazonを装う迷惑メール】実例と対処法を解説」で、丁寧に解説されているのに感心した。アマゾンが掲載しているのかと思ったが、そうではなくセキュリティソフトを販売している会社だった。

そのすぐ下には「Amazon偽メール例の画像をすべて見る」があり、大木宛に来た「ご注文の確認」と同じ書式のものがあった。お届け先だけは違っていて、芦屋市

の竹中一郎となっていた。

偽メールに騙されなかった余裕もあり、大木はお届け先に興味が移った。恐らくこのメールは大木だけでなく多くの人に出されているかもしれない。お届け先の山野俊子は架空の名前だろうと思いつつ、実在の人物だったら本人に知らせてあげないといけないとお節介な親切心が擡げてきた。

幸いにも大木の住んでいるに川崎市多摩区から、お届け先と記載されている横浜市青葉区美しが丘までは近い。東急田園都市線あざみ野駅に行けばいい訳で、散歩代わりに探訪してみるかという気持ちでフツフツ湧いてきた。

まずはグーグルマップで該当住所を調べてみた。地図もあれば航空写真もある。便利さに感心するとともにその詳しさに驚いてしまう。山野俊子邸らしき住所に一致する家は分譲住宅のようで緑の屋根だと判る。駅からの道順や目印になる建物も表示されている。これはいい散歩コースになる。明日の探訪が楽しみだ。

就寝前にいろいろと想像する。架空の住所・氏名だとは思いつつ、実在しているとなれば恐ろしさと共に興味

深い思いもする。航空写真で見える限りそれなりの家なので、大木と同じようにご主人は定年退職者だろう。いや女性の名前でアマゾンを利用しているとすると、未亡人の可能性もあるな。それなら猶のこと教えてあげないと偽メール発信者の餌食になる可能性がある。そう思うと何としても美しが丘6丁目45番地7号を訪ねなくてはならぬ。

翌日、東急あざみ野駅に降り立つ。昔は各駅停車しか停まらなかったごく普通の駅だったのに、今や横浜市営地下鉄のブルーラインが地下に乗り入れており、渋谷にも横浜にも三十分程度で出られる便利な駅で、もちろん急行電車も停まる堂々とした駅だった。

駅周辺は東急の分譲地らしく、整った街区で整理されており、番地の所在地は直ぐに分かった。恐らく偽メールの発信者は架空の名前を記載したはずだが、住所だけは実在のものを使ったに違いない。大木は無駄を承知で該当番地を探してみた。

うーん、6丁目45番7。表札は？ おうおう「山野和弘 信子」とあるじゃないか。架空名ではなかった。し

からば山野俊子さんは誰だろう。同居するご主人の高齢の母親だろうか。いきなり訪ねても警戒されるに違いない。どうしたものかと思案しながらも、山野家の見える歩道のベンチに腰かけた。

暫くすると、山野家の扉が開き、若い女性が出てきた。ようし！ 声を掛けてみよう。

「すみません、山野さんのお家の方ですか？」

「そうですが、何か？」

「私は大木と申します」と、趣味の会で使っている名刺を渡した。

「……………」

「趣味の会は関係ないのですが、ご家族に山野俊子さんっていらつしやいますか？」

「私ですが…」

「実は私の所にこんなメールが届いたのです」と、アマゾンのメールを見せた。それに目を通しながら、

「変ですね」

「アマゾンに確認したところ偽メールと判明しました。住所や名前も架空のものだと思っていました。念のため

め訪問してみた次第です」

「すぐに状況が掴みませんので、もう少し詳しく話していただけですか。立話も何ですから、近くに『スターボックス』がありますので、そこでいいですか」

思いもよらない展開で彼女と話をすることになった。若い女性と喫茶店に入るのは何年振りだろう。しかも上品な美しさの漂う女性だけに少し恥ずかしい気がした。

喫茶店の席で彼女はアマゾンのメールを隅から隅まで読んでいた。

「どうして私の住所と名前が使われているのですか」

「私も同じように、どうして私のアドレスが使われたのが解りません。要は個人情報はどこからか漏れていることは確かですね」

「大木さんはどうされたのですか」

「取り敢えずアマゾンの登録を全て削除しました」

「私もアマゾンを利用していますが、いったん登録を削除したほうが良さそうですね」

「その方がいいかもしれませんが。私のアドレスは先ほどお渡しした名刺にも記載し、広く知らせていますが、

この後はアドレスを変更しようと思っっています」

「私の氏名・住所は変更できませんので、困りますわ。用心するしかないですかね」

「詐欺メールの囷のような形で山野さんは利用されたということでしょう。私はてっきり老人の方かと思いいお気をつけてください』とお節介の気持ちでお訪ねした次第です。でも山野俊子さんはが若い方ですからパソコンやメールの知識があたりでしょう。安心しました」

彼女は大学四年生で就職も決まっているとのことだった。念のため、アドレスは変更予定ではあるが、暫くは併存するので、何かあれば連絡くださいと言っつて失礼した。

山野さんの件はこれで一件落着だが、この後メールアドレスの変更作業があるかと思うと気が重い。登録済のアドレスは何件くらいあるだろうか。親戚、学生時代の友人、会社関係者、趣味の会、その他合わせて百人はいらるだろう。各人に変更通知を出すのは大変な作業。何か便利な方法があるのではないか。

メールの設定を開くと自動応答の項目に、連絡登録先

に限り応答するというのがあった。これに新アドレスへの変更通知を書いておけば、旧アドレスに送信してきた登録先の友人等には自動的に知らせられる。

さて、落ち着いた所で少し考え込んだ。なぜ山野さんの氏名・住所が偽メールに使われたのか。架空にすべきものを実在のものにしたのはなぜか。事例集にはお届け先が芦屋市の竹中一郎だが、恐らく架空だろう。しかし、大木宛のものは実在する横浜市の山野俊子であった。

偽メールの発信者は山野俊子さんを知っている人物ではないか。山野さんへの嫌がらせかもしれない。あれだけの美人であり、相手にされなかった片思いの男は何人もあるだろう。

次はこの犯人探しに興味を湧いた。調べることは不可能だが、いろいろ想像すると面白そうだ。暇な毎日、この想像に時間をつぶすか。

(第一章 完)

アトムクラブ

内藤 真理子

さくらは背筋がぞくつとして、ぶるつと身震いをした。

「何だか気味の悪い所ね」

ここはアトムクラブ。数年前まで、伊豆弓ヶ浜海岸・海の家、という、区内の小中学生を対象にした臨海学校の宿泊施設だった。近年、児童数が少なくなり、区の財政も厳しくなったので、一般の人でも利用できるような名前も新たに、アトムクラブに変え、リニューアルオープンしたばかりだ。その情報を区報で知り、吉本夫婦は早速やって来た。入った途端に消毒薬のような臭いが鼻を突いた。

「あなた、リニューアルしたようには見えないわ。学校の校舎とあまり変わらないじゃないの」

「そう文句ばかり言うなよ、広々として良い所じゃないか」。二人は受付で手続きを済ませ、部屋の鍵を受け取った。

かつて息子の康夫が小中学校の時来た所だ。

夕食後、玄関の外に出た。雨だ。海まで広がる暗い松林に降りかかる雨を眺めていると、又、消毒用のアルコールの臭いがする。

「どうして消毒の匂いがかかるのかしら、いやだわ」

「区報に隣にある温泉病院のことも書いてあったじゃないか」。散歩を諦めて、部屋に戻り、自販機で買った缶ビールを飲むと、夫はぐっすり眠ってしまった。さくらは本を読んでいる。

すると、部屋の片隅で何かきらりと光った。

目を向けるが何も無い。少し飲み過ぎたのかなと思いつながら、又本を読んでいると、キラリ…… どうしたのだろう、何も見えない。しばらくして寝ようと立ち上がりかけたら、部屋の隅でうつすらと女の子の影のようなものが……

「康夫君のおばちゃん」。女の子の影がおぼろげながら口を動かしてさくらに笑いかけた。

「ええっ!」。ぞくつとしたが、康夫が小さい頃によく遊んでいた春香ちゃんに似ている。彼女は小学校三年の

時、海で溺れて亡くなったのだ。詳しいことは忘れてしまったがお焼香に行ったのは覚えてる。さくらは、怖いと思うから春香ちゃんのことを思いだしたのかわ、と思った。

「康夫君のおばちゃん」。影のような女の子が顔を上げて口を動かし、さくらに笑いかけた。

「ええっ!」。たしかに女の子だ。春香ちゃんに似ている。

「おばちゃん、春香よ。康夫君は一緒に来なかったの?」

ダメダメ、さくらは首を二、三回、左右に振って、

「さあ、もう寝ましょう」と、大きな声で言ってみた。

「おばちゃん、春香よ」

「えっ、春香ちゃん?」。もう三十年も前に亡くなっているのに……

「おばちゃん、私誰かが気が付いてくれるのを待っていたの」、と言った声が切なそうに訴えるように響いた。

幽霊と意思の疎通って出来るのかしら、さくらは目を見張った。

「おばちゃん、お願い、春香を助けて」

「何か、困ったことでもあるの?」

さくらはおぼろげと言ってみた。

「うん、おかあさんがさらわれたの」

話を通じるのだわ。よく見ると、春香は可愛らしく、ちつとも怖くない。

「この間」

この間って、何を言っているのかしら、この子が亡くなった時のことかしら、と思っていると、

「そうじゃなくて」

「春香ちゃんにはおばさんが考えていることがわかるの」

「うんそうだよ。そうじゃなくて、この間お母さんが『はーちゃん』って春香に手を伸ばしたの。いつもならつかめないのに、その時はつなげたのだよ、春香は嬉しかった」

「どういう事? お母さんも亡くなられたの? それでどこでさらわれたの?」

「お母さんは春香のところに来たのよ。二人で空を飛んでいる時にブルドッグの顔の太ったおじさんが来て、

「お母さんは春香のところに来たのよ。二人で空を飛んでいる時にブルドッグの顔の太ったおじさんが来て、

お母さんを連れて行ってしまったの」

さくらの頭の中は、くるくると忙しく回り始めた。

春香のお母さん、そうだ、夏香さん、死にそうになっただけで、踏みとどまってこの世に戻ってきたのかしら。

そういえば、春香のお父さんはブルドックによく似た小太りの人じゃなかったかしら。

「ちがう、ちがう。春香のお父さんじゃないよ。もっと怖い顔をしていて本物のブルドックそっくりだよ」

「ねえ、春香ちゃん、お母さんは今どうしているのかちよつとみてきたらどおう?」。さくらは探るような声で言った。

「家でお母さんは白い布をかけて横になっていて、その周りでお父さんも妹も泣いていたよ。おばちゃんも一目見ればお母さんがあの世にいったことがわかるよ」

何を言っているのだろうこの子は。私は伊豆にいるのに東京のことが解るわけがないのに。

「春香ちゃんのお家は遠いから、ちよつと見に行くわけにはいかないわ」

「おばちゃん、ここで待っていて」

そう言うと、春香の姿はスーッと消えた。そしてしばらくすると何やら手を持ち上げて戻って来た。

「おばちゃん、このコートを着て」

「コートって、何?」

春香が後ろに回って、何やらふんわりとさくらの頭からかけた。

さくらは何かが掛けられた途端、まわりの景色が変わってしまった。

「さあ、おばちゃん、行こう」

「行こうってどこへ?」

「お母さんの所よ」

「エーッ、あらあら、ちよつと行って来ますね」。さくらは熟睡している夫に声をかけた。

光がキラキラ輝いてとてもきれいだ。光の線が二人の周りを流れてゆく。春香がさくらの腕を取って、空中で止まった。

「ほら、お母さんが顔に白い布をかけているでしょう。あれはもう抜け殻なのよ。さあ、お母さんの所へ」

再び二人は光の帯の中に身をゆだねた。

さくらがここは海だろうか、森だろうか、と見とれて
いるうちに、辺り一面茶褐色の大地の上に、春香に手を
引かれながらふわりと降り立った。

どこかの惑星なのだろうか、足下は荒い砂地のようだ。
遠くに茶褐色の円筒形の物が突き出ている。

「おばちゃん、あれ、お母さんとブルドッグよ」

そう言われてみると、地平線の近くで二人が飛び跳ね
ている。近くまで行くと確かに春香のお母さんの夏香さ
んだ。

「どうして一緒に行かなければいけないの」。夏香はバ
レーボールで鍛えた足で、男の左肩を蹴った。男は、
「どうしても一緒に行くんだ」と叫んだ。

「何を言っているの、私は娘と天国に行くのだから邪
魔をしないでよ」。今度は男を肩に担いでエイッとばか
りに投げた。男は素早く起きて彼女の足を抱え込んだ。
そこに春香が近づいて、「お母さん、康夫君のお母さ
んと一緒に助けに来たわよ」

「康夫君の？ ああ、さくらさん。あら、あなたも？」

「いいえ、生きていますけど……、でももう夜が明け
てしまうわ。明日、夫と一緒に助けにきますわ」

そう言ってしまうと、一瞬のうちにアトムクラブの寝
床に戻っていた。そして次の日、昨夜の出来事を逐一夫
に話した。夫は、

「さくらは只でそんな旅行をしてきたのか。俺だって
夢でもいいから行ってみたいよ」

夜になった。春香ちゃんが迎えに来てくれて、昨日の
戦闘現場まで三人で…… いざ行かん！

行ってみると戦いはまだ続いていた。だがどう見ても
夏香さんの方が優勢だ。男は放り投げられて立ち上がれ
ず恨めしそうにこちらを見ている。お父さんが、

「ブルさんは道に迷っているのではないか。春香ちゃん、
天国と一緒に連れて行ってあげたらどうだろう」。そう
言うと、夏香さんは春香に代わって、

「とんでもない！」。と言うと、天国の門をめがけて、
春香を抱き抱えて飛び立った。お父さんはブルさんを庇
いながら後を追った。「待ってくれ〜」、とブルさん。

夏香、春香親子が天国の門を通過した。続いてお父さんに押し入れながらブルさんも天国に！ 滑り込みセーフ。二人を呑み込み門はぴたりと閉ざされてしまった。

「お母さん、お母さん」

さくらは、康夫の呼ぶ声で起こされた。

「あら、康夫、どうしてここにいるの？ お父さんは？」

「お父さんは駄目だったよ」

「何が駄目なの？」

「覚えていないの、お母さん達は伊豆にドライブに来て車ごと崖から転落したんだよ。お母さんが助かったのは奇跡だって医者がいっていったよ」

「ここはアトムクラブではないの？」

「何を言っているの。ここは病院の集中治療室だよ。」

アトムクラブは隣にあるけど、もう何年も前に廃屋になっているよ」

完



スマホは進化を続ける旅の友

福本 多佳子

二〇二三年十二月、アメリカ人の親友、メアリーから息子のトムと姪二人、キャッシュとアンが桜の季節の京都旅行を計画している。アドバイスしてほしいというメールが送られて来た。トムは三十二歳になったと言う。

(さて、どうするか?)と思索中のサチの脳裏に小学生時代のトムの悪戯っぽい笑顔が浮かんで来た。協力してみようと決めた。

その日のうちに日米間でEメールとApple Talk、更に彼らが使うWhats Appをダウンロード、メールと音声でのやりとりが始まった。ホテル、レンタカーを予約し、Japan Rail Pass 購入を薦めた。三人は『のぞみ』に乗車出来ないならパスは必要無いと言う。ところが、三月下旬、先にインド旅行を済ませ、四月の従妹たちの日本到着に合わせて成田着フライトを予約済みだったトムからApple Talkの音声通話、ニューヨークの空港か

らだった。「ビザ問題でインドに飛び立てなくなり、急遽東京に直行と決めた。これから羽田着のフライトに乗る。機内で東京のホテルを予約するから、心配しないで」と言うが「とにかく羽田で待っている、今夜は我が家に泊まるように」と説得した。

こうして一週早くサチの家に到着したトムが翌朝起きるなり「これからヨガクラスに行ってくる」と言う。「はあ?」と怪訝な顔のサチに笑顔で「機内でネット検索したら、この家の近くにヨガクラスを見つけ予約したんだ」と言う。スマホで見せてもらうと一時間千円で入金も不要。多摩川駅近くの閑静な場所、興味を持ったサチはクラスが終わる時間に見学に行ってみた。なかなか洒落た雰囲気でトムは女性達に囲まれ嬉しそうだ。ランチ約束していた友人、恵が待つ田園調布の寿司屋へと急いだ。トムの為に蒸し寿司、押し寿司、江戸前にぎりを注文。「大阪寿司は初めて」と日本での最初の外食を嬉々として味わっていた。

帰宅すると「従妹たちが到着する前に一人で熊野古道歩きに挑戦したい。ホテル予約を手伝ってほしい」と頼

まれた。ルートは彼が既にリサーチ済み。二人でPC前に座り、電話とスマホを駆使して、なんとか二日後に出発する熊野古道歩きの宿泊場所が決まった。

次は列車の手配。翌日、花見がてら渋谷の『緑の窓口』に立ち寄ると外国人観光客で長蛇の列。先に用賀の砧公園へと向かった。平日だけに都心の桜名所に比べるときほどの混雑はなく、トムは満開の桜に魅了されていた。『緑の窓口』に戻ると五時終了のサイン。慌てて新宿に向かい、駅構内の『緑の窓口』へ急いだ。ガラス戸に外国人旅行者は南口の窓口へと書いた紙が貼ってある。そこもまた長蛇の列、サチも一緒に列に加わるなりガラス戸が閉められた。「室内にいる方々の手配が終わる迄サービスが続きます」と言う。ほとんどが欧米系。待っている間に誘導中の係員に質問すると、ウェブ上では出発前に自国でJapan Rail Passを申請とあったが、この窓口で入手可能と言う。「二回も関西に行くなら、パス取得がベスト。私が京都へ行く時はいつも朝六時新横浜発『ひかり』に乗るの。『のぞみ』でなくてもその『ひかり』なら、二時間で到着よ」と説得、パス購入を促し

た。どうしても富士山を窓側の席で観たいと言うが、窓側は既に満席。「一号車から五号車の自由席に移れば絶対、窓側に座れる、心配いらない」と彼の背中を押した。

無事、希望の熊野古道歩きを楽しむトムから満開の桜を背にした写真が送られてきた。大阪、法善寺横丁からのお好み焼きや寿司に満足という音声通話もあった。

その翌日、羽田空港でキャシーとアンを迎えた。二人にはゲストルームを予約してあった。彼女たちはヴィーガン。肉や魚だけでなく、チーズも卵も禁止。サチは手作り豆腐店に行き、生湯葉、厚揚げ等、各種の豆腐製品を買い調理、それにオープンで焼き、ハーブ入りオリーブオイルで味付けしたパブリカの前菜を用意。キャシーもビーナッツバターベースのソースで絡めた蕎麦サラダを作った。食後、マンシヨンの温泉に案内した。予想外にリラックスしていて、外風呂での月を愛でながら「マンハッタンと違って、ここでは目が合うとにつこりしてくれる」と喜んでいた。

翌朝は桜満開の多摩川堤散策後、渋谷へと向かう。ヴ

イーガン・レストラン探しが始まる。アンがスマホで検索すると何軒ものレストラン名が出てきた。ちょうど歩いていた公園通りにある。電話をかけてみるとパルコ内。地下にある最初の一軒は満席、二軒目はメニューが売り切れ、三軒目に電話するとパルコの七階だと言う。席があくのを待つ間に何人もの欧米人カップルや家族連れがスマホを手にやってくる。スマホさえ有れば日本語がわからずともレストラン探しは容易になった。「スマホで世界の景色が変わった」とサチは実感した。

京都への『のぞみ』車内。三人は富士を望む窓際席確保の為に車両を移動し始めた。到着後も各々自由なスケジュールで動いた。女性陣の宿泊場所は京都在住のアメリカ女性作家が所有の町屋風民家。トムはサチが予約した知恩院の宿坊ホテル。「朝のお勤め」にも参加した。彼女たちは鯉節の出汁も禁止。恵が予約しておいた京料理にはトムだけが参加した。「鯖寿司は好きじゃないけど、この前菜の鯖寿司は素晴らしい。昨晚何を食べたと思う？ ヴイーガン寿司だよ」と笑っていた。

京都はこれまで以上に外国人で混んでいた。以前は着物を着ている外人というと中国人か韓国人だったが、今回は何度か和服姿の欧米系カップルを見かけた。御所を見学、八坂神社へと向かう途中、トムが乗り換えのバス番号は二〇一だと言う。スマホ操作が早く、バスマップを手にするサチより早くバスNo.を見つける。スマホ操作が素早い彼らはガイド無しで気楽に観光を続けている。渋谷でと同様、観光スポット、バーやカラオケ、ヴイーガンラーメン店まで瞬時に探し出していた。

四日目の朝は彼女らと金閣寺で待ち合わせ。トムとサチはその前日に移動した京都鷹峯のホテルの貸し自転車で急坂を降り、金閣寺門前で信号待ちの彼女達の目前で駐輪場へと曲がった。金閣寺観光の後は二人乗りした二台の自転車と賑やかに龍安寺、仁和寺を観光、妙心寺へと向かった。アンに依頼され予約した精進料理のランチ後、電車で嵐山駅へ向かう。竹林散策後、彼らが急ぎ歩き出した。目的地は嵐山モンキーパーク。やはり山の上は沢山の外人観光客の姿、スマホ情報の成果だ。建物内の窓網から外にいる猿にピーナッツを手渡している。(日

本人の私は猿より景色」とベンチに腰掛け山頂からの京都の眺望を楽しんだ。夜は彼女たちの宿泊先見学と近所のイタリアンレストランでの夕食。野菜料理の二人と違い三人は白エビや北陸からの魚介類を使った美味なイタリア料理に満足。古い街並みに佇む民家は使い心地よく、女性好みに飾られていた。

翌朝、小雨降る京都を出発、レンタカーで皆が期待の滋賀県甲賀市にあるミホ・ミュージアムへと向かった。山道を走った先に建物が現れた。本館へと通じる濃いピンクの枝垂れ桜満開の道は雨でも楽しめる散策路。昔、アメリカで工事現場の映像を見た時にこれは宗教団体の美術館に違いないと感じた通りの山上の豪華な博物館。高名な建築家 Dr. Ping の設計だけに欧米の観光客を乗せたバスが多かった。この後は一路、奈良へと進む。

「高速道路経由か田舎道を行くか？」レンタカーのナビに任せる事にした。道路沿いの信楽焼き陶房にはたぬきが沢山並んでいる。しばらく走ると両サイドに茶畑、（この辺りは宇治の奥……）と気づき、説明すると「車

から降りたい、茶葉の味見をしたい。これが日本茶？」と半信半疑の表情だった。

ずっと助手席で自分のスマホのグーグルナビとレンタカーの古いナビ画面を見比べながらナビゲーター役をこなしていたトムがスマホナビの方が圧倒的に優れていると言いつ出した。サチも同感。「外人⇨日本語がわからないから」というだけの対応は近い将来通用しないのではと感じた。京都出発前「他の国ではアメリカの運転免許証だけで運転出来たのに……」と不満を口にする三人に京都の友人がこの電話番号にかけて聞いてもらえんと言った。代理で電話すると「アメリカだと州による」という予想外の一言に「ニューヨーク州ですが」と続けると、電話は転送され続け、切られてしまった。レンタカー会社の書類にも国際運転免許証が必要と明記してある以上「今回は私と恵が運転」と説得した。

車が奈良市内に入った時は既に薄暗く、三人をホテルに送った後、急に深まった街の暗さに「京都と違うのね」と呟いた。車のナビは遠回りの道へ案内していると

感じた。ホテルが勧めた国道ではない。スマホ操作が苦手な恵に暗い中でのスマホナビの確認は無理。ガソリンスタンドも出てこない。地図も買ひそびれたと思つた瞬間、高速道路のサインが出てきた。そのまま進行し、法隆寺出口でナビが示す田圃の中の田舎道へと入ると狭く暗い小道に出た。手前の板に手書きの進入不可のマークが描かれている。「この道はおかしい、間違い」とサチは主張。恵は「ナビが真っ直ぐ行けと言っている」と主張。それではと前に進むなり、ガタツと音がして左後ろのタイヤが脱輪、側溝があつたのだ。暗い中、外へ出てレンタカー内の書類にある保険会社に電話するも朝から雨だっただけに電話殺到で呼び出し音のみ。道沿いの家の女性が声をかけてくれJAFの電話番号を教えてください。「どこにいますか」と聞かれても暗くてわからない。家路へと急ぐ男性が電柱に書いてある住所をライトで見せ、二人に代わり場所を説明してくれた。車が到着するまでの二時間近くを近所の人々が話しかけてくれた。「ここで脱輪する車は多いんだよ」と言っていた。やっとJAFの男性が到着したが、道が狭く軽自動車でないと引

き上げられない。そこで彼はサチと恵に話し続けてくれた女性に「軽自動車お持ちですか」と聞く。最終的に軽トラが必要ということになり、その女性が車の前の家のベルを押し、軽トラを手配してくれた。こうして無事、引き上げられた時は真夜中。「奈良ではナビの案内ミスでこうした事態が起きます。奈良の人って冷たそうですが、こうした時にはいつも周囲の人々の助けで解決するんですよ」と話してくれた。二人は皆さんに感謝して法隆寺近くのホテルへ向かった。

翠朝、ホテル主催の観光ツアーガイド嬢の法隆寺建築の説明に感嘆していた二人だったが、途中で諦め、菓子折りを手にお世話になつた三軒の家にお礼に立ち寄つてから奈良駅へと急いだ。渋滞の国道を走っていると、斜めに駅のほうへ行く近道が示されたので入っていくと、前方から来たミニバンとすれ違えずに四つ角で止まっている車が見えた。恵が誘導しようとして飛び降りると、左の道から来た地元の車からも男性が降りてきて対向車に向かい「その車、十メーターバックして空き地に入らないとだめ。この道ですれ違ひは無理」と案内。「この路も

左右に溝。夜だったららはまるわね。奈良では主要道路に固執した方が良さそう」と顔を見合わせた。

無事、恵を駅に送り届け、三人を迎えにホテルへ急ぎ、高野山の宿坊へ向けて走り出した。しばらくすると高速道路工事現場が現れた。全ルート完成ではないが、順調なドライブの開始だった。橋本への出口で一般道へ戻った。以前から九度山を通り抜けてみたいと思っていたサチはトムに右折すると伝えた。九度山からの山道は工事中ということもありスリリング。急斜面でのキャシーのきゅーという嬌声も混ざった賑やかなドライブとなった。明るいうちに宿坊『総持院』に到着。その日は欧米人三十二名、日本人宿泊客はサチを含め三名のみ。大きな広間が襖で仕切られ、漆塗テーブルと椅子がセットされた食堂で、この旅行中一番美しく美味しく美味な精進料理が供された。寝る前に昨夜の話をするとか皆大笑いだった。

早朝の勤行へと降りていくと、サチの傍らに僧が来て「一番に御焼香お願いします。そうすれば何人かが続くとします」サチ達の後、数人がご焼香へと進んだ。

チェック・アウト後、奥之院へと歩く。友人から聞いていたように町は清浄な空気感に包まれていて立ち去り難い。熊野三社巡りも選択肢にあったが、十分に寺社巡りを堪能した三人はビーチでゆったり過ごすことを選択。この旅の最終目的地、紀伊田辺でバルコニーやビーチでの日光浴やスケッチ、温泉入浴、マッサージという贅沢な時間を満喫した。最終日は新大阪駅に向け出発。トムのナビ役も進化し日本語で「ここを右折、左折、まっすぐ」と言っていた。複雑な三車線交差点も上手く誘導する満点のナビゲーターだった。レンタカーを返し、新幹線に乗車。新横浜で都心に向かう彼らと別れた。

同じ頃、ロスでレンタカーを運転して帰国した友人が「レンタカーにナビがついていなかった。皆がスマホをナビにしているからいらなんだ」と言っていた。確かに不慣れた車のアップデートされていないナビより自分のスマホナビの方が信頼感大。高齢者には車のナビの画面上にスマホのグーグルマップを見ることができれば尚便利だ。今や『スマホはなくてはならぬ旅の友』

活 動 報 告



版画 八木 信男

何でも書こう会

私たちは会社や役所をリタイアすると大幅に時間の余裕ができて、現役時代には思いが及ばなかったことを考えてみたり、読書や旅行、その他さまざまな趣味に没頭したり、多様な世界に入り込むことが可能になります。

そのこと自体もたいへん楽しいことですが、それらをまとめて文章にしてみる、というのがさらに面白い作業なのです。

「何でも書こう会」はそのような発想から生まれた企業OBたちの集まりで、テーマは文字通り森羅万象。

最近の国際情勢や政治経済、科学技術など硬派のものから、歴史、文化、絵画、音楽、さらには宗教、法話、紀行文、食談、雅文、戯文、日々の身のまわりのことといったるまで、じつに様々です。

何を書いても自由、唯一のルールは八〇〇字プラスマイナス一〇字ということで、月に二回、寄せられた作品（エッセイ）をかわるがわる発表し、それに対して皆で

喧々囂々、楽しい半日を過ごすのです（終わったあとのアフターファイブもお楽しみ）。

それぞれの作品については内容もさることながら、自分の考えや気持ち、あるいはその場の雰囲気などを、いかに確に相手に伝えられるか（ひとりよがりになっていないか）などを考えていかなければなりません。

また同じことを述べるにしても言葉の使い方を工夫して、楽しい表現で、ときには遊び心をもって、個性豊かでウィットに富んだ作品に仕上げられるよう、皆で切磋琢磨していきたくと思っています。

昨年も新しいメンバーが何人か参加されましたが、今年もお知り合い、お友達、ご親族などをお誘いいただき、一人でも多くの方と文章を書く愉しみを共有していきたいと思っています。

どうぞよろしくお願いします。

（プロマネ 大森・志村・児玉・吉田）

掌編小説勉強会

掌編小説勉強会は二〇〇七年にスタートして、十一月には第百回を迎え、記念に鎌倉にて合宿を行いました。

昨年は全部で三十二の作品の投稿がありました。作品の一部は会員以外もアクセス可能な公開サイトにアップしています。昨年は十八作品がアップされました。そのうちのいくつかの作品のあらすじを紹介します。

『維新前夜』 大塚 喜子

時は幕末。幼い頃に疱瘡に罹った少女。手習い小屋で若い侍と知り合った。その侍に恋い焦がれていたが顔の疱瘡跡を気にして諦めていた。しかし、その侍からの思いもよらぬプロポーズ。ハッピーエンドとなった。

『火をつけたら消す』 小道 周帆

小村寿太郎は日本が始めた日露戦争の後始末(火消し)をするのは日本だとの堅い決意でポーツマス条約を締結させた。この話を書いた小説に興味を持った主人公は薩摩の隣の小藩、小村の故郷、飢肥を訪ねる。土地の人に小村ゆかりの場所を案内してもらい小村を想う。

『大久保村の中村家(一)(二)』 中村 アキヤ

新宿・大久保に江戸時代以前から代々続く中村家の歴史を描く。家の庭にあつた徳治三年の銘入りの板碑からスタート。新宿の歴史でもある。さらに甲府、滋賀県と中村家のルーツを探るファミリー・ヒストリーが展開。

『父』 今日 あした

父が脳血栓で倒れた。一命はとりとめたが、半身不随、言語障害も残った。それ以来、七十才の母による老々介護が十年続いた。老々介護に悪戦苦闘していた両親と同年代になった自分。無口だったが、優しかった父、娘に対する愛情が今になって分かる。

『元氣な老人』 とんだ玉三郎

妻に先立たれた老人。まだまだ元氣だ。娘夫婦に昔の自慢話をして、説教、おせっかひもする。それで周囲から疎まれ、皆に相手にされず、だんだん孤独になっていく。悩んだ末に自ら進んで老人ホーム行きを選ぶ。

作品は、URL (<http://www.obpen.com/novel/works/>) から閲覧可能。

(プロマネ 児玉・内藤)

サロン21

令和五年は、国内では日本の国力の三十年にわたる長期低迷とそこから派生する様々な問題、また海外では、前年の二月から続くウクライナ戦争と本年十月に勃発したハマス・イスラエル戦争に話題が集中いたしました。

一見、かかわりの薄い二つの事象ですが、グローバリズムとナシヨナリズムの対決の構図に照らしてみると共通の底流を見ることができます。

日本の長期低迷は、日本型の経営方式や社会の在り方を安易に放棄してきた混乱の結果とも言えます。今次のLGBT法案の成立などはその典型と言えます。

海外では、欧米の価値観に抵抗するロシアなどを力で抑え込もうとする欧米の金融資本勢力が苦戦しています。ロシア向け経済制裁は失敗し、欧米の支援したウクライナ戦争は意のままに進みません。

BRICSやグローバルサウスを中核にしたナシヨナリズムが、グローバリズム一辺倒の流れを押しとどめ、国際情勢は潮目が変わったのかという様相を呈しています。

令和五年の各月のテーマとプレゼンターは左記の通りでした。(敬称略)

一月	令和四年の「今年の漢字」「戦」についての考察	森田 晃司
二月	同右 後編	森田 晃司
三月	予言の論考「日本の自殺」	大平 忠
四月	同右 後編	大平 忠
五月	「ハイドパーク覚書」と広島サミット	森田 晃司
六月	人類と気候の十万年史	杉浦 右藏
七月	CHAT GPT について	下山 健夫
八月	夏休み	
九月	第三次世界大戦はもう始まっている	野瀬 降平
十月	金総書記の訪露	森田 晃司
十一月	中国経済の今	下山 健夫
十二月	日本の危機の本質	児玉 寛嗣

(プロマネ 下山・森田)

ペン俳句のこの一年

佳句鑑賞

西川 知世

ペン俳句は句会場を地域交流センター代々木において、第一木曜に開催。プロマネを中心に会員の活動により活発な句会が繰り広げられている。この一月より志村良知さんがプロマネとなり、新体制が整えられた。吟行地は秋深い箱根仙石原であった。プロマネとして長く会を支えられた首藤しずをさん、にこやかに座を盛り立て下さった高橋由紀子さんに感謝する。俳句は、短い詩、日々、時々、作句を続けていられることを願っている。句座を共にした感銘句をここに挙げる。

異次元にふつと消えたる蜻蛉かな 首藤 しずを

ラムネ水噴きこぼしつつ差し出さる

枯蓮をねぐらと沈む真鯉かな

桜抱へ賑やかな友訪ね来る 高橋 由紀子

夕焼を指す河鵜の首長し

雨上がり光る瓦や夏つばめ

楽しく句座を共にできた一年を感謝し、新たなペン俳句の歩みが続くことを願っている。

西川 知世

潮入の池の面に泡春浅し
尖塔の十字架細し花の冷
三伏の名前似通ふ処方箋
風に色生るるひと日の芒原
秋風や丈を豊かに薔薇の赤
饅頭にちよんと金箔初時雨
雪晴の富士を遠見に傘を干す
風花や別れ告ぐるに潔ぎよき

寒椿千日行の谷深し

幼児に余る大風大空へ

大道の真中を歩み今朝の夏

夏暁の海へ開ける大鳥居

沸騰の地球の路傍芒咲く

森田 元斐

吉野古道だろうか山深い修験者の道、寒椿は澄んだ空
気と静かさを伝えて余りある。三句目、早朝のまだ人が
歩かない大きな道、さぞかし空気が美味しいことだろう。
五句目、上五の措辞が秀逸。年々、最高気温は更新の一
途、地球は沸騰寸前、芒の花穂にも受難であろう。

筑波井の水跳ねちらし寒雀
十葉や空き家の庭の植木鉢
秋立つや棟上げ式の白柱
竹林の闇立待のかうかうと
秋の日の白雲うつす池塘かな
松田 一文字

前カゴはつくしんぼうと文庫本
宮原 凧

向き合ひて手話の指先風光る

梅雨出水一人に余る物を煮て

なで肩の女系家族や彼岸寺

十二月余白の多き日記果つ

一句目、寒雀は冬毛で丸々とした雀。冬日の輝きと福
福とした雀が散らす水滴が句に写しこまれている。立待
は十五夜より遅くなった月の出。月が作る竹林の闇は対
比して昏い。池塘の句は箱根一泊吟行の収穫句。湿生花
園や薄原をを歩き、水面を渡る雲と一日を遊んだ。

凧俳句は至近なものを句に仕立てる。自転車の前のカ
ゴに入っている文庫本は、さつきまで野原で本を読んで
いたことを語っている。手話で話すには静かにしかし真
剣に指を見ることが大事。今年の日記に余白が多いと気
づいて、延々とコロナ騒動が続いて少しの不満を伝える。

冬の日に動かしてみる己が影
ラムネ玉シュボンと胸のつかえ落つ
秋夕立人待ち顔の猫を抱き
今ははや拝む形の枯蟪蛄
投げ入れて形決まらず枯尾花
浜口 須美子

一句目、冬日であるから足元から長く伸びた影。手をあげてみたのか、少し子ども心に戻った心地。静かな句である。ラムネ玉の音によって落ちる胸のつかえ、あとは笑顔だろう。枯尾花は野にあると美しい。持ち帰って活けてみると、思ったほどの美しさは出ないものである。

水無月と声にしてみる雨籠り

新田 ゆふき

武蔵野の月の止まり木スカイツリー

古湯温し針曇りたる丸時計

収骨の音さやかなり冬紅葉

母葬る名越の坂や帰り花

スカイツリーの句は、大胆だが納得する句。あの重量感ある形は月の止まり木だったのだ。温いが季語として弱い、古いタイトルの浴槽、湯気に雲った丸時計、旅心を誘う句。母葬送の二句は心を打たれる。名越は六月晦日の茅の輪をくぐる神事、母を天に預けられたのだろう。

ピンと張る小犬のリード風光る
中村 晃也

紫陽花やバス停近き理髪店

反り返る猫たつぷりの冬日差し

吊橋は風湧くところ朴の花

安曇野は石仏の里蜻蛉湧く

少し大きい小犬、いかにも生命力の塊、早足に引つ張られる飼い主も楽しそう。季語の働き。三句目の猫はもう大きいのか、日差しを満喫するのには年季がいる。朴の花は天を向いて開く。樹の下では見難い。吊り橋は朴の花を見るのには絶好だろう。風も心地よい。

凍つ道の朝日に背中押されけり
長尾 進一郎

霜柱踏めば応へる朝の道

釣人の影のゆらゆら水温む

天高し外輪山の底に立ち

ひと駅を歩きたくなくなる小春かな

朝早く凍てついた道に踏み出すときの味方は朝日、一日が始まるのだ。子供たちも霜柱を踏むのが好き。作者も寒さに負けず心浮き立って踏んでみる。春の天気の中、竿の先を見つめて釣人は全く動かない。影が揺れて静かだ。立冬過ぎの暖かい日の少し浮き立つ気分を詠う。

くちなしの肉厚の白濃き香り

内藤 真理子

ママチャリを止めてラムネをラッパ飲み

若竹のひときは伸びて光受く

帰り花真白きつつじ今日も咲く

枯枝を灯す柿の実ポツポツと

のびやかな句が並んだ。対象を掴む視線が正直で心地よい。ママチャリの句は、短い俳句の中に意外な展開が隠されていて楽しい。ラムネは飲む傾き加減が大切。帰り花は秋の季語で、春に咲く草木が季節はずれの花をつけること。下五で朝毎に見つける楽しさを出す。

寄せ植えのそれぞれに伸び春來たる 志村 良知

父の手の紐の結び目クレマチス

古民家やラムネあります四角旗

木枯らしや神々騒そゑく杉並木

小春日や半世紀経し絵具箱

寄せ植えの鉢は日が経つとそれぞれの丈を競うようになる。春満開の喜びである。クレマチスは蔓性で誘引が必要。父上の丹精の結び目を見つけたのだ。近頃の古民家ブーム、ラムネの旗をだして一層の風情。愛用の絵具箱、冬の暖かい日差しに誘われて絵筆を取るのだろう。

仕舞湯や足に触れたる袖子の種 大津 そうかい

喘ぎ来し峠真つ向雪の富士

時の日の時の抜けがら砂時計

少年の日より飛來のやんまかな

水澄むや鯉の水輪の揺らす雲

俳句に軽やかさが増してきている。俳句を詠むときには目の前にある物に託すことが大切。湯桶の中で足にふれた柚子の種に來し方の平穩、砂時計を時の抜殻とみて、時を急いで働き続けた日々へ回顧、蜻蛉に少年の日への追憶。物に託すという俳句への信賴が確かである。

乙女らの祭太鼓や秋日和

安藤 晃二

処方箋薬局多し夏つばめ

苔生すや石楠花白き高台寺

岬より鳥海はるか冬の海

朱の燃ゆるメタセコイアや冬の池

我が町にも大店小店取り混ぜ薬局が多い：現代の景色。夏の薬局は季語も働き明るいイメージになった。西の裾野は日本海に達する鳥海山。その遠望を岬から眺めて冬の波音も重なりダイナミックな景。メタセコイアの紅葉は美しい。さらさらと落ちていちどきに冬に入る。



ペン川柳

二〇二三年はコロナの制約から解放され、「新宿宮川」での合評会も毎回大いに盛り上がりました。

火酒（三春）さんは前半やや不調だったものの、後半は四ヶ月連続最優秀句に選ばれるなど絶好調でした。年度を通して好調だったのは、明迷（八木）さんで最優秀句二回優秀句六回と総得点では最高でした。火酒さんと我々好（浜田）さんが同点で二位でした。

最高齢のだし（天野）さん他皆さん年齢を感じさせない活躍で世話人にも励みが出ましたが、何人かの川柳子は体調不良等により、お休みになったのはとても残念です。

十二月にはコロナ禍を克服して鎌倉合宿を実施、大阪から明迷さんも参加して、川柳子が夜遅くまで飲み（十二月のお題）かつ語り合い、大いに盛り上がりました。晃二（安藤）さんが十二月の最優秀句に選ばれました。

今後ともペン川柳会のご支援宜しく願います。

以下ペン川柳子の活動をご紹介します。

【明迷】

めいめい

（八木信男）

「願・願う」…自首してとホシに願いのダメ刑事

「誘・誘う」…つれあいの小言が強い睡眠剤

「男」…男坂上がれず爺は女坂

「色」…色違い着てる上司もしまむらか

「笑・笑う」…漫才の意味わからぬが笑うふり

いつも大阪から洒脱な川柳を投稿し、合評会を盛り上げてくれています。二月の「誘・誘う」と、五月の「男」では最優秀句に選ばれました。一月の「願・願う」の「ホシ」は掛詞を上手く使っています。六月「色」の「ファッションセンターしまむら」は今や全国に店を展開しています。七月の「笑・笑う」では同じような経験をした人が沢山いるのではないのでしょうか。鎌倉合宿では若さを発揮して、鎌倉一帯を大いに走り回りました。

【火酒】

ウオッカ

（三春）

「白」…物価高もやしと鯖に白羽の矢

「虫」…「きやゝゴキ！」に亭主ふりむき

「呼んだかい？」

「舌」…奢りなら不味い料理も舌鼓

「尻」…エセ減税その尻ぬぐい誰がする

「飲・飲む」…退職日馴染んだ服に酒のシミ

八月「白」から九月「虫」、十月「舌」、十一月「尻」

まで四ヶ月連続最優秀句は川柳会の新記録です。九月

「虫」や十月「舌」など女性ならではの発想の川柳は多

くの支持を集めました。八月「白」や十一月「尻」など

時事問題も上手く取り入れています。総合得点二位は立

派です。

【我々好】
ウイスキー

(浜田道雄)

「願・願う」…百円でそんなに願うの？神あきれ

「誘・誘う」…好きだよと誘った口にいまはトゲ

「女」…大年増色目使うも老眼鏡

「色」…色気だけ未だ盛んな認知症

「尻」…帳尻のあわぬ家計に物価高

いつも辛口の批評で川柳子に刺激を与えています。

一月「願・願う」と六月「色」は最優秀句に選ばれ

ました。二月「誘・誘う」、三月「女」、五月「男」

(やけ酒で女上司をこき下ろす)、九月「虫」(腹の

虫治まるところのない政治)、十一月「尻」、十二月

「飲む」(肝臓にゴメンと謝り今日も飲む)と六回も

優秀句に選ばれました。いかにも川柳らしいヒネリ

も効かせています。総合得点争いでは、十二月に火

酒さんに追いつき、同点二位となりました。

【拿々】
だだ

(塚田 實)

「誘・誘う」…流し目につい誘われて泥沼に

「新・新しい」…新卒がマスク外して妍競う

「笑・笑う」…お笑いがテレビを占拠笑えない

「白」…助け合い呆けもしないで共白髪

「尻」…言葉尻捉えて攻める嫌な奴

八回優秀句に選ばれました。最初の二句は女性を詠み

ました。七月「笑・笑う」で最近のテレビはどのチャン

ネルを回してもお笑いが占めています。八月「共白髪」

はほんのりとした雰囲気が感じられます。十一月「尻」で言葉尻を捉えるのは、上司それとも国会論議の野党、様々な解釈が出来ます。

【零門】

(松谷 隆)

「願・願う」…祈願みな叶えていれば神破産

「女」…魅せられてよくよく見たら喉仏

「笑・笑う」…最終回あの一球で笑顔飛び

「虫」…長祝辞早く終われと腹の虫

「舌」…謝罪の場舌先だけのお辞儀だけ

三月「女」と七月「笑・笑う」は最優秀句に選ばれました。七月の「笑う」は「笑顔飛び」でしたが、終わってみれば阪神タイガースは念願の「アレ」を達成しました。昨年の流行語大賞にも選ばれました。一月「願・願う」、八月「白」（百寿でも楽しみないと白寿愚痴）、九月「虫」、十月「舌」と四回優秀句に選ばれました。

【井波】

(稲宮健一)

「願・願う」…念願の寿命伸びるがボケも増え

「誘・誘う」…誘われずカモにもされず枯れすき

「新・新しい」…広告を有料で買わず新聞社

「色」…抜き衣紋白きうなじの艶やかさ

「虫」…未来シェフ大豆と虫で味競い

四月「新・新しい」は最優秀句に選ばれました。確かに新聞代は払っているのに、多額の広告料を取るのには首を傾げますね。一月「願・願う」、二月「誘・誘う」、三月「女」（時移り女装男がかい顔）、五月「男」（男女とは？比率で示す現代版）、六月「色」、九月「虫」、十二月「飲む」（円安だ飲みねえ食いねえドル札で）と七回も優秀句に選ばれました。最初の二句は身につまされそうですね。「未来シェフ」は食糧難の将来を面白く見通しています。

【晃二】

(安藤晃二)

「願・願う」…願かけや三日坊主の池マラソン

「女」…妻毅然四十路の息子正座させ

「白」…白雪解け三島に流れ島田解く

「舌」…舌平目ついでにキスの捌き方

「飲・飲む」…百薬の長言い訳に毎夜飲み

十二月の「飲む」は最優秀句に選ばれました。見二さんの句は説明を聞けば、「成る程！」と納得する句が多くありました。三月「女」と十月「舌」が優秀句に選ばれました。「妻毅然」は今の若者たちにどのくらい通じるでしょうか。「キス」の掛詞も面白いですね。一月「願・願う」は結婚前の体力祈願で井の頭を駆けたことを詠んだそうです。八月「白」は「ノーエ節」をもじっています。

【安兵衛】

(山縣正靖)

「願・願う」…願かけて百年生きるはひと迷惑

「新・新しい」…選挙では新しい国皆築き

「虫」…異常つづき人間様は虫の息

「舌」…舌足らず親缶づめの法つくり

「尻」…うまくやれ尻に敷かれたふりをせよ

四月「新・新しい」は優秀句に選ばれました。一月「願・願う」は百歳時代を揶揄しています。選挙では立派な公約が一杯出てきますが、選挙が終われば知らん顔が多いと皮肉っています。「親缶づめ」は話題になった埼玉県の「子ども放置禁止条例案」のことを言っています。

【酪帝】

(曾山清徳)

「願・願う」…やばい払い妻へ哀願やむを得ず

「新・新しい」…わが人生「新」のつく字と縁が切れ

「男」…八十路でも男らしさにあこがれる

「色」…色欲も尽きてしまつてあと何を

「虫」…この年でなんの因果か「虫歯」病む

四月「新・新しい」と五月「男」は優秀句に選ばれました。「新」のつく字と縁が切れ」は言い得て妙ですね。「八十路」を詠んだ句が多くありました。一方「男らしさにあこがれる」など「まだまだ老いないぞ」の意欲も溢れています。五回お休みになったのは残念です。

ペン・フォト句会

令和五年度は、コロナ禍の影響から完全に解放され、八月を除く毎月、会場に集まって、全員の「付け句」と「自由句」作品を鑑賞、投票、批評する通常の方法で行いました。メンバーは現在八名です。句会後は、各回の担当幹事が選定したお店で懇親会を行っています。

前号と同様、各回の「付け句」お題写真のテーマと出題者を記します。

- | | | |
|----|-------------|----|
| 一月 | 渋谷スクランブル交差点 | 長尾 |
| 二月 | 路傍のチェロ弾き | 中村 |
| 三月 | 幼稚園児の花見会 | 松田 |
| 四月 | 草取りをする女性達 | 矢澤 |
| 五月 | 二条城の男女 | 安藤 |
| 六月 | 信州観光お休み看板 | 大越 |
| 七月 | 妖怪お休み処・砂かけ屋 | 清水 |
| 九月 | 大原女の像が立つ料亭 | 下山 |

- | | | |
|-----|---------------|----|
| 十月 | モンセラットのモニュメント | 長尾 |
| 十一月 | 百貨店の寿司売場 | 中村 |
| 十二月 | 縁日の「ガチャ掬い」 | 松田 |

これらのお題写真と、その付け句の入選作品は、ホームページのフォト句サイトに出ていますので御覧下さい。改めてお題写真を見返すと、場所や対象は実に様々です。また物や風景が対象の写真が四回、人物が主役や脇役で登場する写真が七回と、この年は人物入りのお題が多くなっています。

物と人物、どちらにもつけ句を考える面白さと難しさがあります。人物が居ると、その気持ちや行動を想像する等、句材の範囲を拡げやすい面はあるかも知れませんが、

今後とも和気あいあいの活動を続けて行きたいと考えています。見学参加は何時でも歓迎です。

(プロマネ 松田昌康・長尾進一郎)

英語を読もう会

時事問題、政治、経済、社会問題や文化等、メンバーの提題により読む。

開催月	題 名	担当名
1 月	War Over Taiwan? U.S. aims for "double deterrence" Joseph Ny(米政治経済学者) : 戦争はあるのか、その抑止力は?	安藤
2 月	Why the West's oil sanctions on Russia are proving to be underwhelming? Economist : 対ロシア石油制裁効かず。	兄玉
3 月	Ready or not, AI is coming Hugh Hewitt (Professor Chapman U.) : Chat GPT について米 国事情紹介	安藤
4 月	How Putin could finally face justice for his illegal war in Ukraine? Washington Post : プーチンは如何に裁かれ得るか。	安藤
5 月	Harry Belafonte, pioneering performer and activist, dies at 96 AFP : ベラフォンテ追悼記事	安藤
6 月	Global fertility has collapsed, with profound economic consequences. What might change the world's dire demographic trajectory? Economist : 世界の出生率急落、深刻な経済的影響。如何に世界 の人口動態を変えられるか。	兄玉
7 月	US Poet Laureate (桂冠詩人) Ada Limon の詩が、NASA による 水のある木星の星探査機に刻印されて、送られる。	安藤
9 月	Barack Obama's Success: How His Election Created the Modern Democratic Party and Transformed America Ginsberg : オバマの成功 : 新たな民主党の創成とアメリカの変革	森田
10 月	A Nobel prize in physiology for mRNA vaccines Katalin Karikó and Drew Weissman : mRNA ワクチンの製薬 技術に寄与、ノーベル生理学賞を受賞	兄玉
11 月	The era of cheap is over, and that's for the best Rana Foroohar (Washington Post) : 低廉の時代は去り、おカ ネを使い易い、理想的な金融の時代がやってくる。	安藤
12 月	To Stop the Fiscal Apocalypse, Bet on the Young Kathryn Anne Edwards (labor economist) : 財政危機を避け るには若者に賭けるしかない。高齢人口を支える現実的な方法、 若者世代が裕福になり、労働人口を増やす事に尽きる。	安藤

何でも読もう会

一昨年から「書を捨てて街に出よう」と、時季を選んで文学散歩を企画しています。昨年は八重桜のきれいな時季に墨田川・向島界隈を歩き、言問団子に舌鼓をうちました。

「読もう会」では、芥川賞受賞作を集中的に読んできましたが一段落させ、今は直木賞受賞作に移っています。両者の区分けの正確なところは分りませんが、何となく直木賞の方が気楽に読める気がします。

読後感想会が面白くて、またその後のアフターファイブが楽しくて続いています。

二〇二三年を振り返って

二月 『白い人』

『海人舟』

三月 『裸の王様』

『硫黄島』

四月 文学散歩（浅草・向島）

五月 『太陽の季節』

『驟雨』

六月 『鷺と雪』

『或阿呆の一生』

七月 『何者』

『杜子春』

八月 『海に見える理髪店』

『疑惑』

十月 『高円寺純情商店街』

『シンデレラの罫』

十一月 『まほろ駅前多田便利軒』

『猿蟹合戦』

十二月 『線は、僕を描く』

『有難う』『掌の小説』より

石原慎太郎

吉行淳之介

北村 薫

芥川龍之介

朝井リョウ

芥川龍之介

荻原 浩

芥川龍之介

ねじめ正一

S・ジャプリズ

三浦しをん

芥川龍之介

砥上 裕將

川端 康成

(世話人 首藤静夫)

遠藤 周作

近藤啓太郎

開高 健

菊村 到

ホームページ関連

HPに期待されることは、会員の利便性向上および外部への発信とそれにより興味を持っていただいた外部の方への入会勧誘だと考えています。

過去にHPを見て入会いただいた方々に、会のどのような点に魅力を感じたかをお聞きしました。Iさんは「文章教室ではなく人生経験の豊かな仲間集いで、語る・検討しあうこと」。Oさんは「HPを見て無職の私でも入れ、『書きたい・書いた作品を読んでもらいたい』を達成できること」。Kさんは「書いた作品が大幅修正や没にならずにHPや『悠遊』に掲載され外部に発表できること」。

外部への発信が重要であることが伝わり、会の魅力を外部に発信する工夫が必要であると感じました。

二年前からHP各部分へのアクセス数分析をした結果、外部の方のアクセス数が少ないことがわかりました。トップページをチラッと見るだけで内部に入っていただけではないかと推察します。せめて「活動紹介」だ

けでも見てほしい！

現在のHPのトップページは前回の更新からもうすぐ五年になり、一般的に更新時期になります。リプラス様のご指導を受けて、現在のトップページの分かりにくい点を改善したアップデート試案を六月にまとめ皆様にご紹介いたしました。

その後、半年をかけて会員の皆様から頂いたご意見を反映して練り上げ、十二月に承認されました。

この半年間の変更点は、トップページの写真を何の会か分かりやすい写真に差し替える、動画(YouTube)は異常拡散の危険があるから採用しない。また、リプラスからの追加アドバイスによる変更点は、トップページの導線ボタンに「クラブ概要」を追加すること、活動紹介で「書こう会」の部分は「800字作品」と「エッセイコラム」を一緒にすることです。

今年初めにトップページ他がアップデートされます。外部の方々のアクセス数が増え、HPの発信力が強化されることを期待しております。

(プロマネ 松浦俊博)

クラブ活動を振り返って

令和五年(二〇二三年) Ⅱ

(会員への敬称略)

一、役員

前年に引き続き左記の役員が会の運営を務めた。

名誉会長	西川 武彦
理事・会長	塚田 實
理事・副会長(講演会、新年会担当)	三 春
理事・財務担当	大森 海太
理事・会計担当	長尾進一郎
理事・運営委員長、IT担当	志村 良知
理事・HP担当	松浦 俊博
理事・事務局長	首藤 静夫
監事	清水 勝

二、年度方針

コンセプト「明るく楽しいOBペン活動」

三、各月の活動報告

在籍数…二〇二四年一月一日現在 五五名

1. 新規会員の獲得

2. 各プロジェクト・勉強会の活性化努力を継続

3. 月例会の工夫、活性化(出席者増)

4. ホームページの活用

5. インフォーマル活動の奨励

一月例会(十九日) Zoom併用

・新春特別公演 コロナ禍のため中止

月例会のみ実施

・新年会 中止

二月例会(十六日) Zoom併用

・会員講演 野瀬隆平『船の話、あれこれ』

・新会員 一杉秀樹

三月例会(十六日) Zoom併用

・会員講演 山縣正靖

第一部『認知症や脳卒中になったら』

第二部：『地経学的予測』

四月例会（二十日）

・ジャズの生演奏 演奏：Jamming Hot Seven

・『悠遊』創刊三十周年記念号刊行

五月例会（十八日）Zoom併用

・『悠遊』三十号合評会

六月例会（十五日）Zoom併用

・会員講演Ⅱ下山健夫

『留学の勧め／若者よ立ち上がれ！』

七月例会（二十日）Zoom併用

・ゲスト講演Ⅱ『臓器を作りたい！』

東京慈恵会医科大学 特任教授 小林英司氏

八月（夏休み）

九月例会（二十八日）

・クラシックギター演奏会 演奏：ソワサンデイス

十月例会（十九日）Zoom併用

・会員講演Ⅱ三春

『金と命は惜しむな』

佐野洋子の生きざま、死にざまを辿る』

十一月例会（十六日）Zoom併用

・会員講演Ⅱ木村敏美『インドネシアのバティック

（実際の制作場面を映像で）』

十二月例会（二十一日）Zoom併用

・会員講演Ⅱ八木信男『我が人生の3M』

・退会Ⅱ首藤静夫さん、曾山清徳さん

高橋由紀子さん、富岡喜久雄さん

原田信さん、平尾富雄さん

二〇二三年は、会員数五九名でスタートした。

コロナ禍により、昨年に引き続き、自宅からオンラインで活動するスタイルが定着した。遠隔地或いは健康面から教室に来られない会員にはむしろ参加の機会が増え、予想外の新しい展開となった。それを発展させ、現在では教室での活動の中に一部オンラインを併用、教室組・オンライン組が一緒に楽しんでいる。今後さらさらに新しい取組みに挑戦し、サークルの輪を広げたい。

（事務局 児玉寛嗣）

昨年のクラブ活動より(2)

OB ペン会員の講演は面白い



11月「インドネシアのパテック」
福岡の木村敏美さん パテック制作現場の
ビデオは Mr.木村の労作 ♡ご夫婦の共演♡



12月「我が人生の3M」
大阪の八木信男さん

OB ペン会員はもちろん飲み会大好き



会 員 名 簿 (五十音順)

氏 名	主 な 活 動 分 野
浅井 壮一郎	サロン21
新井 良侑	エッセイ
安藤 晃二	書こう会、英読会、俳句、川柳、フォト句、サロン21
池田 隆	書こう会、エッセイ、サロン21、読もう会、写真
池松 孝子	書こう会、エッセイ
市川 忠夫	書こう会、英読会、サロン21
稲宮 健一	書こう会、エッセイ、川柳
上田 信隆	エッセイ、サロン21
宇敷 辰男	書こう会、エッセイ
内田 満夫	書こう会、エッセイ、会員談話室
大越 浩平	書こう会、エッセイ、フォト句
大津 隆文	書こう会、エッセイ、俳句
大塚 喜子	掌編小説、書こう会、読もう会
大月 和彦	書こう会、読もう会、フォト句
大平 忠	書こう会、エッセイ、サロン21、会員談話室
大野 <small>たのし</small> 暲	川柳、エッセイ、サロン21
大森 海太	書こう会、エッセイ
川口 ひろ子	書こう会、エッセイ
川村 邦生	エッセイ
木村 敏美	書こう会、エッセイ、絵
荒野 <small>あらの</small> 喆也	書こう会、エッセイ
児玉 寛嗣	書こう会、エッセイ、掌編小説、英読会、サロン21
清水 勝	書こう会、エッセイ、掌編小説、読もう会、フォト句
志村 良知	書こう会、エッセイ、読もう会、俳句
下山 健夫	エッセイ、サロン21、英読会、フォト句
杉浦 右蔵	エッセイ、サロン21
塚田 實	書こう会、掌編小説、川柳、絵
都甲 昌利	書こう会、エッセイ

氏 名	主 な 活 動 分 野
豊澤 幸平	書こう会、エッセイ
内藤 真理子	書こう会、エッセイ、掌編小説、読もう会、俳句
長尾 進一郎	書こう会、俳句、フォト句、写真
中村 晃也	書こう会、俳句、フォト句、写真、掌編小説
西川 武彦	エッセイ、掌編小説、サロン21、川柳、写真
西川 知世	俳句、エッセイ
新田 由起子	書こう会、読もう会、俳句
野上 浩三	書こう会、掌編小説
野瀬 隆平	書こう会、掌編小説、サロン21、読もう会、英読会、写真
長谷川 修	書こう会、エッセイ
馬場 真寿美	書こう会、エッセイ、掌編小説
浜口 須美子	エッセイ、俳句、写真
浜田 道雄	書こう会、エッセイ、読もう会、川柳、写真
一杉 秀樹	書こう会、エッセイ
福本 多佳子	読もう会、掌編小説、絵
藤原 道夫	書こう会、エッセイ
松浦 純子	書こう会、エッセイ
松浦 俊博	書こう会、エッセイ
松谷 隆	書こう会、エッセイ、掌編小説、読もう会、川柳
松田 昌康	フォト句、エッセイ、俳句
三 春	書こう会、エッセイ、読もう会、川柳
宮原 由利子	エッセイ、読もう会、俳句
森田 晃司	サロン21、英読会、エッセイ、俳句
八木 信男	エッセイ、川柳、絵、会員談話室
矢澤 正二	エッセイ、フォト句、写真
山縣 正靖	エッセイ、サロン21、川柳、絵
吉田 真人	書こう会、エッセイ

▽『悠遊』三十一号をお届けします。今号から小生は編集長を仰せられ、また編集陣に松浦純子さんも加わって頂きました。編集には未熟な素人の集まりで、『悠遊』の伝統を引き継ぎ、無事発行にこぎつけるかと心配の連続でした。戴いた原稿は細心の注意をもって取り扱ったつもりですが、校正の過程での誤字脱漏等の小さなミスや見落としは、『校正（後世）恐るべし』とご容赦下さい。（長谷川修）

▽編集委員になり四年目を迎えました。相変わらず文才は開花せず、皆様の作品に感嘆するばかりです。毎年編集委員を卒業したいと思う時、素晴らしい画が届けられます。プロの画家と見紛う程の色彩と才能溢れる力作ばかりです。皆さんの画に関われる事はアート担当の喜びです。

（宮原由利子）

▽『悠遊』三十一号には見習いとして編集作業に携わりました。顔を存じ上げない方からの作品も拝読し、また心を込めて執筆された文章を素人の私がどこまで校正していいのか迷うことが多々ありました。そこで入力ミス、転換ミス、形式ミスなど明白な誤用以外は筆者の個性と考えることにしました。性格も感覚も全く違う三人で編集した『悠遊』三十一号。三位一体の味をぜひご堪能ください。（松浦純子）

企業OBペンクラブ同人誌

『悠遊』第三十一号

二〇二四年四月一日発行

発行者 企業OBペンクラブ会長

吉田 眞人

印刷所 新灯印刷株式会社

東京都新宿区水通町二一五（〒一六二〇八一）

TEL 〇三―三三六〇―九二六一

連絡先 企業OBペンクラブ事務局

児玉 寛嗣

Eメール: kgobpenclub@gmail.com

クラブURL: <http://www.obpen.com>

入会案内はクラブURLホームページの「入会のご案内」

見学希望・入会希望は事務局まで

口座 三菱UFJ銀行海老名支店（409）

企業OBペンクラブ（普通） 1086096

棠籠りや
梅雨の季節と
なりにけり

下山 健夫



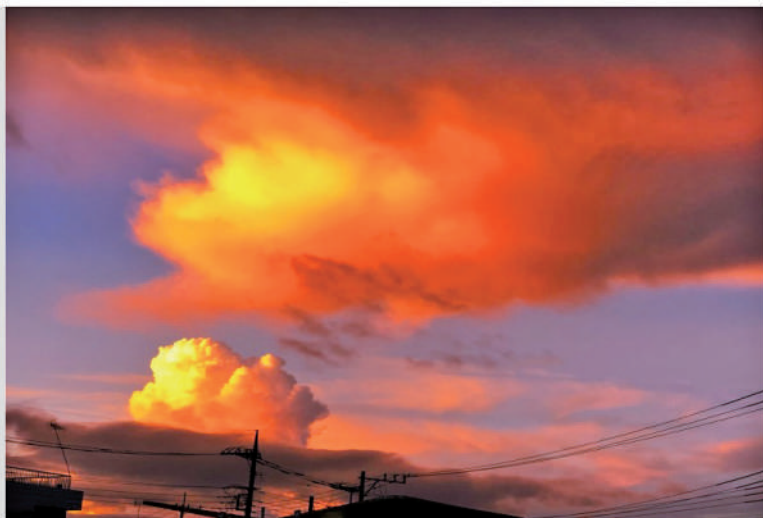
連日の
猛暑堪らず
尻冷やす

松田 昌康



炎越の
名残の雲や
夕陽燃え

安藤 晃二



LRT 开通
秋思に決意す
免許返納

大越 浩平



外苑の
銀杏並木よ
永遠とわにあれ

中村 晃也



古民家の
温もり嬉し
冬の朝

長尾 進一郎



安藤 晃二



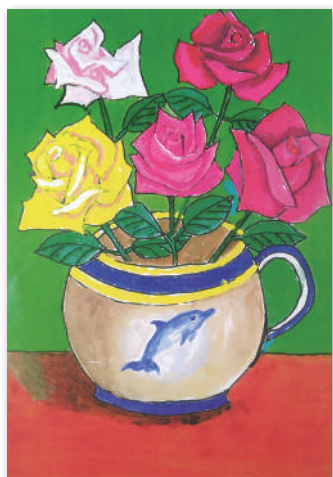
塚田 實



木村 敏美



福本多佳子



山縣 正靖